

東国太平記

## 凡 例

本書は、勝間田佑啓家文書「東国太平記」（日立市郷土博物館蔵）を翻刻したものである。「東国太平記」という表題の書籍としては、杉原親清著、國枝清軒校正による上杉景勝の武勇を記録したものがあがるが、勝間田佑啓家文書の「東国太平記」は、それではない。天正年間における佐竹、芦名、伊達、岩城、最上などの諸豪の興亡をまとめた『新編東国記』（「新編東国太平記」ともいう、正徳二年（一七一二）発行）という書物があり、本書は、その中から佐竹氏に関する記述を取り出し、さらに佐竹氏や小野崎氏など多賀地方の有力者の記述を追加したものである。本書の成立時期に関しては、文政年間の執筆と思われる箇所が数か所あるが、確かなことは分からない。作者についても不詳である。

文字については、原則として次のようにした。

- 万葉仮名は平仮名にした。
- 片仮名と平仮名は原文のままにした。
- 漢字は原則として現在の字体とした。ただし、人名や法名・戒名は原文のままとした。地名は現在使われている表記としたが、現在の表記が確認できない場合は、原文のままにした。
- 原文についているルビは、平仮名で表記した。
- 返り点（レ点、一、二点）は原文のままとした。
- 原文で、写本後に修正が施されている箇所は、修正後の文字を採用した。
- 虫食いなどで判読不能な文字は□や「」で表した。
- 読みやすくするため、原文には無い句読点や「・」を付けた。
- 【】の中の数字は、原本に書かれているページ番号である。原本と比較する際のために残しておく。

本書の解説・編集は文書調査会（藤田薫、小勝康弘、中川庸雄）が行なった。

二〇一八年九月

# 目次

凡例	1
東国太平記 卷の壹	5
目録	5
常陸国久下田合戦の事	7
常州田野合戦の事	7
上州藤岡にて佐竹と北條対陣の事	8
奥州高倉合戦の事	9
東国太平記 卷の貳	11
会津勢退散の事	11
伊達と葦名和睦の事	11
常州多賀郡古鋪田合戦の事 附竜虎山裏切常隆敗北の事	12
東国太平記 卷の参	15
猪苗代盛国追 <sub>二</sub> 出其子盛胤 <sub>一</sub> 奪 <sub>二</sub> 領地 <sub>一</sub> 事 附盛國謀叛の事	15
摺上原合戦の事 附タリ金上佐瀬討死の事	17
政宗三ツ橋逗留の事 附田原谷大平門沢ノ城落ル事	19
富田平田属 <sub>二</sub> 米沢 <sub>一</sub> 附間者の事	20
東国太平記 卷の四	21
葦名義廣没落の事	21
久保田合戦の事	21
須賀川籠城の事	22
須賀川諸士盟約の事	23
矢田部伊豆守議スル <sub>レ</sub> 討 <sub>二</sub> 守山筑後守ヲ <sub>一</sub> 事	23
須賀川合戦の事	24
東国太平記 卷の五	26
守山筑後守叛逆の事 附タリ須賀川落城の事	26
籠城の諸士討死の事	27
盛義ノ後室所々沈落 附死去の事	28
遠藤雅樂頭妻投 <sub>レ</sub> 身事	28
竜虎山城主代々の事	29
小山小治郎竜虎山ノ城主と成事 附菅股掃部介竜虎山を乗取る事	31

奥州高貫合戦の物語の事	31
義宣羽生田初陣の物語りの事	31
大北川合戦物語り	31
佐竹義宣江戸但馬守ヲ討取る事	32
東国太平記 卷の六	
佐竹義宣日本六大家ノ内え入ル事	32
竜虎山信濃守隆通奥州北佐え左遷の事	32
梶原美濃守奥州植田ノ城主ト成る事	33
車古城の事	34
勝沼隼人が事	35
佐竹義宣關州ニ秀事	36
東国太平記 卷の七	
車義照上神谷え潜居の事	37
佐竹義重の三男能化丸岩城常隆ノ養子ト成る事	37
大窪兵藏水戸城を奪んと謀る事	38
車領分の事	39
車両家の事	40
佐竹義宣参ニ向小田原ニ一 附義宣先祖の事	41
東国太平記 卷の八	
額田城陥没の事并加納落城の事	42
佐竹勢敗北の事并河井左太夫昭道ヲ謀リ見る事	43
東国太平記 卷の九	
昭道廃城於ニ天徳寺一怪意并那須え退出の事	47
昭道那須え着事并雲巖寺仏舎利の事	48
昭道火難を遁れ那須退口并日光山え趣く事	48
昭道仙台え入悪馬の事 附佐竹ト昭道和睦大坂陣の事	49
東国太平記 卷の十	
忠輝卿兵糧不足の事并額田昭道越後え入る事	51
額田昭道水戸え再入の事	52
常州多河郡楡形の城の事并山野尾城の事	53
楡形山ノ尾両城の由来	54
楡形二代目の事	54
山野尾城開基	54

東国太平記 卷の十一

山野尾七代目の事	56
山野尾八代目	56
山野尾九代目の事	56
山野尾十代目の事	57
同十一代目	57
山野尾十二代目の事	58
山野尾十三代目の事	59
山野尾十四代目の事	59
常州多河郡山野尾城主の事并坂上館持次ニ山ノ尾家中附の事	59
鹿嶋三郎成朝友部河ニテ討ルゝ事	60
東国太平記 卷の十二大尾	
山野尾家中并知行附の事	61

目録

第一 常陸国久下田合戦の事

常州田野合戦の事

上州藤岡合戦の事 附佐竹ト小田原北條対陣の事

高倉合戦の事

第二 会津勢退散の事

伊達ト葦名和睦の事

常陸多賀郡豊田合戦の事 附竜虎山裏切岩城常隆敗北の事

第三 猪苗代盛国追二出 其子盛胤一奪二領地ヲ一事 附盛國謀叛の事

摺上原合戦の事 附金上盛備佐瀬平八郎討死の事

政宗三ツ橋逗留の事 附田原谷大平門沢城陥事

【02】

富田平田属二米沢一 附間者の事

第四 葦名義廣没落の事

久保田合戦の事

須賀川籠城の事

須賀川諸士盟約の事

矢田野伊豆守議レ討ニ守山筑後守一事

須賀川合戦の事

第五 守山筑後守叛逆の事 附須賀川落城の事

須賀川籠城ノ諸士討死の事

盛義の後室所々沈落ニ付死去の事

遠藤雅樂頭妻投レ身ヲ事

竜虎山城主代々の事

小山小治郎竜虎山城主ト成事 付菅股掃部介竜虎山ヲ乗取ル事

奥州高貫合戦物語の事

佐竹義宣羽生田初陣の物語事

佐竹義宣江戸但馬守ヲ討取ル事

第六 佐竹義宣日本六大将の内え入事

竜虎山信濃守隆通奥州北佐え左遷の事

梶原美濃守植田城主ト成事

車古城の事

多賀郡古敷田合戦物語の事

勝沼隼人の事

佐竹義宣闔州二秀事

第七 車義照上神谷え潜居の事

【03】

佐竹義宣舎弟能化丸岩城常隆養子卜成事

大窪兵蔵水戸城ヲ奪んと謀る事

車領分の事并車両家の事

佐竹義宣参二向小田原二一 附義宣先祖の事

第八

額田陪役の事并加納落城の事

第九

昭道廃城於二天徳寺一怪意并雲巖寺仏舍利の事（那須え退出の事の誤り）

昭道那須へ着事并雲巖寺仏舍利の事

昭道火難を遁ル那須退口并日光え趣事

第十

昭道仙台え入悪馬の事 附佐竹卜昭道和睦大坂陣の事

忠輝卿兵糧不足の事并額田昭道越後え入る事

額田昭道水戸再入の事

常州多河郡櫛形城の事并山野尾の城の事

櫛形の城二代目の事

第十一

山野尾開基の事

折笠村三郎天神宮の次第并棟札の事

山野尾七代目ヨリ十四代目迄の事

第十二

山野尾家中知行附の事

常州多河郡山野尾の城主并坂上城主の事

鹿嶋三郎成朝友部河ニテ討ル、事

目録おわり

【04】

文政十二年八月 日写之

## 常陸国久下田合戦の事

天正十年の秋、常陸国久下田の城主水谷入道蟠龍はんりゅうと云者あり。下総の国の領主結城政勝の旗下也。然るにいかなる宿意かありけん、下総の国の住人竹田治部少輔と言者、久下田に押寄ると風聞しければ政勝の方より加勢三百余騎を指越こぼる。蟠龍軍士等を集て評議しける。先総堀そうぼりの北の大城戸に騎馬の侍五拾人、雑兵ざうへい五六百計にて陣を取り、一合戦して敵強進懸つよくらバ態はざと追手迄引退せべし、左あらんバ敵勝に乗て追付来るべし。又芳全寺の門前に打出敵の塞せきべし。其時先に引たる者共ハ追手より取て返し敵を我前に追寄、中に包んで一人も不漏むと討取とべし。結城ゆっきよりの加勢ハ東の城戸に百騎、南の城戸に百騎、某が後に百騎控ひかえ、某疲なば入替るべし、と下知せらる。斯【105】て程なく竹田勢二千余騎押寄、関とを嚙と揚攻かゝれば、身方も鯨波ヲ合せつゝ暫が程ハ戦ひける。兼て謀り事なれば、水谷方の先勢防兼ねたる風情にて追手を指て引退そげバ、敵逃さしと追来る。其時芳全寺に控へたる伏兵一度に起て打て出る。門前より坂中まで相支多、是を見て追手引たる先勢取て返し、一文字に敵勢を追立てば、蟠龍得たりと云ふまゝに鋒を揃まて斬きつて出、追つ捲つ切立られしかば、敵悉く敗軍し、跡に引んとすれば芳全寺の前に控へたる軍兵ども、透間もなく揉立もる。東南の方へ逃んとすれば、結城勢待受射臥あ截倒たセバ、逃んとするに路なければ池の中へ飛入と泥とにまみれて死もあり。暫時の軍に竹田方の軍兵八百余人討れける。治部少輔ハ匍々の体にて漸々下総に落行、再久下田に寄さりけり。彼水谷氏の先祖ハ俵藤太藤原の秀郷より出たり。秀郷の子を千常ちんじょうと云。其子公脩、其子文行、子脩行、其子行景、其子景親、其子景頼と云。景頼に四子あり。長子を能直のちと言い一一法師ふし。大友氏の祖也。源頼朝に仕て寵あり。従五位下豊前守任ず。次を重能と云。吉澤氏ノ祖也。次を仲教と云。田村氏の祖也。次を親實と云。水谷氏の祖也。田村仲教子を仲能と云。其子を重輔と云。重輔後に水谷氏と称す。長享元年常陸国真壁郡下館の城に築て住居す。其子孫代々相続て蟠龍に至れり。蟠龍の母大永三年正月十七日子ノ刻靈夢の告有て懐妊し、同ク四年七日の刻に生る。左りの眼に重瞳あり。七歳より劍術射御けんしゆつを学ひ、八歳に及んで師に劣らず。九歳にして法華經を習、日々に一卷を誦す。十歳にして万事の理非を弁する事常の人に勝れ総すべて諸芸を学で奥旨を究すと云事なし。天文八年三月蟠龍十七歳にして、結城政勝ニ従て出陣し、武州大串の合戦に首四十六を得て、誉有しより、数度の高名勝あけて計べからず。【106】同ク十四歳十月廿日下館の城ハ要害の地にあらざとて久下田ニ城を築き住居せられしとかや。

## 常州田野合戦の事

其頃常陸国田野城主羽石内蔵允盛長と言者あり。始ハ結城晴朝に随ひけるが、いかなる故にや同国笠間に属ぞくしければ、晴朝これを憤り、旗本の水谷蟠龍を喚んで、羽石盛長当家ヲ背き笠間に従ふ事表裏の行ふるまい奇怪なり、時日移さず家人等を遣して攻べきなれとも、彼羽石ハ近国に隠なき



勇士なれば、若討損んじなば永き弓箭の恥辱なれば、願くハ御辺彼地に発向し討て賜れと頼れければ、蟠龍聞て夫ハ最易き事に候、某馳向ひ候ハゞ二三千の弱兵をバ即時に蹴散して、羽石か首を刎事掌の内候ト荒言し、頓て私宅に帰り、天正十三年三月廿七日の夜半に久下田を打立、翌廿八日の寅の刻に田野二着。羽石兼て此由を聞ぬれハ、笠間か方に援兵を乞、近辺の諸士を駆催し、三千余騎にて籠城す。斯如く城中多勢の由結城に聞へければ、助勢二百を差越る。宇津ノ宮の益子重綱入道睡虎も晴朝の由緒とて殊更近隣なる故、加勢にそ来りける。水谷入道蟠龍、結城勢と重綱入道睡虎に向て、早速の助勢過分に候、去乍纔三四千の駈集勢ハ某が手にたらず候、各ハ東西の山に登り御見物あれと云すて、蟠龍一文字に駈向へば、手勢も援兵も劣しと相つゞき二三の城戸を責破り、揉にもんで攻戦ふ。羽石盛長方にも粉骨を竭し防といへとも、叶はずして三日三夜の戦に城兵三千余り或ハ討れ或ハ落失、残兵纔三百にもたらず。其時羽石内蔵允盛長、今ハ是迄也と思ひけん、表の櫓に欠上て、大音揚名乗けるハ、盛長か運命も今日を限に究候と覚へ候。夫に付てハ云い甲斐なき端武者ト戦て死すならバ【107】余り意根に存すれば、生箭の思ひ出に水谷入道蟠龍殿の手に懸り黄泉の旅に趣度候と呼りければ、蟠龍呵々と打笑、羽石殿の御心底感し入て候、左程に思われ候ハゞ某が手にかけ極楽浄土に引導して参らせん、とくく出られ候へと答へければ、羽石盛長大きに悦、月毛の馬に打乗て静々と打出ける。羽石今年五拾八歳、水谷ハ六拾三歳、何も近国に名高き剛強の老武者、何の人交もせず只二人馬上にて互に太刀真甲に指かさし討てかゝるバ、何れ劣らぬ手爪利、請つ開つ半時計り打合けるが、寄や組んと云まゝに互に太刀を投捨て馬乗せ無手と組、曳やくの声を出し暫押合投逢両馬の間に落重なる。水谷蟠龍力勝けれバ何なく羽石盛長を取て押付首搔切て指揚たり。其外の城兵等思ひくゝに討死し、又ハ行方知ず落失て四月朔日の未の刻に落城にそ及ける。蟠龍、羽石が首を結城に贈られければ、晴朝悦喜不斜。羽石盛長か所領の内四百貫の地を蟠龍に与へ、宇津宮にて百貫を睡虎に授げ、其余ハ自領しけり。

#### 上州藤岡ニテ佐竹ト北條対陣の事

天正十三年四月、長沼の皆河山城の守か城を調儀の為、小田原北條氏政嫡子氏直父子、馬を出され藤岡へ陣を張り給ふ。佐竹義重後詰の為出勢あり。然所に敵も味方も互に切所を構へ、佐竹勢ハ大和田に在陣す。壬生上総介、佐竹方を背き小田原方になりしかバ、佐竹衆と足軽せり合度々なり。壬生上総介内本馬勘解由と黒川晴なる高名いたし、兩人なから感状を被下、互に難所にて寄手合戦すべき様もなし。百日に及ぶ長陣なれば、諸軍勢屈し、若侍共陣屋の前に馬場をいたし馬を乗る。佐竹衆も退屈して陣屋の前にて花火をくゝり夜々花火を立て慰ける所に、北條奥陸守方へ佐竹義重【80】の家臣義久方より扱を入、互に牛王血判の状を取りかわし、和談相調ひ、佐竹衆人数を打入れけれ。所に、小田原衆、佐竹衆の行列を見物せんとて岩舟山へ上る。佐竹勢是を氣遣して又引返す。依之小田原方の人々山より下るべしと下知にて皆々山より下りければ、

佐竹衆も引入れける。

### 奥州高倉合戦の事

同年の八月廿六日、青木修理ノ亮ヲ使として政宗仙道に發向し、小手森の城ヲ攻落されし後、打  
続て小浜・四本松ノ城をモ落ければ、二本松義繼ハ逆も懸合の軍叶ふじとや思ひけん、偽て降参  
し、輝宗を害ト雖、即時に政宗に討れければ、今ハ会津に属したる城としては、須賀川・高玉・阿  
子島辺計りなれば、会津四天王の者共此事を口惜思ひ、同年の霜月中旬安積郡に打出て、同十四  
日伊達方に属したる中村の城ヲ攻落し、本宮・高倉辺の城を悉に責んとす。政宗此由を聞て小浜  
より岩津野に出、爰にて方々に軍勢を分たる。先ツ高倉の城にハ富塚近江守・伊藤肥前守・桑折  
攝津守等に旗本の鉄砲三百余挺を添て籠らる。本宮の城にハ中嶋伊勢守・濱田伊豆守・瀬上中務  
少輔・桜田右兵衛、玉の井にハ白石若狭守等を大将として各軍勢を分ツ。伊達藤五郎成實ハ二本  
松の押へとして渋川の城に居たりけるが、政宗岩津野に出らるゝ故、小浜に残る軍勢も少ければ、  
早々来たるべしとの指図ゆへ、己か手勢多半ハ渋川に残し置、其身ハ四本松に廻り、行浜に行け  
るに、政宗早や岩津野に出馬せられ、成實来りなバ其勢を分ケ爰にも置、自身ハ岩津野に来るべ  
きよし云置れたるニ因て、内馬場日向守・青木備前守以下三拾騎を残し置て成實ハ岩津野に行、  
政宗に對面して申されけるハ、前田澤兵部少輔ハ【9】先日義繼を討たる日より味方に属しけれ  
共、又心を翻し会津方に一味すれば、定て会津勢ハ彼者を案内として高倉か本宮かに働べし。さ  
れば汝ハ今夜より彼辺に向ひ、明日敵寄来らん、する用心すべしと下知せられければ、成實少  
しも猶予せず岩津野を打立、其夜ハ糖塚といふ所に宿しける。此事会津に聞へければ、白川・須  
賀川・岩城左京太夫常隆よりの加勢の人々一同に談合し、敵手々に勢を分て防戦の支度と聞へけ  
れば、此方よりも二手に分て会津勢に岩城勢を合、前田澤兵部少輔を案内者として高倉に向ふべ  
し。相残る勢ハ直に本宮に向て政宗を中に取籠、雌雄ヲ一時に決せんと議定して、同十六日前田  
沢の南の原に打出て尺地も不<sub>レ</sub>残サ陣を張。政宗此よしを聞て、岩津野を打立其夜本宮ニ陣を移さ  
る。明れば十七日の未明に、会津勢も前田沢を立て高倉に押寄る。此事本宮ニ聞へければ、政宗  
も卒に勢を二手に分、一手ハ伊達藤五郎成実を大将として高倉街道の山下迄指向ふ。一手ハ片倉  
小十郎景綱・伊達上野亮を大将として太田原に向わしめ、高倉の軍の様子ニ随て助合すべしト下  
知せらる。然る所に会津勢案の外に多勢なりければ、高倉の敵にハ目もかけず街道を通に、本宮  
に打て掛らんと猶予もなくぞ通りける。伊藤肥前守・富塚近江守を見て如何に目に余る程の敵  
にもせよ其まゝにて目の前を通さんやとて一度に打て掛れば、会津勢横合の敵を防んと少しため  
らいける所に、岩城常隆よりの援兵の内、奥州高貫の高貫三河守と云者精兵の手垂六百余人を相  
具し一陣に進ミ、下知しけるハ敵陣の先に進むハ足軽なれば目にも懸ず、高く指揚て繰箭に射よ  
と云けるに、元来田舎者なれば弓矢の用意こそ綺羅々敷ハ見へね共、拳太なる鎌矛弓のつく【10】  
打たるに、猫潜と云大雁股の箭を打番一度にバつと放しければ、群立鳥の羽音の如く虚空に暫し

鳴渡で敵陣に落掛りけるに、兜の鉢籠手の機会中所をかけずふつとぞ射貫ける。然れども敵は少しひるんで見へければ、高貫三河守得たりやかしこと一度に太刀抽連切てかゝれば、其中に窪田十郎と名乗り奥州菊田郡窪田の城主伊達政宗方の茂庭五月に打てかゝる。五月も心得へたりと太刀引抜て一と請留、請つからし秘術を尽して戦ひけれ共互に勝負も見へされば、馬を乗せ太刀投捨て攫むつと組くみ三転四あつはれ落ちろびけれども窪田十郎力強かりける故、茂庭五月を取て押へ首搔落し立上れば、通勇士と見へにける。三河守ハ長刀にて能武者一人伐て落す。上遠野因幡守後二弥生下号上遠野城主敵二人討取ける。是を軍の始として会津岩城の軍兵共、勝に乗て敵を山上に追集、一息ついて控たり。本宮にてハ高倉に軍ありト見へて 関 矢叫矢叫の音夥ければ、急ぎ高倉に後詰せよとて、濱田伊豆守・白石若狭守・高野耆岐守等に鉄砲百余挺指添へて高倉にぞ差向らる。斯る所に一方より向ひたる石川・須賀川の者共ハ濱田・白石等を見かけて跡を慕ひけるが、余りに小勢なれば合ぬ敵とや思ひけん、強て追ず引分れけるが、太田原が多勢控へたるを見て一文字に打て掛る。濱田・白石ハ跡をバ敵に隔へたてられぬ、此上ハ伊達成實が陣に馳加わらんと馬を進む。爰に成實が陣中に、下郡山内記と云老武者あり。彼ハ輝宗の鳥銃將にて度々の高名を究たる者なりしが、頃日聊の事有て政宗に勘氣を蒙て成実か許にありしが、小高き所に打上り敵の方を見わたすに、濱田・白石等と覺へて旗少々さゝせたる執たての跡二町計り隔て追て来る敵に鉄砲一ツ二ツ打合せ、相引にして此方に直に馳来る。下郡山内記此由を見るより其まゝ馬を引返し身方の陣に向、早【二】敵合近候、油断し給ふなど叫ければ、成實此由を諸勢に下知する所に濱田・白石等駈附て成實が陣と一ツになる。右の敵身方二ツに分れ高倉と太田原にて合戦数刻に及ぶ。先に濱田・白石等を追棄て太田原ニ向ひたる石川・白川・須賀川ノ勢ハ、太田原の敵をバ打捨直に本陣に伐て掛れば、如何したりけん本陣むらくと駈立かたてて既に敗せんとしける所に、原田左馬ノ亮・伊達元安・同く上野助・同美濃守・同彦九郎以下の雄士踏止ゆうしふみり向ふ者に渡り合、多の敵を討取けるゆへ本陣少しも崩れず。伊達成實ハ跡をバ石川・白川の者共に隔られ、前にハ会津・岩城勢を引受ければ、只一筋に討死と思ひ定めたりにけるに、下郡山内記暫虎口をくつろげ、敵の機に乗て軍し給へと云しかば、成實今年十八歳勇氣拔群なる若武者なれば、耳にも更に聞入ず、勢を一所に屯たむろし静ひかへに控て待居たり。会津勢ハ□本宮に懸らんとしけるが、間近く成實が控へたるを見て、小勢なれ共事の体侮ていあなとり悪や思ひけん、人馬の息を休めてためらい居たり。斯る所に成實が陣より伊場遠江守と云る七十三歳の老武者只一人進出、会津勢の中に翔入二人と太刀打しけるが一人と引組取て押へ首をとる。是を軍の始として、成實・濱田・白石等弓手馬手に開き合せ、東西二駈破り透間もなく揉立もみけるに、さしにも猛たけき会津勢成實が勇力にて碎くだかれ、山下より南五町計り引退く。成實が家人羽田右馬助群を離れて進けるに、会津勢の中より花麗やかによるふたる武者羽石を目かけ駈寄鎗を以て丁と突ければ、右馬亮心得たりと馬を寄、前に駈あましけるに突迦はつし鎗ヲ引取る所を右馬介透さず伐て落し首を取る。同く成實が家人中野八郎兵衛とて無双の兵ありけるが、太刀を振、向者を幸ひに式拾余人切伏せける。後にハ、太刀の刃が齧さ子の如くになりけるゆへ多ハ敲殺たきして捨にける。牛坂左近・萱場源兵

衛・北新助も太刀【二】打の高名す。斯て双方入乱れ追つ返つ相戦ふ。勝負もいまたわからざる間に、夕陽既に春を見て今日の軍ハ是迄とて、会津方一勢く引立けれハ、政宗も軍勢勞たれば明日こそ雌雄を決せんとして相引にして岩津野に陣をそ取れける。

続撰東国太平記 卷の巻終り

## 東国太平記 卷の貳

### 会津勢退散の事

去程に会津四天王の者共ハ明日未明より本宮に勝負を決し、其後二本松に籠たる者共に力を合べしと議しけるに、米沢勢退後たる者共一兩人紛居て、此沙汰を風聞夜半に岩津野に立帰りし由を右と告げれば、政宗左落葉今宵より手当の用意すべしとて、山路淡路と言者を成實か方へ遣し、敵にハ斯る僉儀の由を聞伝へたり。汝今日遠ク味方を離れ、敵を前後に受て敗北せさる。剩敵数多討取り高名せし事奇代の挙動感じ思ふ処也。人馬の疲労せしむといへども、明日ハ敵本宮に寄へけれバ今夜の中に本宮に行、明日寄来らん敵を待受、戦ふべしと自筆の文を送らる。淡路夜半過る頃漸成實が陣に至り、事の子細を委語り文を成實に渡しける。されとも夜既に深更に【13】及しかば明るを待て東雲の靄黓頃、成實本宮の城に入て寄る敵を待居たる。然る所に会津方の運命の竭る兆にや、佐竹よりの援兵の大将、佐竹義政多河郡友部城主と言者、天正十三年霜月廿七日夜中に頓死したりけれバ、会津四天王の者共、頼み思ひける義政斯なる上ハ、彼手の者共ハ本国に帰るべし、相残る面々の勢計にてハ強敵に向て牛角の軍叶ふまじ、一先黒川に引返し、軍勢の機を助て後日こそ軍ハすべしとて、陣々に牒し合せ本国にそ引取りける。伊達方にてハ今や敵寄ると相待ける所に、本宮より付置たる斥候の者共馳帰り、如何なる子細にや会津勢を始諸手の輩、前田澤兵部少輔共に引退き候と告けれバ、諸將不思議の事かなとて追々に武見を遣て見せけるに、弥敵引退けれバ、其日政宗本宮に打出、昨日の軍の事を尋問、それくに感書を与へ、或ハ当座の褒美を給り、本宮を立て岩津野に移り二三日逗留有りけれとも、敵の奇べき沙汰もなければ、頓て小浜に帰陣せられ、彼此の忽劇に打紛今年も程なく暮にけり。

### 伊達と葦名和睦の事

天正十六年六月上旬、葦名義廣仙道安積郡に出張して伊達政宗と一戦を遂、両家の雌雄決すべき由言送らる。佐竹義重も葦名に力を合せんとて、岩城左京大夫常隆よりの加勢五百余騎と牒合せ、同ク安積郡に出張す。政宗も同月十二日宮の森を立、二本松の杉田と言処迄出られける。斯

る所に、岩城常隆ハ、輩名・伊達両家ともに骨肉ノ好あれば、如何にもして両家和睦せらるゝ様にと、義重の妹婿石川大和守昭光と相談せらるゝ。昭光も何れ外ならぬ中なれば、誠に累年両家の確執何の不孝か之しなん、自今以後互に憤りを止て和睦あらん事、各希所に候とて、常隆の郎等白土攝津守常州多賀郡山小屋ノ城主を会【一六】津・佐竹の両陣に遣し、志賀閑釣齋を政宗の陣に遣し、申ける様ハ、事新候得共、互に骨肉の御中とし、かゝる雌雄の御争に万民不<sup>レ</sup>安死傷に心を悩事痛ましく覺へ候条、向後御和睦あるべくハ皆々大幸なるべしト、異見せられければ、思の外に各承引有て、同八月上旬双方より名代を郡山に出し、和睦儀をぞ執おこなわれける。昭光も政宗の許二行て対面せらる。佐竹よりハ小野崎彦次郎と言者を政宗の方ニ遣しける。右の和睦調ひければ、各陣所を引払領国さして帰られける。

#### 常州多珂郡古鋪田合戦の事 附竜虎山裏切常隆敗北の事

同年の九月下旬、佐竹義重威権強大になり、岩城ハ我邦城の仇なれハ侵略すべしとて、岩城常隆へ戦書を送て曰。足下の大父親隆在世の時一戦に打負和を乞成を求、愛宕伊師町の台にて会盟し、久慈以北の采邑を割、和睦の証に獻せしハ、多の士卒を失わん事を思量してなり。其時無念骨髓に徹し忘るゝ時なし。故に会稽の恥を雪かん。且ハ戦死者の者の弔軍として再び勝負を決し、雌雄分んと欲するに依て、不日ニ発向すべき旨其支度有べしとぞ書たりける。岩城常隆大二周章し群臣議しければ、志賀主水・上遠野佐渡突出して曰、君何がゆへ武道を忘れ佐竹義重が戦書に臆し臣等をして恐懼に及ハせ給や、仮令義重孫呉か兵を練り、関八州の諸将援兵となり向ふ共、何の恐れか是あらん。彼ハ是乱を救ひ暴を誅す義兵に非ずして、他の地を利用する貪兵なり。我君敵を退んとならバ忿兵の氣を失ハす。士卒ハ熟加練なる熟か不貞なると云を察し、君ハ運籌決勝の智を回し、臣等わ先登踏陣の勇を励ミ、釣屏木偶の謀を以て一戦に駈立、雌雄を決するに何の痛か是あらん。敵に制せらるゝ時ハ軍利なし。制する【一七】を以て上策とすと云へり。去来々出馬あるべしと勸立られれば、是非なく竜虎山・牛淵の両陣へ飛檄を以て催促に及びける。斯て佐竹義重ハ九月廿八日の夜中に打立、晦日の黎明に古敷田に到着し、背水の陣に慣て大北・白庭の両川を後に当て、其勢五千余騎一足も引せしト羊渡の堅陣を張る。是を見て車義秀岩城の支輔と言を以て、先我を責るなるべしと思ひければ、駒来の坂に砦を構へ、松川帯刀に新妻・下坏等を指添へ、牙城にハ家従の武士、勇悍ある農工商売を新加とし番兵に附、其身ハ宮内備前か屋敷の西塙の前に陣を取り、岩城勢を待所に、程なく常隆二千余騎を引率し、下白庭若宮川を打渡り陣を張る。龍虎山親成ハ内々佐竹属し翻城の約なれ共、常隆か催促に応し態と本道をいとひ、粟野・日棚の山路を越へ、嶋崎今ハ福島より上桜井に出、大北川を打渡り古鋪田今ハ豊田の五本松山の下鹿嶋の前に陣を掛けたり。已に其日空く暮れ、明れば十月朔日の未明より使番入違ひ、両陣一同に鯨波を合せ互に矢軍初れば、敵も味方も入乱れ、討つ討れつ追ツ捲つ責戦ひ千変万化の争ひ、鼙鼓の音ハ乾坤を動し、矢石雨雹の如くに飛、殺気天ニ掃<sup>ハ</sup>山を崩るゝ計りにて面も掉らす戦ひたり。

斯る所に佐竹の陣より小野崎山城守元来ハ佐竹也友部ノ城主・同苗筑後守相賀ノ城主今ハ会瀬と名乗り三百余騎を引卒し輿を揃て打出る。岩城の左陣志賀主水・上遠野佐渡守上遠野ノ城主也二百余騎にて撃向て火花散らして戦ひける所へ、佐竹の子将大窪駿河守大久保の城主・酒出遠江守酒出の城主也三百五拾余騎の精兵を下知し続て進む。是を見て岩城の右陣大高弾正菊田郡大高城主・神谷刑部奥州岩前郡神谷の城主二百余騎を二隊立真一文字に駆来り、爰に尸を埋めよと互に励し励され、縦横無尽の虚々実々離散聚合しゅの術を尽し、鎧の袖を汗に浸しひた、曳々の声をして戦ふ形勢、百千万の雷が一度に霽し如也。総督義重【16】采配打振て八方に下知すれば、岩城常隆七百余騎を魚鱗に備へ掛れくと声を揚、少しも猶予なく鋒を揃へ陣頭に進むを見て、後陣に控へし裨将車兵部太輔義秀多賀郡車城の城主也卯の花綴の鎧置、手掛黒塗兜、四寸に余る白月毛駒に銀覆輪の鞍置せ、三尺五寸の太刀を佩、陣頭に駒を駆寄せ無二無三に攻入れば、佐竹の勇士宇留野玄蕃宇留野の城主・那河弾正那河村の城主大将を討さしと立ふさかつて防戦ふ。車義秀夜刃の勢ひを含み蹄に掛んと駆ちらす。何かわ以て怵べき、矢庭に玄蕃を切伏れば、こわ叶わしと度を失ひ、那河弾正一鞭あて一驂に逃出るを、義秀追掛声を揚、呂父か赤兎馬項禹かりよふせきとめかうすいり騶李方翁か術あつて、嶮岨岩壁へきかく駆る共行先ハ敵の陣、雑兵の死なんより義秀に討るゝハ冥加ぞ、尋常に返し合せて勝負あれ、穢き武士の逃げさまかなと恥しめられ、流石に名をや惜みけん、駒の鼻を引かへす。其はつみに手綱に心やたかひけん、背梁せりようはなれ弾正ハ動と計り真倒まさまかさまに落るを見て、義秀馬より飛下り押へて首搔落し、又馬引寄て乗る所に、親成の士卒鈴木某強引て丙放す矢に義秀眉間に射られ、透迤よろめきながらも気ハ鉄石死物狂ひと流行とも、血しほに眼も瞶くらみければ、今ハ叶わし腹切らんと馬を早め、塙の森に掛入て鎧脱捨、腹十文字に搔切て、森の木の葉と諸共に、散てはかなく成りにけり。舎弟八郎透間もなく兄の生害目につけず、乱軍の中に割て入り、人礫を打ちければ、寄付者もあらさりけり。目差敵ハ佐竹義重父子を討取らんと、太刀真向に指かさし切入る所に、又親成の従兵共引詰く散々に射かければ、八郎蓑毛の如く打かけられ、馬も手負ハ進ミへす、今ハ是迄なりと生害せんと鞍かさニ突立上り、見よや木曾殿の忠臣今井四郎兼平が最期も斯そと、太刀の鋒はつを加へ馬上より落、貫れ死たるを惜まぬ者ハなかりけり。是を見るより跡よりも、大前髪の若武者二騎、同じ毛の馬に乗り、具足もかわらぬ【17】小桜綴、大刀を鞭に打当く敵陣近く大音上、只今是へ進し我々ハ、甲斐源氏の嫡流、武田法性院大僧正信玄の従弟、勝沼主計信正が長男、新藏人正次生年十九歳、同く二男新三位正忠年始めて十七歳、軍ハ今日始めなり、敵に取ても不足ハあらし、我と思ふ人々ハ尋常に勝負あれ、と喚て数百騎に渡り合ひ、正次飛竜の勢をなせば、正忠猛虎のたけりをあらわし、右往左往に伐ちらせば、討るゝ者数十人、有繫さすがの佐竹も其勇悍にや恐れけん。士卒ハ臆して寄付ねば、いて大将見参せんと旗本近く寄る所に、鳥銃の軽卒筒先を揃へて雨よ霰と打かくるバ、馬さへ斃れて起立ぬハ防兼て兄弟ハ、人の手に掛らんより指違わんと鎧拔相互に組付指ちかひ戦場露と消たりしを誉ぬ人こそなかりけれ。爰に於て常隆思やうハ、以一撃十の勇士義秀兄弟、勝沼兄弟も討すれば、我が軍にハ利なきの証也。今又百万の軍兵を増共勝事ハあるべからすと、坐そくらになつて見へければ、志賀主水齒の根を咬、拙き君の採配かな、戦攻

の策はかりごとを知らずんば敵を語らす、分移わかする事あたわすんバ奇を云すとハ、大将を教ル要旨也。羽翼の義秀死たりとて負るに定ル事もなし。勝兵ハ先つ勝て後戦事を求め、敗兵ハ先戦て後勝事を求め、彭樂はうハ腸はらわたを截きてさへ勝事を決したり。陳平ハ傀儡じんまどうを作て漢の高向登城の囲を解き、孔明ハ木牛作て劉備運糧りうひひやうろうの計を輔まく。たとへ五年三年対陣する共貫朽粟陣蔵くわんこそくちんに充、柴標しひやうこう黄榜封記すれバ、兵糧余あつて乏しき事なし。然バ炊骨爨骸さんこつさんかいの惨うれい有べからず。何が故に韓盧いこを走らし、蹇兔けんとを搏つかの勇なきや。卞莊へんそうハ両虎を擒つかにして馬駢べんハ一矢に双鷗を貫く。十人を以て千虎を制するも、只大将の軍慮ぐんりょにありと恥しむれば、常隆勇氣百倍して去来、又備を立直し敵將揆崩し一挙に勝敗を決せじと、貝鏡まいを鳴して突戦す。時分ハ今そど大塚親成、岩【18】城の陣に鳴して火をさへ、裏より回て鯨波を作れば、常隆大に仰天し反忠の者有て裏切すると覺へたりと狼狽斜ならず。折節せつ烈しき風伯余煙四方に吹ちれば、諸卒咽のんで働得す。常隆を始として軍兵とも、岩城をさして敗走す。北きたを追わす、義重ハ牛渕二押寄、拔取べしと下知すれば、逸絶はやまりたる英勇とも潮のこく満々て、牛渕の城に押寄すれば、防兼たる新加共、一支にも及ず落失れば、何の手もなく拔とり、旗を入即好間大隈守を後主とし、凱歌かいがを唱へ義重ハ諸卒を纏まとひ帰陣せり。抑常隆拙くも敗北したる所を以て按するニ、一城の主として、国器の才に乏く賞罰正しからず。将威を失ふか故なり。去れハこそ、将仁にあらずバ三軍親します、将勇あられされバ三将鋭よからすとかや。上下相和せざる故、親成旧恩を忘れ義重に附服し、義秀が死するを見て裏切し、忽に敗北させしも常隆樗散ちよんさんの愚将ぐと蔑ないかし如するもの也と、世人彈爪つまはじきして笑けるとそ。

何レの人か曰、往昔車領に疫癘えきれい流行す。是巫祝ふしやく託すれば、義秀の崇なりと言を信し、義秀生害せし所の塙はらの土を取り、安養院寺内に一丘を築き八幡と崇め、又所持する所の軍配・扇・玉・笛等を神宝に奉納し、追福の為に石塔に立て、其地を求め永く失すと云云。詮近年是を尋ね見るに、民家の西、藪やぶの中四方二間計なる池形有て木ノ葉に埋たる其側に、石塔二基あり。一ツハ小にして文字苔ムして見へず。一ツハ大にして了無院殿孤雲長徹大居士、天正十六年戊子十月二日と記す。是即夕齋ゆふさいの法名にて、卒年ハ天正五年丁丑九月朔日と記し、位牌長円寺に有。然るに年と云法名も違しければ、土人等知すして立たるなるべし。又義秀の守神蔵王権現ハ、松川帯刀の子孫甚之丞と云人今に祭るとぞ。又本城の地に数百株の桃植て我有とす。又古老伝説に、義秀最期に乗りし馬ハ、塙はらの北一町計の所にて【19】斃たる。即其地に埋む。是今馬塚と云。回りハ田となき此森を、夜中かけもにして廻りに必ず道を失ひ、神怱怱こつこつとなり、果して半途より帰るといへり。是を思に、先己が心に回る事ならぬと云ふ心を求めしより、己か心塞り、神志恍惚こつこつとしてかへるものハ元来臆病の所為なり。故に曰、怪を見て怪ニされバ其怪なしと。是虚談人を迷すものなり。又一説に義秀生害の時、眉間射立られし箭を、従士鈴木平兵衛に抜しむ。彼過て足をかけて抜しとぞ。夫より浪士となり終に磯原村修験となる。今の天妃山別当行蔵院是也。其時主君の面を足を掛けし罰にて、代々足障ありと。是を聞て或人の曰、平兵衛ハ主の苦痛をいとひ、殊更軍中の事なれば礼を尽さずに障なし。主も亦た此時に当て無礼

を怒る事も有まし。然るを罰と称する事不審し、即答て曰。密に奥州後三年記を見るに、八幡太良の寵臣鎌倉の権五郎ハ、出羽国金沢の城責の時、鳥海の弥三郎に左の眼を射られしかバ、三浦平太夫に拔しむれハ、三浦つらぬきをハきなから面をふまへて拔んとす。其時景正刀を抜三浦を刺んと怒る。是を見て三浦過を謝し、膝ひざまつき顔を押へて矢を抜しとかや。是朋友の親き心より実情を以て礼を乱せば、とかむべきにハ非ずといへ共、士の面に足をかけしと哇いりしハ、礼を重んじ士道を立る景正か存念至極する所なり。是を以て見れば、平兵衛ハ礼をしらず。只急に救の心にて、礼に心を尽ざるなるべし。頭ハ人の天也、両眼ハ日月ニ表す。まして主人の面なれば、主の哇いなくとも天是を罰するか故、代々足疾を痛しめ、先祖ハ勇々しき武士なる事を知らしむる者也。或人の曰、善し。

東国太平記 卷の式終り

【20】

東国太平記三編 卷の壹終

東国太平記 卷の三

猪苗代盛國追いなはしろもりくについニ出いたして其子盛胤もりたね一奪うばうニ領地りやうち一事 付盛國謀叛もりくにむほんの事

天正拾七年夏、葦名あしなの一族彈正盛國か米沢方に属したる事、一朝一夕の恨にあらず。其故ハ、去る天正十三年、盛國五拾歳ニして嫡子盛胤に家督を譲、其身ハ本城の北鶴峰と言所に隠居しけるが、いかなる故か有けん、父子の中和にして盛胤ヲ亡し、再領地を取返へさんと思フ心ぞ付たりける。斯折から同拾五年五月十日、盛胤黒川に出仕しける留主を、願処の幸と悦び、盛國手の者共を相具し本城に打入けるに、有合たる者ども、こわ何事に候とあわて騒所を、中を幸に十武三人たをなぎ倒し、盛國頓て移り替る。盛胤此事を聞て進退途ニ迷ひ、横沢といふ所に落行蟄居したりしが、同七月十四日の朝に、船に四五艘に取乗て湖水を押渡り、盛國家人大堀土佐・秋屋平左衛門【21】を入置たる金曲の城を追落し、其跡に入替る。盛國大ニいかり鼻はな、翌十五日の早朝に家人矢内八郎左衛門・廣瀬藤内・遠藤太郎兵衛に足輕を指添へ金曲の城に向わしむ。盛胤討手の向ふよしを聞、路に出張して散々に攻戦ひ、双方百余級の首を得て相引にぞしたりける。此騒動黒川に聞へければ、義廣大きに立腹せられ、父子の中にて詮なき争ひを仕出し、世上の周章に及ぬる事畢ひつ竟上きやうじやうを蔑ないかしらにする故也とて、暫籠居せしめらる。因是盛國其身の罪科を顧ず、還て義廣を深く恨ミ、万端先君盛氏・盛隆の時に替りたる会釈えしやく口惜しと憤いり思ふ所に、今年の春より又葦名あしな



伊達と鬪諍出来、高玉・阿子の嶋辺迄敵に属しければ、盛國希所と悦び、我此五ヶ年前<sup>レ</sup>以、政宗松原に発向の時身方に頼まれしに、盛胤が所為に依て約を背き、哀れいかなる伝へもがな。政宗に属し、此程の鬱憤を散ぜん物と思ひ含んで居たりける折から、伊達藤五郎・片倉小十郎方より例の三蔵軒を使として状を遣す。盛國頓て披見するに、身方に頼たきとの趣なれば、盛國望処とて一言の子細も及ず、一味同心の返事をそしたりける。此事未だ黒川にハ知れざれば、去ル頃片平助右衛門身方を背き、高玉・阿子が嶋敵に奪れたる上ハ、坪下口心元なしとて宗徒の侍二百余騎、猪苗代に遣して相守せ、義廣は仙道に出張して伊達と軍すべしとて、同五月廿七日に盤瀬郡に打出らる。政宗此由を伝へ聞本宮迄出張し、猪苗代盛國が隠謀を催促の為、密に片倉小十郎・伊達藤五郎を猪苗代に遣して評儀せしめらる。盛國弥同意して黒川より添られたる兵共二向つて、去れバとよ方々聞たまへ、政宗此間仙道の軍に利を得られると雖、会津・佐竹・岩城・相馬ノ人々御同心有て岩瀬に打出給ふ由にそふらへば、何の暇有て此辺などにハ心を掛られ可や、たとへわつがの勢を向けられたり共、某斯て候へば、暫時打散じ申べく、今更見へたる【22】事もなきに、大勢是迄打出、長々して滞留ハ、運送の費詮無覚候と巧<sup>たくみ</sup>言<sup>ことば</sup>して誠し面に云ける故、黒川にても此儀実にく、左も有べしと僉議の上にて、猪苗代を警固したりける二百余騎の兵共、六月三日の早朝にこそ引返しける。盛國ハ思ふまゝに出拔たりと悦て、政宗に対し二心あるまじき証拠にとて、十三歳なる亀丸と云子に家人須川野右馬助を相添へ、人質と称して政宗の陣所に出しける。此事真偽不安定とも有増岩瀬に聞へければ、義廣心元なく思われ、一先会津に帰陣し、事の実否を糺してこそとて、翌四日の早天に黒川にぞ帰られける。斯処に政宗の方より、猪苗代に居たる成実・小十郎方に布施備後守ヲ使として、爾等敵地に深入して長居せんも心元なく思ひ、仙道にハ多勢を残し置、其地に入<sup>レ</sup>打らんが為阿子が嶋陣取たる間、兼てかくと心へべき旨言越しかば、成實・小十郎申けるハ、仰にハ候へ共、此辺未だ事の始終も調候わぬに、御出張ハ詮なく覚候、かゝる折から佐竹より本宮に出張せられんも如何敷間、本宮に御陣をすへられ宣かべき旨、書を認め備後守ヲ帰しける。政宗兼てより兩人の返答斯有べしと推量せられ、備後守が帰路に密に使を出し、爾立返り成實等が返事を申さば、一刻も早く大将の出張を待居たる旨可申と有ければ、備後守頓て立帰り、兩人の者共、爾々<sup>しか</sup>申上候と指図の如く申上ければ、政宗扱ハ彼等ハ左言にや、其書見る迄も無ぞ、急き面々兵糧つかへ馬に物飼せよ、後たる者共ハ追々に馳着べしと下知して、阿子嶋を打立れける。総軍勢ハ坪下越を打らせ、政宗ハわづか侍十七騎を召具し、石筵越をして其夜猪苗代に到着し、盛國に対面せられ、頃日の意不浅由感謝して、人質に出置たる亀丸おぞ帰されける。此由黒川へ聞へければ、義廣大に腹立せられ、斯る【23】上ハ時刻移さす此方より逆寄<sup>さか</sup>にして追散すべしとて、富田美作が子息将監を先陣とし、其夜黒川ヲ打立て摺上原二向ひて、道<sup>ちう</sup>街<sup>かい</sup>より南十四町ヲ隔て、普藤村の東なる高森山に陣せらる。各かゞり火を焼つて臥、間稀なる夏の夜の明を遅しと待居たり。

## 摺上原合戦ノ事 附タリ金上佐瀬討死ノ事

去程二、葦名義廣其夜は普藤村の高森山に陣せられけるが、無程夜も明方になりぬれば、見へ渡りたる西窪・滑津・桜川の辺に敵勢を入立てハ身方の障りとなるべしとて、本名柰ノ允に手の足輕を附て指遣し、あたりの在家を焼ける。富田将監ハ先陣なれハ、宵より湯田沢の辺に打出て、終夜軍評定して居たりけるが、心静に下知して段々に陣を取らせける。政宗ハ会津勢摺上原迄打出たる由聞ければ、櫓に登り見渡し、成實・景綱を召寄軍評定せられける。先陣の猪苗代彈正盛國、二番は片倉小重郎景綱、三番は伊達藤五郎成實、四番に白石若狭守、五番は政宗、左軍ハ大内備前守、右軍ハ片平助衛門、後軍ハ濱田伊豆守卜定、それ〴〵に勢を分ける。先陣なれハ彈正盛國ハ猪苗代を打立て湯田辺に打出る。夫より次第の如く段々に陣をはれば、政宗ハ磐梯山の麓、八ヶ森と言所に打上り、義廣の陣所普藤の高森山迄其間坂東路七里を隔て、直達に見渡しして陣取られける。斯て互の先陣将監が軍勢と盛國が士卒と吹渡しと云所にて、馳合鉄砲を放かけ箭を射違ると見へしが入乱れて戦ける。盛國が家人廣瀬藤内と云者一番に首を取て実検に入れれば、政宗当座の勸賞として名を豊後守と替られける。是を軍の始として追つ返へしつ戦ひける。如何したりけん盛國方大きに討れ、開き靡ける色を見て、太郎丸掃部鉄砲式百余挺ヲ引具して駆付、金の团扇を馬手に【24】握り、左右に下知して二百余挺の鉄砲揃、会津勢を横に見なして打かけける。将監此由を吃卜見て、奴ハ正しく太郎丸掃部と覺へたり、逃すな漏すなど言、一文字に切て入、破立迫廻し四方ニ颯と追ちらす。掃部一人踏止り將監に向ひけるを、將監望所と悦び馬手ニ相つケ丁と打、掃部ハ数ケ処の疵を蒙り、殊更大力の將監に眉間を打れければ、馬上より真逆様に落ければ、七野宮柰之助起立ず首打落しける。斯る所に片倉小重郎・伊達成實・白石若狭守が手の兵共、磐梯山の際なる細道より七ツ森の間に馳出る。大旗小旗指上たり。会津勢思の外後に敵の迫るを見て進退猶予して居たりける。殊に此頃は先年義廣に附来りし大繩讚岐守・勿石駿河守と富田・平田等互に權威に争、是ハ誰の方人、彼ハ何か鼻肩の者よなど、思ひ〴〵に成て行李ハかバシ成けるか、驚破盾裏に謀叛人出て来やと狐疑を生じ、周章騒処ニ、伊達勢一文字に切て掛る。然る所に伊達繁昌の氣運、葦名滅亡の時節至りけるにや。今朝迄吹競たる西風、俄に東に替て会津山の高峰山風弥増、鉄砲の煙、馬蹄の塵を正闇に会津の陣に吹掛ケ、偏二霧の如くなれば、東西おも不弁、唯馬の足音太刀の打音夥敷、斯てハ何れを敵あれを身方と分ちがたく、五騎拾騎打連し引立勢ハ多けれども踏止て戦わんとする者ハ稀なりける。義廣ハ普藤の丸山より身方打負たる体を見て、云甲斐なき身方の形勢かな、世の中の事今日を限りと思ひ定めたりとて、敗軍の勢には目も掛ず、混兇四百余騎を従ひ静二大鼓撃、せいくを靡し八ヶ森を指して真直に打て掛られける。政宗此由を遙に見下し、敵は思ひ切て無二の軍せんと進ぞ、身方必ず同じ様ニ逸絶て手痛キ軍してハ宣しからん、折を見合て相かゝりに掛て一軍し、敵競かからば少し引退き、長追せバ右左に分れて取包べし。兎角敵の機に【25】乗るべからず。幾度も駈悩して打取べしと諸勢に下知し、鳴を静テ待居たり所に会津勢少も猶予無打て掛りければ、伊達勢も相

掛りに掛り、一矢射違るとぞ見へしが、双方太刀を抜合て入乱れて火華を散して戦ひける。或ハ引組て刺違、或ハ押へて首を搔も有り。兆ヲ追て切掛る。待て討も有。追つ捲つ六七度迄揉合けるが、伊達勢八目ニ余る程の大軍なり。葦名ハ纒旗本計にて助合する身方もなし。次第く討死して、漸三拾騎計り残りける。猶是迄義廣の士卒ニ先立進まれけるを、心有郎等共いやく勝負ハ合戦の習に候、何ぞや一旦ノ御怒りに依て多年の太望を空しくし玉らんやと馬の轡を取て引返し、三十騎の兵共馬の前後を打困んで静々と引たりける。梨木平辺にては敵頻に追かけ、既に危く見へたりしかば、義廣取て返し多勢の中に破て入、弓手馬手相付て中を嫌す斬て落す。附従たる者共も主に劣ぬ勇士なれば、四方八面に切廻しけれ。程に、屈強の兵共三十余人討れければ、此勢ニ辟易して一度に颯とそ引たりける。夫より大寺の海辺に掛て引れけるが、敵兼ての支度なれば、早新橋をバ椀落しける。さすれば此河ハ渡の口より漲落る流れにて、水かさ毎に夥敷、大石数多、頭瀬枕高き滝鳴て逆巻波ハ雷を散すが如く、いかなる大旱魃にも上下十四五里ノ間に人馬の渡すべき浅瀬なし。然れとも各案内ハ能知たり。遥西に下つて堂嶋の橋を渡り難なく黒川の城にぞ入られける。斯りしかば、後たる者共右往左往に引立けるを、すはやあれ追付にせよや者共、と政宗下知せられければ、大勢摺上の南北に入乱れ、どつと喚叫んで打掛り、葦名伊達ノ両家の軍勢東西に駈散し、黒煙天ニ覆、紅波池に漲、死骸路徑に累々たり。中にも佐瀬平八郎ハ富田美作守の次男なりしを、佐瀬大和守が養子として此陣にありけるが、引立たる【26】身方と打連れ退んとする所に、郎等渡辺伯耆守と言者、こはいかに御舎兄将監殿ハ太郎丸掃部を討取玉ふ、御舎弟下荒井三郎殿の幼キ御身にて高名し給ふと承る、何ぞ抜群の大勢を捨て、左迄仕出し給ふ事も無臆面々と引給ふべきやと恥しめければ、平八郎大に立腹して、扱テ我左程の事すまじき者と思ふにやと言棄て、馬の頭を引返シ群たる敵の中に馳入て散々に戦ひ、向者引組刺違へてぞ死にける。川原田治部少輔盛次ハ、内々桧原の用心として、大塩ニ向て居けるに、此所には敵一人も来ラす。殊に政宗猪苗代迄乱入の沙汰を聞て、大塩を打立摺上原に馳向ひ、片倉小重郎が手勢に渡り合、暫戦て左右に颯と引分れば、双方討る者多し。盛次其より手勢を引具し、大寺の辺迄引退く。金上遠江守盛備ハ身形の討負たる形勢を見て、世の中是迄と思ひキリ追来る敵を支へ、一軍して馬駈除我身を顧れば、薄手少々負、鎧の袖草摺も朱に染たる。盛備馬を控へ鎧の草摺上帯締直すとて家人ニ向ひ云ける様ハ、倩今日の軍の様子を見るに、猪苗代弾正か陣をバ富田将監が一軍に追崩し、後詰したる太郎丸を討取、本陣軍も度々勝に乗と雖も、畢竟富田・平田を始め、宗徒の者共が心々に成て身にしまぬいくさすればこそ、かく言甲斐無討負たり。されば身方の陣に名おも人に知れたる程の者ハ、大形彼等が親族なれば、一人も討死する物有べからず。明日ニも成なば、伊達信夫の奴原が仮初の物語にも、葦名家の者共を追討にしたる心地よきよ。亦不便にも有事なと、居長高に成て、悪口せん事目に見ゆるよふに思ふぞかし。我不肖とハ言ながら、幾程なき老命ながく世の人の口号おも口惜かるべし。所詮我一人なりとも討死せんと思ふ也と、物語して居たる所に、佐瀬平八郎が家人ニ騎、疲たる馬に鞭をあて、落来る。盛

備是を見て平八郎はいかにと問バ、さん候討死仕たる由承り候得【27】共、能々主従の宿縁薄候や、今朝敵身方入乱ける時、押へだてられ候て、命の際の供不仕事無念にハ乍存、頼たる主に離れ、屋形ハ引せ給へば、数ならぬ身の命を捨てても詮無しと思ひ是迄参候と涙ともに答ける。盛備も涙をはらくと流し、扱ハ平八郎も討死しるが、我も思ふ子細有て討死するぞ、御代も目出度御座まさバ、最後の様子を見置、朋輩共に語り伝へよと名残り惜けん云ければ、二人の者とも是を聞、扱は討死と思召定給ふや、いかに数ならぬ身なればとも、武士の家に携、なから討死し玉わんを、見捨北通り、何某殿の御最後ハ斯有し爾々宣しぞと誰に向ひ何の面目に語候わん。御詞こそ恨しく候へ。只御一処にて兎も角も成可申候と、誠に思切たる体なりければ、盛備二人が言葉を深く感じ、去来左落葉諸共に可死とて、逐来敵を近々と引請、多勢の中ニ駆入て火花を散して戦ひけるが、多勢に無勢終に怒て一人も不残討死しけるぞ、無慙なりける次第なり。

### 政宗三ツ橋逗留の事 附田原谷大平門沢ノ城落ル事

去程に、六月五日午刻計に摺上原の軍散じければ、政宗芝居二陣を固メ、討取所の首実検せらるに、宗徒の者にハ金上遠江守盛備・佐瀬平八郎を始、首数都合千一百八十三とぞ記ける。右て実検事終ければ、政宗其夜猪苗代に帰り一宿せられ、明日六日の早朝に金川辺駒形山に打上り、明日ハ黒川の城を攻べしとて、持盾亀甲などの責具を支度令られ、原田左馬之助をば、去る朔日ニ大森より長井に返し、最上領の境なれば、下長井の勢をバ其俣置て、上長井近辺の勢を召具し、桧原口より大塩に向ひ、猪苗代の軍の様子を見て、搦手に廻るへしと勢を催促し、桧原峠を打越て大塩に向ひければとも、此辺の者共皆黒川に引退て、手ざす者老人もなし。原田ハ心易【28】同六日の夕、駒形山に来て政宗に拝謁す。塩川・三ツ橋・金川辺の者共、暫ハ怵んとしたりけれども、始終たまるまじと覚へければ、六日の夜に入て皆黒川に引退ク。明れば七日、政宗黒川の城に押寄て一攻々と議せられしが、敵今た多勢ならぬに僥忽に責入らんも覚束なしとて、近辺成三ツ橋越中が落行たるを幸にして彼が館に入。四五日逗留して黒川の体を聞けるに、田原谷の城にハ岩城左京太夫常隆押寄て攻落し、城兵悉々討取小野新町辺にさへて、田村の透間を窺はる。伊達方より田村警固の為に、大平門沢の城にも人数を遣し置れるに、大平の城もバ佐竹義重ニ攻落され、籠置たる城兵不残討死たる由を三ツ橋ノ陣に注進す。同九日、岩城常隆門沢の城を囲て責らるゝに、城に籠置れたる大町三河・宮内因幡・濱田伊豆・遠藤文七・富塚近江・中嶋右衛門防戦ふといへども、叶わずして終に落城に及ける。中嶋右衛門ハ落行勢の中より引返し、追来る勢を支へて戦ひけるに、徒兵悉く討れ只老人残りける。然る所に岩城勢の中より、一坂左馬之助と云ふ是も只老人身方にはなれけるが、能敵と見て討て掛りけるが、近付寄て、彼武者日頃迄傍輩にて睦敷し中嶋右衛門なれば、こハそも恥しき勝負にて候と、云もあゑ互に鎗にて突合けるが、左馬ノ介討勝て中嶋が首を取り、岩城常隆の実検に備へける。彼の左馬ノ介が此頃迄中嶋と傍輩成し故を尋に、三四年以前、左馬の介聊の事有て常隆に勘当せられ、流浪の身と成

て長井に落行、政宗に仕へける処に、今年の春の頃より岩城と伊達と確執に及び、合戦始りける故、左馬の介此上ハ事の旨趣を白地に申入、暇を乞岩城に帰り、如何にもして勘当を赦され君臣の義を尽さばやと思ひ立、一々事の始終を申ければ、政宗彼が偽無忠心を感せられ、相違なく暇を賜りける。頓て岩城ニ帰りて程なく【29】今日の軍に遇てかく挙動けるとぞ聞えし。

#### 富田平田属ニ米沢ニ一 附問者の事

右て政宗ハ三ツ橋に四五日逗留せられけるが、前にハ会津と戦て其功未<sup>いまだ</sup>に、後にハ佐竹義重・岩城常隆の人々と恨を結んで、昼夜合戦の最中なれば、強敵の中にはさまれ、寝るに枕を<sup>やする事なし</sup>無<sup>な</sup>安。食するに不<sup>レ</sup>井味<sup>二</sup>を「食不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>其味<sup>一</sup>（しよくしてそのあじをしらず）の誤り」、群疑<sup>ぐんぎ</sup>満腹（ぐんぎはらにみち）、衆難塞<sup>レ</sup>胸（しゅうなんむねにふさがる）所に、葦名義廣さしもに忒心無者と頼まれたりける。富田美作守・平田左京入道不休・同周防守等蜜に政宗の陣に使を立、我等が先規の所領并に手に属したる者共の領地迄無<sup>二</sup>相違<sup>一</sup>面々が、館に火をかけ御身方に可参候と望けるに、政宗も莫<sup>ばく</sup>の義とハ思ひながら、前後に強敵を引受たる時節なれば、如何にも各が所望旨相違スべからず、必身方に属し戦功ヲ<sup>はげます</sup>励べしとぞ返答せられける。抑彼等が野心いかなる故ぞと尋きくに、去々年、義廣を会津の養君としたりし時、実父義重より大繩讚岐守・勿石駿河守兩人を後見に附られ、富田・平田等と供に国政に預りけるか、互に上にハ水魚の思ひをなし、打解顔に会釈すれとも、富田・平田ハ否々葦名累代の成敗ハ、何れの世にも皆ナ我等四天王者共の手より出たる物と思ひ、大繩・勿石ハ任他、彼の者共ハ兼テ伊達政宗の舍弟を代継ニせんと僉儀したる由なれば、義廣をバ以外の主君トさひすと聞。何事も時に従ふ習あり。何条我等を猜思ふこそ奇怪なり。互に憤<sup>いきり</sup>を含める故に、富田・平田等ハさらバ今度を幸に米沢方に成て身ノ上の安否を究、此程憎かりし者共の身の成果をも見べしと思ひ立けるとぞ聞へし。斯叛逆人多出来て、数代相続の葦名家忽断滅しける。其濫觴を尋聞に、葦名盛氏の代に七の宮伯耆と言者を仕われしが、如何なる故か有けん、折檻せられて既に誅せらるべきに極まりしを、佐瀬源兵衛と言者さま<sup>く</sup>に申して命を助られければ、夫より浪々【30】して伊達家に仕へけるに、伯耆守の葦名盛氏の手跡を習得けるゆへ、政宗幼年の頃より草跡の指南などとして側近く奉公しけるが、彼者元来会津の案内者なれば、前かど親かりける者共に兼々陰謀を進メ、便ニ付て語りければ、盛國等を初め皆安々と伊達家に属しければ、殊更先年大内備前守が四本松を落したる時、黒川に呼よせ四天の老中に加へむと約速しける事相違しける故、大内備前守是を怒て、去々年仙道片平に帰り、去年四月五日米沢方に属して、日頃会津にて、大繩・勿石と富田・平田と互に權威を争ひ、異議区々になりたる事共を政宗に告げれば、事の巨細便宜につけて計らわれけるに因て、唯一戦の功を以安々と会津を押領せられける。

## 葦名義廣没落の事

去程に、葦名義廣ハいかにもして政宗を追払んと極々に思慮を回らされける半に、さしも宗徒と頼しく思われたる富田・平田さへ政宗に属しければ、今迄忒心なけに見へたりける郎等共、悉く富田・平田ニ一味シ、剩彼等手引に因て、政宗不日に黒川に押寄らるゝ由、上下一同に聞ければ、義廣心ハ武く思われしかとも、此処にして闇々と討死すべきにもあらず、他日勢を催してこそ鬱憤を晴さんとて、獅子の齒咬をなし乍是非なく黒川の城を出、葦名原越より白川の関路をさして落られける。既に倉川の橋爪迄著れしに、澁川助衛門といふ者、富田将監か郎等星備中か下に居けるを呼で、去来此橋を引落し、自然敵追来るとも心易落参んとて、二人暫立止り橋板をぞはねさせける。此橋ニ倉川の一ハ両方十丈計【三】も峙たる溪川の岸の額に掛置て恰一條の白虹の半空にたなく如くなれば、此橋をだに引落さば、敵幾万騎追かけたりとも中々可ニ安心ス。相伴ふ面々努めて宵の間の月最明き程ハ木の下陰の朧けに、季の山路を分越る道のたつきも有しかと、小夜深行ハ程も無ク茂が外の月落て、其方の遠近も竟束なげに闇ければ、焼松風に燭しつれ。後れ先達輩ハ、互の聞を知るべにて、催ひ誘はれ落行バ、山中に隠居たる溢者共、驚破落人の有ぞ、資財雑具を奪やと旬て群集りけるに、富田将監ハ父が叛逆に与せず、義廣の供したりしが、家人星備中を呼て、汝ハ急き先に参り孰謂此溢者共の狼藉せざる様に謚候へと云ければ、備中承り仰畏て候、総じて此山中の者共ハ常々某を能存候へば、御先に参りて鎮可申とて、手鍬提馬を早めて駆通、集居たる溢者ニ向て、いかに何等今度屋形不慮の合戦に及び給ひしが、一ト先常州に御開キ有て、佐竹殿の御勢を合せて又所を御通り有ぞ、我主将監も御供なれば、星の備中が御先に行ぞ、些共狼藉仕など大音揚て静々と打通バ、溢者共是に怖て引退ければ、翌日十一日の晩景に白川に着れければ、阿子嶋何某と言者忒心有気色なれば、澁川助左衛門に仰て討せらる。夫より常陸国龍ヶ崎の城に住し、後同国江戸崎に移られける。其後義重も仙道より帰陣せられ、星の備中が路次にての挙動を聞て甚感せられ、折につけて出召し杯をさし、刀一腰を給せりけるとぞ。

## 久保田合戦の事

天正十七年七月、佐竹・盤瀬・岩城・相馬・白川の人々、此頃久しく仙道ニ相支、政宗と合戦し、昼夜止隙なかりける。就中佐竹義重ハ、子息葦名義廣郎等供野心より起、会津ヲ政宗に押領せられたる事、深く遺恨に思われければ、岩城・相馬の人々と一味して、大平・門沢の両城を攻落

し、其勢に乗て、政宗家人伊藤太郎左衛門が籠りたる郡山の城【32】を打囲、荒手を入替く攻る由、黒川に注進す。会津にても未先亡余類方々に支居ければ、政宗も昼夜安き心ハなかりけれども、佐竹・岩城の敵共に若シ仙道を奪われてハ、会津を押領したる甲斐なしとて、伊達成實・白石若狭・平田周防・原田左馬之助等が大勢を指添へ村田二遣し、自身ハ郡山後詰して坂東路五里を隔、福原と云所に陣せられる。去程に、七月四日、互に久保田と云所にて軍有べしと定め、兩陣大勢未明より打出てける。義重ハ頃日深く遺恨を含まれければ、手痛軍して勝負を一時に決せんと言軍に機を励さる。政宗ハ、亦骨肉親族の者共と不和に成たる上ハ、彼等が軍弥手強かるべしと内々期せらる。右で合戦始りしかバ、誠に両虎二竜の争ひなれば双方駆るも引も一様にして、駱駝する者なければ、共に透間を伺べき便もなし。斯ていつ果べき軍とも見得ざりしが、残る暑の堪難照日の影モ陰もらずに、合つ別れつ終日戦ひくらしければ、人馬共に汗を流し、息喘き次第く機つかれければ、右で薄暮に及ひしかバ、勝負ハ後日にこそ究べきと双方引にぞしたりける。同日岩城常隆ハ、下枝と云所に打出、田村勢と手痛軍して日既に夕陽に及ければ、諸陣一同に引退かんとする所に、下枝辺の者共山路の嶮難に支て戦たり。岩城勢の内、松本善十良と言者先に進んで片岨下りの細道に支へて防く所に、誰トハ知らず郎等二十余人引具したる武者一騎進み来りけるを、松木鎗を以て揆て落す。元より片岨下りの細道なれば、続たる家人等も助合せず颯と散て北行しかバ、松木ハ心易く彼敵の首を取て身方の陣ニぞ引返しける。其後岩城常隆帰陣の上にて、松木が度々の武功ヲ賞シ感状をぞ被下ける。

#### 須賀川籠城の事

其後伊達政宗ハ、会津仙道を打従られしかバ、今ハ残りたる城とてハ、岩瀬の二階堂盛義の後室支配せらるゝ須賀川の城計なれば、事の次ニ此城【33】おも責落すべきとの評諺なり。抑此後室ハ尋常の女性とハ抜群かわつて、勇氣丈夫にも越たり。誠珍らしき女性なり。往天正九年七月廿三日盛義死去の後、今年まで九ケ年に及べども、亡夫の跡を相続し一所も敵に奪われずして居られるに、今度政宗仙道勢に、会津四郡の勢を合テ向わるる由風聞あれば、岩瀬普代の郎等共、降参有て然るべしと様々に異見しけれども、後室かつて承引なく一筋に籠城の用意せられる。其後後室家人等を召集、頃日風聞の如くならば不日に政宗寄来るべし、左あらん時ハ多勢に無勢、対揚の軍し難ければ、終にハ云甲斐なく責落され、闇々と討るべし、其後に及て落忍ふとも、草葉を分て探し出され、妻や子迄もうき目を見せん、不便なり逆も運を開くべき軍ならねバ、敵寄ぬ先に政宗に降参せよ、恨ミ更に思ふまじ、自に於ハ思ふ子細あるニ因て一人なり共城に残り居て、寄手を待て自害すべし、斯る上ニモ義を守る節に死せんと思ふ輩ハ同じ道に伴ふべしと、涙と共にかきとかれければ、並居たる面々も袖や袂を顔に押あて、暫泪咽ひけるが、漸有て申けるハ、左程迄思召定させ給ふ上ハ、何者か頃日の御恩を忘れ敵に従ひ申べき、御心易思召され候得と申切て、一場必死ト究たる輩にハ、東方にハ塩田右近太夫一族・小倉の遠藤内蔵頭一党・

佐久間主殿介・同弥衛門・小山田の内山右馬之丞・大原内匠助・飯村六郎左衛門・青木次郎兵衛・須田内蔵允・大槻与治郎・桐生玄蕃・同若狭・黒月与衛門・青木源四郎・服部伊豆・吉成監物・同玄蕃・日照一書二作大学・田中兵庫・須田佐近・江藤万力・前田信濃守・和田の城主須田美濃守・須尾の城主矢部主膳・遠藤左馬ノ助・圓谷与三左衛門・同右馬允・鹿嶋彦三郎・須田大蔵・江村近江守・須田源蔵・高久田四郎・矢部紀伊守・須田織部・同彦三郎・飯土用半次郎・鏡沼大膳・濱尾藤一郎・矢部源五郎・小原田内膳・滑川重郎・山寺淡路守・鈴木帯刀・小川和泉守・須賀川旗本には濱尾参河守・其子内蔵介・【34】同氏筑後守・其子息内匠・同氏志摩守・其子息内記・同弥兵衛・遠藤雅樂頭・同老岐守・矢部伊豫守・同掃部・其子織部・朝日伊勢守・其子万七郎・大波石見守・其子新四郎・薄井源左衛門・其子源十郎・内田肥前・荒木田清兵衛・大寺宮内太輔・同雅樂允・飯土用七兵衛・泉田将監・其弟左近・横澤内膳・熊沢四郎衛門・長沼彦左衛門・忍藤兵衛・其弟羽衛門・岩崎藤十郎・伊土井藤内・白葉因幡守・大賀大学・前田助衛門・鈴木太良衛門・其子彦八郎・同氏六良衛門・同太良左衛門・其子孫七郎・小川内蔵ノ允・其子弥三良・今泉伊豆守・石井大学・須田主膳・同氏右近・小野寺外記・矢部右馬允・同氏蔵人・須田掃部亮・西牧甚四良・玉名与次衛門・宮崎内記・片寄新蔵人・早原彦衛門・根本左馬允・矢内雅樂助・佐藤主水・太田与三左衛門・同氏監物・塚原治郎衛門・中村助七郎・味戸ノ助兵衛・佐久間重衛門・藍原太郎左衛門・橋本藤衛門・志賀奎之介・石井彦衛門・舞木助衛門・吉田彦十良・磯部孫衛門・同与十郎・船田治郎衛門・車田平衛門・三瓶太郎左衛門・小林孫八郎・安久保与八郎・下枝掃部・大田新治良・同又衛門・大橋掃部・五市隼人・佐藤助七郎・同氏雅樂亮・沙茂孫重郎・花川藤左衛門以下の者共、志を一ツにして疾々敵の寄よかしと、潔く一軍して討死せん者と旬て今や遅と待居たり。

### 須賀川諸士盟約の事

去程に、政宗不日に発向す沙汰頻なれば、岩瀬譜代の家臣濱尾善斉・保原江南斉・矢部下野守以下忽心を変し、政宗に降参し、剩へ岩瀬四天王の内守山筑後守も一同に隠謀をぞ約しける。須田美濃守ハ守山か隠謀ありとハ知らねとも、只何となく隠謀の者味方に有ル由を伝へ聞、登城して申けるハ、西方の者共悉く米沢方に属し候得ば、斯互に膝を組肩を並る面々も心底難測、所詮各神明に盟て丹心を著シ【35】共に討死すべしと言ければ、何れも此義可然と折節千用寺の秀藝法印・妙林寺の明良法印居合たれば、明良誓紙を熊野の牛王に書キ、灰に焼酒に入れて出けるに、須田美濃守を始として、各是を酌流し、死を一途にきわめける志こそ殊勝なれ。

### 矢田部伊豆守議スル討守山筑後守ヲ一事

爰に矢田部伊豆守と言もの大里の城に居たりけるが、守山が隠謀を企てける由を灰に聞ければ、やがて郎等五拾四人引具し須賀川に馳来り、同志の者の許に立寄、守山が企テ事偽ならねば速に



彼を誅シ、其後寄来る米沢勢に打向ひいそむべく 潔いそむべく 一軍せんと思ひ定、某が家人二守山ヲ討せんと申含め  
て参りたり。各同心し玉へと囁けるに、運の極成バ知恵の鏡も曇けるにや、守山程の者が累代の  
恩を忘れ、左程の挙動ハよもあらじ、殊に虚実も不安定、一騎当千と頼たる者を僥忽ニ害せんも  
不便なり、斯言伊豆守が心底も計り難しと疑て、治定返答もせざりければ、伊豆守大に鬪いかつ  
を起、扱ハ当家滅亡の時既に至しよな迎も、行季墓々しき事ハよもあらじ、と言すて大里の城ニ  
帰りける。

### 須賀川合戦の事

去程に、岩瀬より佐竹・岩城に注進せしかバ、天正十七年十月廿四日、加勢として岩城よりハ、  
高貫中務大輔奥州高貫の城主也・植田但馬守奥州植田の城主也を大将として三百余騎を指遣す。又佐竹よりハ、河井甲斐  
守常州川井の城主也・茂武左馬ノ助・月居野内大膳何某常陸月居の城主也等に式百余騎、雉尾源六常陸多賀(たか)郡手綱城堀切(てつなしろほりきり)二住ス  
大将にて五拾余騎、都合式百五拾余騎を添へてぞ指越れける。同廿五日政宗も黒川を打立、横田・  
矢田部に出られける。先横田の要害近き山に打上り、田村月斎さい・同刑部少輔・保原江南こうなん・濱尾善斎さい  
を召て、何の城をか攻べきと議せられければ、江南・善斎進出、最初に須賀川の城を御攻有て一  
旦に落申さバ、【36】横田・矢田野等が如きの者共ハ、忽軍門に降候べしと憚所なく申ければ、実  
々尤と同心せられ、彼須賀川に寄るにハ何方か好るべき、籠れる勢ハいか程か有らんと問ふ。江  
南斎・善斎詞を汰へて、須賀川勢に岩城・佐竹の加勢を合て七百余騎にハ過候まじと申ける。其  
時月斎云けるハ、押寄候わんに便よからん方ハ、南より掛り候が順にて候得共、地下なれば敵の  
分量見へ申さず、西の方にハ牛袋川とて候得とも、其外ハ野続にて一面に高く、八幡崎の城をバ  
只一目に見渡し候、此所より御寄せあらんこそ便よく候はんと申ければ、政宗承引せられ、其夜  
ハ高館に一宿し、翌廿六日の払暁ふつきうに須賀川に向われける。かたへの屋の上に、白鷄一番居けるが、  
まだ朝霧の紛れにて不安定見へわからぬを、政宗あれわ鷄なるぞと言れける詞下たより、側近ク  
供したる者、とりあへず、今日城責の御首途に白鳥を御覧ありしハ目出度候と申ければ、政宗扱  
も能ク申たりと打呵はらひ、程無須賀川に著、城より西の方ニ続たる広野に勢を打入レ、人馬の息を  
休めらる。其後、政宗郎等十騎計りを召具して陣所を出、雨喚よばいり口と八幡崎と両方より寄べき路  
次の便宜を見すまし、本陣へ立帰る。家臣を集て議せられけるハ、身方より勢を二手に分て押寄  
は、敵も川を越て打入れべし。ある時手痛く当て追入レ揉破んとて、勢を二手に分け、雨喚よばいり口  
の先陣ハ大内備前守・其弟片平助衛門、二陣ハ伊達藤五郎成實、後陣ハ片倉小十良景綱ト定られ、  
八幡崎口にハ新國上総守を先陣として、二陣ハ白石若狭守、後陣ハ四保但馬守と定め、政宗ハ山  
下の観音堂に陣取てひかへらる。城方にも敵両方より寄ると見て、各勢を分に分ける。先礫場の  
高所に白旗ヲ靡して濱尾三河守・同筑後守・同志摩守・矢部伊豫守・遠藤雅樂頭・朝日伊勢守・  
大波越後守以下の兵旗本に控へたり。一手ハ遠藤壱岐守・濱尾藏之助・同近内・長沼彦左衛門・  
大波石見守・其子新【37】四郎・朝日万七・岩城藤十郎・熊澤四郎衛門・同助衛門・忍藤兵衛・

荒木田清衛門・薄井源左衛門・内田肥前守・高林右衛門・須田主膳・同右近・矢部紀伊守・同氏掃部介・其子織部・同右馬允・同源五郎・濱尾藤市良・須田掃部介・同刑部・大寺宮内太輔・伊土藤内・大賀大学・矢内助衛門・白葉因幡守・濱尾内記・弟弥兵衛・同内匠助・小河内蔵允・其子弥三郎・飯土用七兵衛・鈴木太郎左衛門・其子孫七郎・同彦八郎・石井大学・今水伊豆守・早原彦衛門・西坂甚四郎・片寄り新蔵人・宮崎内記・中村助七良・小野寺外記・矢田雅樂介・弟与治衛門・根本左馬允・佐藤主水・太田与三左衛門・同監物・塚原次良衛門・味戸助兵衛・藍原太郎左衛門・橋本藤衛門・佐久間重兵衛・志賀奎之助・石井彦衛門・舞木助右衛門・吉田彦十良・磯部孫衛門・同與十良・船田治郎左衛門・車田平左衛門・三ノ瓶太良衛門・小林弥八良・安久津与八良・木田新治良・同又衛門・大橋掃部・五市隼人・佐藤助七良・同雅樂允・梅宮源七郎・沙茂孫重良・花川藤衛門・預山与惣六・同長三郎・同又市良、沙門徳善院・光明院以下固たり。一手ハ須田美濃守四目結ノ旗を指上げ安藤・服部・小板橋・篠山・山寺・長瀬・割鎖・矢田部・片岡等の兵左右ニ従ひ控たり。北の方ニハ岩城勢高貫中務太輔・植田但馬守以下三百余騎、南ノ方に佐竹勢河井甲斐守・茂武左馬之助・月居野内大膳月居ノ城主・雉尾源六手綱城西ノ方堀切テ居城ス二百五十余騎各轡くつばみを並て待掛たり。斯て須賀川方二百余騎先進んで馳向へバ、米沢勢五百余騎牛袋川を渡し責嬰る。須賀川勢ハ兼て敵を思ふ凶に引受、難所に追入て討んと議したる事なれば、暫会釈して引退けバ、米沢方勝に乗て北るを追事一町余り也。其時鈴木太郎衛門・同六郎衛門・泉田将監・其弟左近・須田源蔵以下鉄砲の上手共数十人、忍羽衛門以下の射手数十人、大黒石の辺に支て玉箭雨の降如クに放かければ、寄手に手負死人数を知らず。是を見て須田美濃守・遠藤【38】壱岐守・同雅樂頭・大沼石見守・濱尾内蔵助・同近内・矢部伊豫守・高橋衛門・吉田七良左衛門・長沼彦左衛門・矢田雅樂助・同与治衛門・熊野四郎衛門・中村助七・矢部奎之助・佐藤主水等轡を並て進んたり。美濃守前後の勢に下知して、互に今日を最後の軍なれば首取高名したりとも何の世の恩賞にか預からん、討たり共首取な、射落したり共目に掛るな、只矢種を惜まず射尽し、精力の及程ハ死者咀に戦へ、と呼つて一度に嚏と馳合せ、火花を散してぞ切合ける。南の方より佐竹勢河井甲斐守・茂武左馬助・月居野内大膳・雉尾源六等二百余騎鉄砲を打かくれば、北の方よりハ岩城勢高貫中務太輔・植田但馬守等三百余騎、射手を一面に進せ散々に射させける。中にも水野勘解由と云者隠なき精兵にて、尋常の弓に三張合たるよふなる大弓に、亘六寸余の大雁かりまた俣を打束ひ、さし詰引詰射て落す。さしもに勇める米沢勢、三方より攻られ、先陣討るゝ者百五拾余人に及べり。此戦の半に、新國上総介ハ透間を窺ひ、手の者と供に歩立になり、大黒石の辺より岩の間を伝ひ、会下町小路の南の方に乱入り、在家に火をかけんとするを見て、二陣に控へたる矢部主膳・圓谷与三左衛門・同左馬允・遠藤右馬之助・鹿嶋彦八郎・須田大内蔵・前田信濃守・江持近江守・遠藤右近太夫・同内蔵頭・同弥衛門・佐久間主殿介・飯村六良左衛門・内山右馬允・青木治良兵衛・木原内匠介・黒月与衛門・大槻与治良・桐生玄蕃・同若狭・須田内蔵允・同左近太夫・日照大学・大寺雅樂頭・服部伊豆守・吉成玄蕃允・同監物・江藤萬力を先として驀直に長沼勢を中ニ取込、

揉立く戦へバ、新國が手勢百余人討れて引退く。大内備前・片平助衛門手勢具引し入替り、華を散して戦ひける。されとも須賀川勢勝に乗て伐崩せバ、是手勢数多討れて敗走するを、余すな漏すなど追慕ふ。二陣に控へたる伊達藤五良成實、斯身方度々駈立らるを見て、大に最勇找んたる須賀川勢二破て入り、四五町計り追退け、あたりの在家に火を放ツ。【39】勝鯨波つくつて控たり。政宗敵の働を見て保原江南斎を呼れ、須賀川武者の駈引聞しに勝りて覚へたり、斯てハ中々暫時に勝利を得かたし、冬の日暮安、夜にいらバ攻らるまじ、如何様にも会釈敵を川原表に引出し、一当々て度思へ共、敵ハ軍なれたる者共にて、長追せねバ為方なし、此上ハ新手を差向て討テ掛らバ、方便とハ知らず馳向わん、其時暫防戦ひ弱々と川原表に引退バ、敵北ヲ逐て不覚河原表に打出ん、然る所を四方より取囲んで一人も漏さず討取か、さもなくんバ向の在家へ追入、火を放て打散すべしと、下知せられ、新手の勢向われける。此由を見て須賀川勢、岩城・佐竹の兵おバ、此処彼処にかくし置き、米沢勢に渡り合、入乱てぞ戦ひける。中にも濱尾近内ハ、敵の軍大将と見へたる者と馬上にて引組て落重り首掻切て投捨ける。兼て議したる事なれば、米沢勢防き兼たる体になし引退きければ、須賀川勢其色を知て、大黒石坂の辺より引返す。斯しかば、米沢勢魚鱗に連り馳向へバ、須賀川勢鶴翼に開て駈合す。伊達方の二陣も相続き、此処を専途と戦ひける。然る所に、隠れ居たる高貴中務太輔・植田但馬守・月居野内大膳・茂武左馬助・川井甲斐守・雉尾源六総軍五百五拾余騎にて打て掛る。米沢勢思ひも寄らさるバ、色めき立て崩れんとしたりけれ共政宗後陣に控へ衆を励し、其上米沢方にて一人当千と聞へたる成實・片倉以下の勇士粉骨を竭して戦ける故、士卒是に力を得、踏止りて二時計り戦しが、日既に薄暮に及ひければ、左右に勢を揚引たり。斯挑戦て口、濱尾三河守高所に打上り、両陣を見渡し密に同志を呼、あれ見られよ、身方の陣所の氣を伺ふに、城中に叛逆の者有て落城せん事必定也、口惜次第かなと語て涙を流し帰りけるに、果して守山が逆意に因て落城せしこそ墓なけれ。

東国太平記 卷の四終り

【40】

東国太平記 卷の五

#### 守山筑後守叛逆の事 附タリ須賀川落城の事

然る所に、守山筑後守ハ雨喚口を固けるが、兼てより楯裏の謀叛人なれば、犬追物の馬場口番石と云処に上つて己が差物を抜、横にふりけるに、内々の合図にてや有けん、家人織部・金平と云兄弟の者、城より西に当りたる会下町小路、長祿寺と云禅院の隠所に火をつけたるに、折しも

西風烈しく吹て猛火天を焦しければ、余煙城中の役所に移り、それより焰四方に飛散、檐を連たる屋形く片時の間に焼上る。後室此風情を見られ、扱ハ頃日の風説の如く、守山が謀叛治定也けりと推置し、守山が妻を呼よせ、汝が夫守山ハ譜代重恩の身を忘れ、かかる挙動ハ余りに情なし、とさめくと嘩れける。女房承り、誠に御恨の程愚なる心にも御理【二】りと覚へ候、此上ハ自を左にも右にも御計ひ有て御憤を晴させ給へと涙と共に云ければ、後室腹に居兼彼女を取て引寄、守刀ヲ抜て既に刺殺さんとせられけるを、側なる女房共後室の袂にすかり、先つしばらくト止めければ、後室力及ハず抜たる刀をおつ取て自害せんせられけるを、周章噪て止め守刀を奪取る。然る所に、兼て守山が附置たる郎等七八人走り来て、並居たる女房共を突倒し、守山が妻を肩にかけ、西の方にぞ退たりける。斯て火煙城中に充ければ、流石の勇士とも煙に咽て働得ず、後室をバ敵二十人計来て米沢方に生捕けるぞ、浅ましき事ともなり。

### 籠城の諸士討死の事

斯て、落城に及びければ、濱尾十郎・高橋菊阿弥父子ハ落行勢の中より踏止り、散々に戦て向ふ敵を五人討取り一足も退かず討死す。遠藤雅樂頭・同氏彦市郎・大賀大守・玉名子次左衛門・宮崎内記・大波越後守ハ大手にて防き戦ひ枕を並べて討死す。岩城よりの加勢高貫中務ハ、手の者皆討れければ、無力栗屋沢迄落けるを、敵大勢追かければ取て返す。向ふ者三人切伏せ、四人に手負せ其身も終に討れ、又タ佐竹よりの加勢の内、雉尾源六ハ手の者残り少なに討れ、静々と引退く所ニ、米沢方大勢追駈来るを見て取て返し、常陸国多賀郡手綱竜虎山堀切の城主雉ノ尾源六と名乗りて、向ふ敵五人忽二切倒しけれハ、恐れて近寄者ハなかりけり。其時源六大勢中へ切入、四方八方切ちらし、終に其身も討死なり。是を見る人誉ぬ者こそなかりけり。須田美濃守が子息源市郎ハ、城に火罹ぬと見て、急ぎ馳入て彼方此方を見廻るに、さしにも造り瑩れし家悉く灰燼となり、父が行衛も知れされバ、是迄なりと思ひ切り、大勢の中へ駈入散々に戦ひしが、敵に馬を【二】射られ歩立となりて大きに働しが、終に生捕れけるぞ無念なり。斯とハ知らて美濃守ハ、城中に入て見てあれば、門も築地モ焼落、後室の行衛も知らざるゆへ、此上ハ一先つ和田の城に楯籠り、敵を引受一軍して尋常に腹切ん物をと独言して嘩々和田に帰りけるが、此処にて敗軍の勢を集め見るに、頼切たる兵の内、安藤・小板橋・服部より外ハ見へず、殊に源市良ハ行衛ハ如何に成にしやらん事問べき便もなし。又此無勢にてハ籠城もなり難しと城に火を掛け落行ける。斯りしかバ、小荒田隠岐守・横田治部少輔・矢田野伊豆守等も勢つきて政宗に降参しければ、許容なくして所領を没収せられける。矢部上野守ハ狸森の城ニこもりしが、叶しとや思ひけん、同降人にそ出にける。塩田右近太輔ハ、石川町に隠れ居たりしを、石川昭光さかし出して首を斬。矢田野安房守・同善九郎・泉田将監・山ノ内刑部・河原田治部等所々に城を構へ、防ぎ戦ひしが、秀吉東征の砌、各下城したりける。右て政宗ハ緩々と諸卒の労を休め、須賀川ニ四十余日滞留せられ、其後須賀川の城をバ親族なりし石川大和守昭光に賜わり、那須境関知久の城

にハ、是も一族の結城七郎義親を置、其身ハ黒川にぞ帰られける。此一戦の後仙道悉掌握せられければ、来年ハ常陸に打出、佐竹義重と雌雄を決せんと議せられる。義重も又政宗を攻て讐を復せん事を思われけるに、程なく秀吉東征有て、天下平均せしかバ私軍なりかたく、夫より鬭諍ハ止めにけり。

### 盛義ノ後室所々沈落 附死去の事

去程に、盛義の後室ハ、須賀川郡山落城の以後、しばらく村井田に住せられ、是ハ年来の郎等遠藤但馬守と云者此城に住居しなから政宗に降参しけれ共、さる子細有て恨もなかりし故とぞ聞へし。其後【43】杉の目に移し、又岩城に行て住せられしが、常陸卒去の後常陸国佐竹に行て、嬉からぬ月日を送り迎へ、八九年逗留し、再須賀川に帰り、長祿寺にて空くなられしとかや。痛しかりける事共也。

### 遠藤雅樂頭妻投レ身事

須賀川籠城の諸士の妻子等所々にさまよひける中に、殊に哀なりしハ遠藤雅樂頭が妻なり。彼も落城の折柄、或者の方に捕われ居たりしが、熟思ひめぐらすニ、雅樂頭殿存命ならば今迄尋たき荒田事ハあらじ、音信たもなきハ失玉ひたるにやと悲しみけるが、雅樂討死と聞しより、猶増の嘆に、水穀を絶て打臥ければ、頼少なに見へにける。濫妨に捕たる男、此形勢を見て、何しに左まで悲給ふそ、帰らぬ道の歎に可惜身を棄玉わんより我等が妻とも成て、今の憂を忘れ、過さり給へし人を思召出ん折々ハ、一遍の念仏をも回向あらんこそ増ならん、此度所々に濫妨したる者多けれ共、我等が如くハよも劬り進らせじ、斯我にも強面座在バ、知ぬ他の国に売渡し申べし、左あらん時我ばし恨み給ふなど、一度ハ面を和げて諫め、一度ハ声を励して怖しければ、女房ハ是を聞に、気に消愁さ増さ何と答ん詞もなく打臥てこぞ泣居たる。其後彼ノ男の留主を伺、女房密に忍出、近きあたりの寺に行、僧に逢て申けるハ、自ハ須賀川落城の折から当所の者にとられ来り侍り、然るに主の男、自を妻にせんと口説侍れど、仮令夫ながらへて自を捨られたりとても、などが両夫にまみゆべき、況や飽ぬ別の中なれば、争か彼に従ひ申べきや、過にし人の面影のミ目に遮り、心に忘るゝ隙なれば、彼と云此と云、身を棄バやと思ひ定め候。若失たりと聞召さバ一遍ノ回向をもなして給ハリ候へ。何をかな御布施に進らせ度ハ候得共、落城の事なれば身につけたる物もなし懐中より蒔絵の箱に入たる鏡を【ト】取出し、是ハ重代の相伝なれば這度持来り、是を奉ぬとて彼僧に渡し置、唾泣宿所に帰りける。其後霜月廿六日事かとよ、彼女房逢隈川に尋行、渕の浜に立寄、高声念仏唱へ碧潭の底へ飛入ける。斯る折節、其辺を通る者はを見て、只今美き女房の身を投たる此里人にやと呼ハリければ、所の者共集りて、熊手に掛けて引上けれ共、左や右や時刻移りければ、息絶目閉紅顔忽に変しければ、見る人聞人をしなべて、古より今に至る迄夫に後れル者も多しと雖、誰か如此命を棄たる例やあるとて、各感涙を催しけ

る。彼の寺の法師ハ、一入哀なる事に思ひければ、其処にて火葬し、一基の卒都婆ヲ立置ける。其後彼鏡管を開き見るに、鏡の下に辞世しと覺へて短冊に和歌二首ヲ書たり。

亡人の爰にくるまの無とても廻りぞ逢ん一ツ蓮に

後の世も逢限川あふくまに身を投て沈しつむハ深き縁ゑにしなりけり

法師も哀成事に思ひければ

昨日迄見し其人ハ無けれ共残のこれる物ハ倭やまと言葉ことば

と書たり。亡跡なき念頃なまにぞ弔ひける。

### 竜虎山城主代々の事

竜虎山の城主常陸国多河郡小川多有故多河郡ト書クに有。竜狐山・竜子山・立籠山と云。一名手綱、後改て松岡と名く。初何人の築くと云事を知らず。天徳六十二代村上天皇の頃、常陸介平就定といふ人領すと見へたり。

赤浜村北久保天神・石岡村天神、天徳三己年未九月竜狐山ノ城主常陸介平就定勸請の棟札有り。

建久八十二代後鳥羽院の頃ハ手綱太郎と云人領すと見へたり。上手綱能仁寺建久三年壬子大檀那手綱太郎建立の記有。或人曰、手綱太郎ハ総州千葉氏の一族、氏神ハ妙見菩薩高戸村觀沙明神也。或曰、永和一百代後円融

(えん)元年乙卯十一月十五日平重正と云人総州より来り、是ヲ手【たご】綱太郎と云。愚按建久三年と永和元年の間百八十四年、然ハ手綱太郎前後二人、建久の手綱氏永和迄子孫相統して手綱太郎と称すル乎、又別姓か。村の東南館あむの跡有り、館の坊と云。又天南堂ト云。手綱・天南方言近きを以誤乎。坊堂ハ先年僧坊にても有しと見へたり。元応九十五代後醍醐の頃ハ植田小四郎と云人領すと見へ

たり。日棚村源東寺元応元年己未竜虎山城主植田小四郎建立の記有り。応永百一代後小松の始ハ、但馬守平氏之ト云人領すと見へたり。上手綱長宏寺開基香林院殿長室岳翁大居士、応永三年丙子但馬守平朝臣氏之建立記有。同村鎮守日本武尊朝香明神の棟札応永五年戊寅五月十日源兵庫亮基宗・藤原左京亮清信・平馬四郎氏之・王五郎左衛門貞俊と有。此時ハ手綱を四人して分領するか。但し城の交代乎。又明神建立の施主か。但馬四郎ハ但馬守の子息なるべし。氏の名乗不審。同社応永二十三年丙申十二月十三日ノ棟札、当郷地頭里見源基宗・寺岡平義之。愚按、里見ハ棟札に載スル所の

応永五年の兵庫亮なるべし。寺岡ハ但馬四郎、然ハ氏之ハ義之の誤なるべし。此時里見・寺の岡の両家、当地を分ケ領分と見へたり。応永末より王孫大塚氏領し給ふ。手綱古記曰、応永二十三年丙申三月十五日、吉野の帝の御孫常翁殿家臣戸條伊勢守・中條播磨守・北條常陸守一日戸條孫三郎・中條新三郎・北條六

良左衛門三人御供ニて当国に下向、多河郡大塚掃部介貞成を頼給ふ。貞成父義成ハ佐竹左衛門尉行義四男、南朝ノ正平四年己丑正月五日四条畷なむての合戦に楠正行ト共に討死したる義士也。伯父佐竹義敦

を始、一門皆將軍方に属すと雖共貞成義心変せず。本国ハ関・真壁まかべ・伊佐・下妻・那河・鹿島。奥

州ハ岩城・白川と唇齒しんをなして無二の官方なる事、天上にも聞召し及ハれ、南北朝御和睦百一代小松院明德三年十一月三

種神器入浴後、王孫遙々尋下り給ふ事掃部介貞成大に喜、【46】女を以て箕箒けいしゅうの妾として、猶將軍方を慮おもんばかりて吾大塚氏を奉り、世上へ婿養子と披露し、竜子山を取立、常王殿の居城とし、応永二十

七歳庚子の八月十五日徒移し給ふ。寛正百三代四年癸未十一月廿七日、上手綱鎮守日本棟札、当郷地頭大塚下野守藤原頼成・同伊勢守藤原成貞、寛正四年、応永二十(七)年を去事四十四年。頼成、是童子山王孫三代輝山琳公なるべし。天文百六代十七年戊申四月六日、同鎮守棟札、当地頭大塚信濃守藤原政成・嫡男与治郎藤原重成、天文十七年、応永二十七年を去事百二十九年也。然ハ政成ハ七代の岳雄つか、重成ハ八代の春雄はるなるべし。大塚氏ハ掃部介貞成奉る所、貞成ハ源氏佐竹の末葉也。王孫藤原を姓とし玉ふ事不審すがまた。菅股城主大塚氏、元来藤原の姓なるべし。結城の支流乎、小野崎氏の余裔乎。佐竹行義の四男義成、大塚氏の養子トなると見へたり。中の郷神社に遺る所の記録、大塚氏姓ハ藤原也。故ニ王孫藤原を姓とし玉ふ。永応(禄)百七代二年己未二月十八日梅翁卒去、御子なし。依て、常翁より太翁・覚翁迄五代にて王孫断絶たんせつ。群臣宝物を山上の塚に封シ、天孫五代の尊靈を祭り、王塚人所権現と崇敬し、城の守護神とす。是古老言伝聞伝べし所、王孫八代なり。断絶も亦永禄二年にハなるまじ。妙法寺過去帳永禄四年岳雄つかお、永禄五年春雄・御老母の法名有り。右帳至極疎略也ト雖も亦古記徴とすべし。八代の席次左の如し。

元祖常王。年月なし、姓名なし、位山常王尊靈とあり。位山常王の四字尊靈と称する事紛る所もなき元祖王孫の法名なり。常王・常翁和訓通す。二代道秀。文安四年丁卯九月廿九日、大塚信州とあり。文安四年、応永二十七歳を去事二十八年也。依て二代なるを知る。三代輝山。年月なし、姓名なし、然とも輝山琳公尊靈とあり。城主の法名分明なり。依て下野守頼成の法名とす。四代楽雄。右帳楽雄た点公尊靈とあり。年月なし、【47】法名なし。然れ共城主法名分明なり。三代頼成治国年数知れずといへども、上手綱鎮守棟札寛正四年より、浄雄大永元年迄五十九年也。然ハ楽雄治国此間あいたなるべし。依て楽雄を以て四代とす。五代浄雄。右帳浄雄禪定門大永元年辛巳十月十九日大塚信州とあり。大永元年、応永二十七年ヲ去事一百二年。六代太雄。長全尊靈、天文元年壬辰五月八日太雄と有り。太雄長全尊靈なるべし。太雄二字を略し、大塚信州と書べき所へ太雄と書て、城主となる事を知らしむ。天文元年、応永二十七年を去事一百十四年。依て六代成ル事を知ル。七代岳雄かぐ。永禄四年酉六月七日岳雄雲公尊靈大塚信濃守殿と有。永禄四年、応永二十七年を去事一百四十三年。依て七代とす。八代春雄。雪継妙点尊靈永禄五年壬戌五月六日春雄御老母と有り。春雄の年月日知れず。別の菩提所乎。春雄ハ御老母に先立玉ふと見へ、古老の伝る所の永禄二己未十一月十八日春雄の忌日乎。春雄ヲ梅翁と云伝る乎。王孫都合八代、一百五十年に及て春雄短命卒去して嗣子なし。因て群臣、南朝より給所の衣冠宝物等を山上に封して一丘とし、猶王孫八代の尊靈を神に祝しテ、王塚人所大権現ト崇敬し奉り、以て当郷の守護神とす。

岡部氏の記曰。天正元年十月朔日、大塚信濃守、車丹波守と合戦し丹波守討死、室ハ大塚氏也。一説曰、竜子山梅翁車夕齋と桜井合戦、梅翁外舅夕齋の箭あたりにて死す。夕齋婿梅翁の箭あたりにて死す。何の遺恨と云事ヲ知らず。是山名宗全・細川勝元の如にハ有べからず。定テ国界こんの論、短慮未練たんりよみれんの若大将なるべし。流石老功の夕齋にハ有べからず。車丹波守討死ス。夕齋嗣子なく、好問義秀を岩城より招力。十月朔日天正十六年義秀討死を混雑して記したるべし。

### 小山小治郎竜虎山ノ城主と成事 附菅股掃部介竜虎山を乗取る事

永祿の始より小山小治郎寓公と成て竜子山に有り。春雄を妙法寺ニ【48】置いて、其先に小山の城主永徳一百代後円融年中管領上杉氏満か為に滅したる義政が遠孫なり。千葉・小山・宇都ノ宮・結城・里見・佐竹・小田・那須を以て関東ノ八将と称すたる名家也。此時春雄短命御子なし。家老伊勢入道長祐か計ひにて、小山氏を以て春雄の嗣として竜子山の城主とす。菅股の掃部助是を聞て大きにいかる轟と云ふ。永祿終り、一曰元龜百七代正親町の始、掃部介隆成岩城左京大夫親隆の加勢ヲ得て竜子山の城を攻落し、小山小次郎父子・伊勢入道長祐を討取り竜子山の城主と成。直に信濃守と名乗り、春雄の嗣となる。是より先き、岩城より一字を得て隆成と名乗り、此時子息亦一字を得て親成と名乗。翌年親成を信濃守になして竜虎山を譲り、山の西を堀切て橋を架し、要害の所とす。二男雉尾源六を置いて之を守らしむ。隆成ハ菅股多隱居す。此時竜虎山領ハ手綱・高戸・赤浜・小野・矢指・日棚・栗野・足洗・松井・桜井・島崎今ハ福嶋といふ・石岡・大塚・君田也と云。元龜ノ初、上台原三本松にて友部山尾と極楽寺空岸入道と戦て友部勢敗北し白子山迄引退。極楽寺直に石滝台へ打向ふ。佐竹勢を切崩し、佐竹勢打負て小石川迄引退く。極楽寺兵を制して不追。退て安良川に休む。親成是を聞テ岩城の援兵を引率して帰る。佐竹義重志を得ズして帰る。

### 奥州高貫合戦の物語の事

天正二年甲戌九月、伊達大膳太夫藤原輝宗、長尾越前守ヲ大将として其勢五千余騎を引率し、富岡十郎ガ籠たる高貫の城を責る由を聞て、岩城左京大夫親隆、先ツ此敵を掃んとて関南の四将を遣す。関南の四将とハ、大塚信濃守手綱ノ城主・車兵部太夫義秀車ノ城主・白土長門守山小屋ノ城主・大高新左衛門湯網ノ城主。大塚信濃守ハ四将中にて大身也。対陣三十五日、四将謀りを廻して敵を追退ケ高貫の城堅固なり。

### 【49(1)】

### 義宣羽生田初陣の物語りの事

天正十四年、佐竹左京大夫義宣、羽生田の初陣、南摩藤十郎を討取り、其後江戸但馬守と対陣して討勝。義宣の軍配諸人は是を讚ほめたりけるとなん。

### 大北川合戦物語り

天正十六年、佐竹義重・同義宣北地に馬を牧す。此時岩城親隆卒去。子息常隆にうしやく柔弱の大将、家老白土・志賀一類権威を争。竜虎山親成一孤城ヲ以、佐竹父子ノ大勢を礙こぼん事叶べからすと思案して、東中務太輔迄御味方申へき旨密に誓紙を送る。義重父子大きニ喜、返簡誓紙を添て竜子山本領安堵、猶軍功に依り恩賞沙汰有べきの旨也。依て大北川合戦、竜虎山親成裏切にて岩城常隆大キに敗北、車義秀兄弟・勝沼兄弟白庭にて討死せり。隆通実ハ極楽寺空岸の子也。親成子なし。岩城氏命して極楽寺子をして竜虎山を嗣しむ。親成亦菅股に隠居、俵山殿と云。暮年妾腹に子な



り助兵衛と云。慶長年中岩淵と云所退去す。隆通又請て曰、御先祖左衛門尉行義公より相分れ候大塚氏、今より改めて本姓の源氏に還り申度候旨、佐竹父子許容ありと云。天正十七年己丑秋、伊達政宗須賀川の城を攻られる。城主二階堂の後室ハ佐竹義重の姉也。雉尾源六より援兵を遣す。大塚信濃守の代将雉尾源六討死。是を岩城陣と云フ。

#### 佐竹義宣江戸但馬守ヲ討取る事

佐竹常陸介源義重父子、北條氏政と不和に成て、於二下野国佐野一合戦に及び、直に勝敗を決す。氏政父子ハ不レ得<sub>二</sub>志<sub>一</sub>を<sub>レ</sub>して帰陣す。自是義重武威東国に震ひ、常陸・下野の諸士各旗下に属<sub>二</sub>。爰に常州【49(2)】水戸の城主、江戸但馬守藤原重通と云者有て佐竹義重に従ず。義重、因<sub>二</sub>東政義が勸<sub>レ</sub>偽て江戸但馬守と和睦し、兵を練り戦ひを習し、天正十八年、佐竹義重嫡子義宣不意に兵を出し、久慈川を渡テ進ませ、江戸但馬守重通驚て勢を出して防戦ふといへ共不叶して敗走す。佐竹勢勝に乗て遂北<sub>一</sub>。渡<sub>二</sub>那珂川一<sub>二</sub>困<sub>二</sub>水戸の城を<sub>一</sub>。因是、鬼神と呼ばれし藤原ノ重通、力竭て自殺す。佐竹義重其地ヲ并領す。勢弥大ニなり、水戸の城にハ嫡子義宣を置、其身ハ水戸より五里北、太田の城に住せられければ、隣国皆感心すと云ふ。此事大閤秀吉小田原陣、竜虎山隆通<sub>常州多賀郡手</sub>も佐竹義宣に従て小田原に赴ク。竜虎山家臣豊間左京・長岡修理討死。二人岩瀬陣にて死すと云ハ非也。隆通小田原陣にて戦死と云ふも亦非也。二人ハ竜虎山の家老なれば、主人隆通と誤伝<sub>二</sub>得たるべし<sub>一</sub>。

東国太平記 卷の五終り

### 東国太平記 卷の六

#### 佐竹義宣日本六大家ノ内え入ル事

文祿<sub>百八代後陽成</sub>の頃、佐竹左中将源義宣、益大閤の寵を得て常陸の大都督ト成て、南三十三館を并呑し、北ハ岩城に逼り、西ハ下野、奥州ハ棚倉・白川に及て百万石を領す。舍弟貞隆<sub>たか</sub>を岩城氏<sub>佐竹義宣ノ舍弟ヲ岩城常隆ノ養子トて岩城忠次郎貞隆ト名乗ル</sub>として、岩城二十万石を兼帯し、佐竹百二十万石と称す。此時天下、徳川・毛利・上杉・佐竹・嶋津を以て六大家と云。竜虎山領ハ、安良川・高萩ハ本より馬次也。岩城貞隆、佐竹へ出仕の休所ニ宜しとて岩城領となり、安良川横町ニ新館立つ。

#### 竜虎山信濃守隆通奥州北佐え左遷の事

慶長<sub>同</sub>五年、竜虎山信濃守隆通、佐竹義宣の命にて奥州北佐へ左遷せらる。隆通墓位牌<sub>いはい</sub>等薊川<sub>さみ</sub>東漸

寺有と云。元龜元年より隆成・隆通三代三十余年菅股城、義成・貞成・成義・行成・道成五代竜虎山を【50】合て八代、元亨年中より慶長五年迄百八十年計りにて国除す。人其罪を知らず。義重極楽寺の睿麿に報る乎。又南三十三氏の相伴乎ト云。

#### 梶原美濃守奥州植田ノ城主ト成る事

同五年より、奥州植田の城主、梶原美濃守竜虎山を兼帯トして、家老梶原甚三郎居城三年。梶原美濃守、実ハ太田三楽斎ノ嫡男也。三楽斎ハ、備中守源持資入道道灌の末葉也。道灌始て江戸の城を築ク。城中に一軒を造て静勝と云。諸の書籍を置いて入道休息の所とす。萬里和尚、此城の勝地なる事を褒て古き詩を吟す。窓禽西嶺千秋雪門繫東吳万里舟末の代繁昌極りなきの地なんと宣ひける。其言葉の如く、將軍家代々ノ御居城、漢の長安に比すべし。寛正六年三月、道灌上洛して公方義政公に謁し参内を逐と。此時の主上ハ後土御門院也。兼テ入道ハ文武の良将と聞き召されければ、武蔵の居城、隅田川、都鳥等の事勅問ありければ、道灌謹て和歌を献して勅答申奉る。

我庵ハ松原遠く海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る

年経れと我また知らぬ都鳥隅田河原二宿ハあれとも

主上叡感の余り一首の御製を賜ル。

武蔵野は高茅か原と聞つるに係ル言葉の花や咲らん

是又有難事なれば序に記す。然るに、太田を捨て梶原を名乗る事も亦なしあり。太田道灌ハ扇谷の忠臣なり。三楽も又上杉無二の味方なりければ、謙信三楽を褒美してあまり、吾上杉を継といへ共実ハ桓武の苗裔也。梶原長尾同姓の名家なれ共、今世に梶原と称する人なし。願クハ入道の子一人吾養子として、吾上杉を継か如く入道の子を以て梶原を継しめんと云。三楽面目身に余り、嫡子美濃守を遣す。以来梶原美濃守平政景と名乗る。武州岩付の城主となりしが、後常州小田城主天庵に従ひ、天庵【51】滅亡、其後佐竹氏の附庸となる。佐竹奥州菊田・盤前二郡を取り、梶原美濃守を植田の城にあらため封ゞ二郡の諸士を司らしむ。舍弟太田五郎左衛門ハ、下野国武茂城に封せらる。慶長<sup>百八代後陽成</sup>七年、佐竹氏羽州へ左遷せられければ、梶原氏亦零落す。慶長七年壬寅九月より戸澤右京之進藤原政盛、当国小川より移る。領地四万八千石。内小川或曰七千石。小川安良川新館に逗留。多賀郡の先達、長谷川別当祐眼<sup>実ハ額田城主下野守昭通子</sup>を招き、吉日を撰ミ竜虎山地祭りをして城郭普請、三年成就。同十年乙巳二月吉日、祐眼登城火伏の祈祷ス。城主政盛移徙し玉ふ。常日名を改て松岡城と云。是戸澤氏の私に非ず。公命也と見へたり。日光山御宮奉納の燈籠、常陸国松岡城主戸澤右京亮政盛とあり。曰、竜虎山・竜籠山皆戦争の響あり、不詳に似たり。故に祝して松岡と名乗るなるべし。松ハ千年の名木なれば也。或曰、松を蒼竜と云、山背を岡と云。松岡の二字能竜子山の蒼々たるヲ形色す。長谷祐眼当城の祈祷師と成、五十石を賜る。猶登城の休息所とて、北町渡邊内匠屋敷を賜る。此時戸澤氏竜子山領・車領ヲ知行すと云。友部領・佐竹領迄知行せずんバ四万石ハ有べからず。元和八年壬八月、戸澤氏加増二万八千石有て、都合六万

八千石に成て羽州新庄へ国替。伊丹衛門尉松岡の城請取、公儀御領と成り、同年十二月より水戸御領と成る。安永九年庚子八月十六日改る。元和八年より今年迄百五十九年ニ成る。

### 車古城の事

常陸国多河郡車<sup>郡馬</sup>牛洲の城ハ何人の築くと云事<sup>つまひか</sup>詳ならず。或説に、人皇九十三代後二條院の嘉元の頃ニ白庭加賀守と云人有。若シ此人の築にやと。一定の説なし。因之得ト考へ記ス。即其説に曰、天龍寺<sup>京五三</sup>第一<sup>一</sup>夢窓国師の年譜に曰、嘉元三年乙巳、国師三十一歳春三月より冬十月に至て、比【52】佐居士の庵に滞留し、冬十月白庭を出て相州に至るといふ。此比佐居士ハ即加賀守の姓也。法名ハ一宗長圓比佐居士。是円寺建立の大檀那也とそ。今此人の館とて、長円寺東南の山上にあり。地ハ上白庭に属す。是を以て見れば、此人の築キしも非る事知んぬべしと。今夢窓窟とて下薄葉北山の陽<sup>みなみ</sup>ニ多くの岩窟あり。

詮按ルに、此窟ハ上世家のなき時穴居せし窟なるべし。爰のミに非ず。所々にあり。国師寓居<sup>きよ</sup>の時、この窟にて座禅せしと見へたり。今夢窓庵とて小庵を結び住侶を居しむ。同国増井村正法寺の支院共ス。後醍醐帝の勅額も此寺ニ有。国師の法事にハ此窟ニ掛るとぞ。

一百代後円融院の建武年中にハ、砥上但馬守といふ人領すと見へたり。長谷の先達密藏院の記に、建武二年<sup>後醍醐帝重祚也年号是ヲ南朝ト云</sup>多河郡大檀那砥上但馬守と有り。

詮按ルに、此時砥上<sup>今ハ戸神ト云</sup>車に移て城を築しなるべし。当時砥上に大善寺童善院と云修験の居所を砥上と云。町の中南の側に、青山氏なる者の下風か居る地を下砥上といふ。今ハ下相田といふ。戸神ハ大善の別当する愛宕権現の立玉ふ山の名也。今に戸神市トて、極月と七月市を立るハ、往昔の遺風なるべし。但馬守此地分内甚タ狭ゆへ車に新城を築て移住すれ共、本を捨てず砥上を氏とせしなるべし。治世四十四年にして永和三<sup>後円融帝年号</sup>子息但馬守忠員<sup>かす</sup>に譲りてより、初て車を氏とせしと見へたり。

世俗砥上をヨミ誤テ、破上但馬守ト覚ユル人アリ。砥ヲ破ト見チカエタルナルベシ。

永和三年六月の記に、多河郡の大檀那砥上車但馬守忠員嫡子兵衛藏人通忠并下砥上惣一族とあり。然バ是を二代の主とす。三代ハ通忠なるべし。永和より嘉吉迄六十五年なれば、此間父子の治世と見へたり。【53】百三代後花園帝の嘉吉より、車三郎藤原東風、同く加風、同ク一風、同ク夕斉まで四代領すと云。今下相田龍虎寺の位牌<sup>いはい</sup>に法名あれ共俗名年月を記さず。大概五六代と見へて法名あり。所謂

劫春永公居士 <sup>けふしゆんえんこう</sup>	一峯三公居士 <sup>いつほうさんこう</sup>	空山虚公居士 <sup>くふさんきよこう</sup>
香山異公居士 <sup>こふさんいこう</sup>	一山榮公居士 <sup>いつさんえいこう</sup>	容山儼公居士 <sup>ようさんげんこう</sup>

或人の曰、一山榮公ハ、慶長中岩城神谷の一山寺を開基したる好間丹波守義昭なりと云。其外ハ誰と云しれすとそ。

按、此説不可也。義昭の法名ハ龍谷院殿一山明榮と有。此榮公ハ加風成べし。

百五代後柏原帝の永正大永の頃ハ、車夕齋といふ人、岩城左京大夫重隆に属し、当城に住する事年有。娘二人有て、竜虎山の主梅王に嫁し、二女ハ岩城盤前郡好間太郎左衛門義秀に配す。夕齋或年、車の上の山に出堂と云所あり。爰に新城を築んとて、民力を費しければ百姓等農事のならざるを苦み、一首の狂詠を立たり。

夕齋か新城立てなきたいないつきてみても人ハいづ堂

夕齋是を見て、感心のあまり若干の金銀を費し、营造を忽ち止けるとぞ。誠に和歌ハ天地を動し、目に見へぬ鬼神も哀と思わせ、猛キ武の心をも和らくるハ歌の徳とか。さしも勇猛の夕齋、一首の狂詠に感し、さハかりの大望を捨て破却せしハ優にやさしき事也。かほどの人ノ行状伝ハさるハいかにそやと、皆人感涙を流しけるが、是をこの記の挙とし、何某尋問して此記を作し志も亦殊勝ノ事と歎美せり。

車夕齋、思襲しじゆの嗣なきに依て、半子なる好間義秀を迎ひ入、襲封式しじゆほうしきを調へ安堵せしかバ、百六代後奈良の朝天文の初め、城西上小津田村檜口ひのと云所に兎裘とぎうの地をとし無何楽むがにそ誇りける。義秀是より車兵部太輔と号し、七百貫の俸を領しけると也。下相田村愛宕山の棟札に、天文十三【54】年甲辰ノ四月、好間太郎左衛門源義秀と記す。又た安良川八幡の棟札にも、造営寄附主車の城主源義秀とあり。或人曰ク、好間氏ハ岩城氏の支族にて平氏なるべし。夕齋ハ藤原氏なるに、嗣トなる義秀源と称する事不審しと。是を論して曰、好間の本姓ハ源氏なり。応永の頃、岩城下総介隆忠の二男三郎隆景を好間氏の嗣とす。此故世人平氏と思へり。実ハ源姓也。三四代ハ好間に住す。義秀に至て車の嗣となる。天文中に一寺を建立せしとて、岩城荒川龍門寺七世傳燈天翁順貞和尚を開祖として、下相田蘭若を造立し、号して雄峯山龍寅寺といふ。去ながら、義秀天正中陣没せしかハ、雄峯寺殿寅龍公大居士トいふ位牌今に存せり。

天正二年、高貫一戦の時義秀の息義英てい箭疵やんを蒙りしが、帰陣の翌年三十七歳にして卒去す。今猿田山淨蓮寺の靈簿ほに、車の城主と脇書して、好間院殿高譽大居士ト有て年月日なし。是に依て何某の疑ひを發し、若義英の法名乎といふ。然れ共高譽の二字ハ、高貫戦功の美譽なるべし。竜虎山あるかい御前夕齋の女  
梅王ノ室の法名、妙音院殿妙床、其外諸士の戒名多くあり。是を以て按ルに、竜寅立さる前ハ、車の香花院ハ淨蓮寺成か。然れ共、天文以前の過去牒たてなれば、古来の事ハ知れかたしと云々。

### 勝沼隼人が事

大北川合戦に討死せし勝沼が弟隼人と云者有り。未だ幼少なれば落城の時ハ母子共に落人と成て、片山里に潜居ひんせしが、干戈止んで後、竜虎山親成二兄の忠死を感じ、家系正しき者なれば後々ハ我を輔たすべき者也とて臣にせハやとの心にや、在所きやくりともを探索しに、道を守て母ハ界を越へべきニ非すといなめハ、隼人計りも扶持せしと望むに、是非なく好力かくざる家なれとも、落魄はくの身なれば、渴かわを凌ク迄にハ仕よとてこそやりにけれ。夫より母ハ紡績織ほうせきしよくちん紵に辛苦し、口腹くふを充じゆうしける。月日に

関守なければ、寒暑来往して【55】隼人今年十八歳になりけるが、亡君肉兄の回忌なれば、心計の追福をせハやと資料を弊里に運ひ、緇衣を清し、精饌を供し在か如くに法事を行ひ、亡君の御墓を拝し、先考二兄の墳塋に参り泪ながら打見れば、一掬の印塔ハ木の葉に埋まれ有か無きかの分野に、いよく袖をぬらし、哀れ昔の如くならば、折々ハ掃除し、是ハ一城主の墓也、忠臣勝沼かなき跡の印とて、戦死の功をも世の人に知るべきに、世の盛衰によつて思ハす人に扶助せられ、渴命をバつなけ共、草葉のかけにても無道の家に寄宿せしと、さこそ恨給ふらん。其上一人の母とハ居をかへ、あらぬ苦勞をかけ奉り、不孝の罪つもらバ如何せん、たとへ布衣となり青門に瓜を植、蕉そきこりくさかりしてなり共養ひ奉ハ子たる者の常成にと、直に君に願ければ、尤也、今汝んじを惜んで帰さんハ不義を以て孝を害すもとならん故速に帰すべしと、古郷にかへして母の悦を得たり。隼人母に孝を尽しける。誠なるかな好名の人ハ千金をも受ず、欲利の士ハ一針をも捨ずとかや。剛堅樹ハ地中に有て百圍の牙をなし、頻伽羅ハ卵内にて声衆鳥に勝るゝとハ、正に此人の事なるべし。野老市童も沙汰せしか、后年にハ戸澤氏竜虎山移住の時ハ名主頭六人、其一に撰まれしも家系正しき故なりと世人挙て羨ミける。又勝沼隼人の末葉ハ、今羽州山形の城主知行高六万石を領す秋元但馬守殿の召抱になり、御家中内にも大身と成。文政六癸未四月中旬、磯原村野口友次郎殿宅に二三日逗留し、上薄葉村古主車丹波守義秀ノ墓并長男勝沼新蔵人正次、二男同新三位正忠二兄の墓を拝し、其後江戸へ登る。勝沼の定紋ハ箭車也。勝沼の当時の名ハ失念仕候。追て考べし。

#### 佐竹義宣闔州二秀事

佐竹義重父子破竹の権勢闔州に秀しかバ、再び岩城常隆を討て【56】并吞せんと評議一定せしかバ、先岩城の幕下なる窪田・上遠野・高貫・下山田・植田の数城ヲ責落しければ、此より岩城を陥し入んと有しを聞て、常隆周章し領地若干を献し人質を出して降参す。爰に於て東路政義諫言して曰、菊田・盤前の城々多ハ人撰て籠置、梶原美濃守ヲ管領として植田に置、法度を沙汰させ、然るべしと申ければ、皆尤に同し、政景を城主にそなしにける。

詮按に、此軍の年月を記さす。植田龍昌寺の記に、慶長五年庚子、梶原美濃守正景常州筑波根小田より来て植田の城主となれ、因是代々の菩提所なるか故、爰に引て先靈を祭るとあり。是を以て見れば、此軍ハ慶長五年の事成べし。此合戦如何して書漏しけるや覚束なし。追て考べし。

車義照上神谷え潜居せんの事

牛淵の先主義秀か季子義照ハ、父討死して城を抜れ立寄方もなき所に、岩城常隆父が忠を賞し、寓公となし、上神谷に潜居させけるが、成長して丹波守と号す。一釣竿ちうかんに渭浜いひんの楽を事とし、白眼に世を見かぎりたれ共、心腑にハ何卒父の仇たる佐竹父子を亡し、孝養に備へバやと思へ共、今の城主佐竹の三男にて、政道も水戸より出れば、何ともすべきよふなく、心中に秘シテ年月を送りしが、慶長七年に至て、岩城氏も同出羽へ改封せられにより、義照も貞隆に従ひ亀田に下りしが、同九年庚辰の六月十四日享若干にして病を以て没す。法名龍谷院殿一山明栄居士、常州車牛瀨城主好間丹波守義照と書し、家臣國井氏神谷の一山寺に石碑を樹つ。又其側に義照の室高月女の石碑をも立たるとぞ。

【57】詮按ルに、父義秀討死して後主ハ大隈守なり。義照世子といへ共、卯角にして落城し、常隆の扶持を受ク。然るを城主と記せしハ、せめて冥府の靈鬼ヲ慰する國井が寸志なるべし。

佐竹義重の三男能化丸岩城常隆ノ養子ト成る事

天正十八年庚寅に豊臣大閣秀吉、小田原北條氏政父子と合戦の時、岩城左京大夫常隆鎌倉星谷の第にて閉眼せしかバ、室老白土攝津守野州宇都宮の御旅館に参上し、家督の事を願ひければ、猿面王即佐竹義重の三男能化丸七歳に成りけるを、御口入にて常隆の嗣とし給ふ。忠治良貞隆と号し、幼少なれば汝よく補佐し国家を治よと、念頃なる上意を蒙り面目身に余り、難有鼎護ていごによりて事成由を拝謝し陞辞へいじして、夫より吉日良辰を撰み、水府より迎取岩城に供奉し下りける。さしも容易ならぬ大望、故障なく首尾なりしハいかなる故ぞと尋るに、天正の初、車夕齋常州多賀郡牛淵城主也義秀に家を譲り閑居の身なれば、上方一見の為伊勢参宮と言立、白土長門守同山小屋城主窪田十良奥州菊田郡久保田ノ城主也と聞き、此三人も宿の主と一所に町人に略し、拝見に出て端かゝりの下に居たる時に、大閣未夕平士にて木下藤吉と言し時なれば一役を勉つと、装束美を尽し立出るヲ見て、宿の主に答ければ、木下殿成りと言を聞て、役果て後棧鋪つとに來り、面晤して千年入魂の約をなす。夫より手を分て所々一見し、下国してさまざまの音信に添て黒鹿毛の馬ヲ進上し、其時の礼謝とす。是より木下頼母敷者と思ひけるが、今度攝津守家督の願ひを上しに、早速叶ひしも昔の好を思召させ玉ふ故とかや。前書の通り一説に、梅王と夕齋桜井合戦の時、夕齋ハ婿梅王の矢に中り、梅王も夕齋の箭に中つて死すといふ。是大なる誤りなり。夕齋ハ天正五年丁九月朔日ニ病死し、梅王ハ永禄二年己未二月十八日ニ卒したり。永禄と天正五年の間十九年の違ひあれば、相討の説ハ虚談なる事明けし。去ながら人も疑ひヲなし、臆説なりと記せり。

## 大窪兵蔵水戸城を奪んと謀る事

車の城主好間大隈守ハ、夕齋の支族が義秀の同族かと説なり。是極て族成べし。故に義秀亡て後主とせし佐竹の所存察するに、同姓の義秀ハ岩城に属して我に敵す。是を悪んで岩城を捨、早く帰服せしハ存亡を計ル故と知覚せしを賞し、わざと同姓を後主となしたるハ、俗に言ふ面あて成べし。息男は丹波守猛虎と云ふ。長男猛にして実に悪虎の山に告非が如し。故に号すとかや。戰場に出てハ猪の旗を立て、一足も退かざる事を示し、面も掉らず疾走る事猪の忿に似たり。去ながら、慶長の初メ、会津景勝より援兵を乞し時、佐竹義宣丹波守に下知有て、出陣すべき由を触られしが、如何せしにや又出べからずとの事重て仰有。是に依て大に立腹し、一度人に諾を免じ今亦止ラルるとて、出ざるゝ旗色見る臆病武士の茂凌の手なり。我何ぞ是を可とせんとて、都督の命をも聞す即日打立、上杉の為に梁川城を守り、伊達政宗と戦ひ勝ち、剩へ幕旗まで奪取り、竜登鷹揚の誉を輝したる万夫不当の勇士なり。然るに慶長七年に至り、台徳公欽命を下し、義宣を羽州秋田に左遷す。是何の罪ぞと尋るに、慶長五年九月奥州に変ありとて、家康公軍を出さんと議し給ふを聞て、佐竹義宣其後路を庶り、前後二挟んで家康公を撃たば、豪傑と言ふとも必擒にすべしと諸將に約せし故が、家康公下野に入給ふ時、関東の諸將饗会すれ共、佐竹ハ約を守て其時応せず。是に依て家康公大に曇り玉ひ、嶋田治兵衛を以て、嚴譴シ給ふハ、你来ると言ふ共、我を益するに足らすと言共、我損とするに足す。但シ汝が来不来ハ乃汝が家の損のみ、若天下一定せば汝が国ハ汝か有に非すト。忿悲止事なかりしが、同七年壬寅八月廿二日東政義物故せしを幸ひとし、台室即、家康公の忿をついて移封に旧封に比すれば僅五分一を領シ、漸く七十余兵を引具し寥と打立けるにや。用らるゝ時ハ鼠も虎となり、用られざる時ハ【59】虎も鼠となると、東方朔が言けんも今身の上にやしられけめ。此時車丹波守猛虎、佐竹を諫て曰。時を見て動くハ良將の上策なり、当国ハ編少也と云とも国中を尽さば帯甲四五万にハ下るべからず。兵糧又十年の蓄有。誠に天下の兵を動し雌雄を決るに足れり。今サウソンの国を捨、不毛の地に入事口惜き次第也。君何ぞ惘々然として拙くも庸主の行をなし給ふやと、勃切て申ければ、義宣答て曰。豎子何ぞ猥りに此クの如の言を出スや、我豈其心ならん。然りと雖台室ハ天授なれば人力の能敵する所に非や、況や今天下一に帰し尺土も其有に非ずと言事なく、一民も其臣ニ非といふ事なし。且我一朝に三十三士を斃す。其子弟臣庶邦城に有て我ニ怨を報せんと欲する者睥睨して以間を窺事頻なり。縦令我狂惑し、汝が暴虎馮河の勇に従わて、討兵到らざる間に、窺ふ者の為に害せられ、笑を永天下に貼し、家系を断ン事必せり。燕雀ハ鴻鵠の志を知る事あたはず。鷲鳩何ぞ鵬を笑ふや。是ハ是、其災を惹て身を亡すの一言、衣を解て火を包ムと云ものなり。敢て以て嗔恚を發す事無と、自若として答ければ、猛虎又君が卓識古人に傑出すと雖、宗祖の国を破履の如く捨ん事、勇もなく義もなく反て不孝の朽名をとり給はんや、事を慨嘆す。今臣か言に従ひ玉わじ。釜を破り船を沈むる事軍旅を回し、一時に勝事を決すべし。何が故に螳臂軋に当の柔弱

を先とし、莫耶はくやを鈍にぶくし給ふや、是衆人の哄堂こうどう請る恥辱ちじよくなり。卑臣ひじんに於ても絶倒せつたうすと切齒せつしして争諫そうけん頻なれとも、義宣曾て言を食ねハ、是非なくも涙然けんぜんと下り、切々せつせつたる声にて闇主朽君ハ俱に謀に足らずと其席を蹴け立て引退キ、媚なる大窪兵蔵おほくぼへいざうと陰謀し、水陽城を奪わんと国人に告れとも、是義宣の心に非ずとて同心せざれば、猛虎大ニ鬩ひはつ発し、君々たらずとも臣ハ以てたるべしと言リ。我宗祖の国を捨ん事を愁こころひ、股肱ここの才を尽、忠貞の節を致すに、国人迄退散す。我何の面皮【60】あつて生て全ふし、柔弱にうじやく君に仕んとや。進退ふたつ両なから難く抵藩ていはんに触る如惘然あれしが、止ム事なくや思ひけん、己ガ勇にくらまされ自害してこそ果たりけれ。誠に名ハ実の賓とかや。猛虎の文字の如く勇猛堅固の英士なりと惜まぬ者ハ無りけり。爰に於て長男新左衛門、遺骸を吉田に葬す。世に是ヲ丹波塚今水戸吉田丹波塚と言と言となん。実也。君子ハ易く言を用ゆる事なし。耳垣みみかきニ附と小雅にいへる如く、秘蜜ひみつせし一件なれとも、自然と台徳しつに聞達しけるにや、頓おんて東都より応捕おうほ来て車新左衛門・大窪兵蔵ヲ搦捕り、陰謀稽拏かんき究り、同七月十七日に討戮せらる。又同志の者共、北酒出政通が息男彦三良政忠も同十月二罪せられけるハ無慙成ける事ともなり。又猛虎か三男好間善九良、先達て秋田へ下りし故、陰謀に組せねバ何の沙汰ニも及ハず勤仕せり。今氏を吉沼と改、三百石の奉稍を知行するとぞ聞へけり。

詮蜜せんみつに両源軍鑑佐竹小田の軍記を按に、神君猛虎か義宣に再興の志を勸メたるを悪ミ給ひ、那珂川に於て逆礫さかたに掛しと記し、其下の細註ちゆうに、口伝に曰、猛虎実ハ死刑に処せず、捨札すてしやくに名を記したるのミにて命を助け追放せられ流落して東都に出、終に甲頭かとうとなる。今の車善七是なり。是を見て疑うたがひを生し、慷慨こうかいして曰。猛虎程の者いかに世間狭人せましく前なりかたき身成みなり非人迄たらくハ墮落すへからず。子曰、己を行て恥有を士とす。是を見れば士の志を捨、百年の命を惜ミ、汚名を千年の後に残す。生て恥を見んより潔けつ死て美名を世に伝へるハ、士たる者ノ望所なり。車と言のに付ての或説かと思ふに、徂徠先生そらいの書にも車善七ハ丹波守なりと記せし由。然れば軍鑑に説も誣しゆべきに非ず。ア、拙ちつないかな猛虎、義宣を諫て不毛の地ふもうのちに入ル事ヲ嫌へるハ、君臣の道を尽し、股肱の才有に似たれとも、義宣ハ尖を制する事のかたきハ越鷄あついでいこう鵠卵を伏し難に同、云事を知覚し、恨を恥にかへて羽州ニ趣シ故にこそ、今瓜瓞くわてつ綿々として家系を輝す事、遠ク慮りし故なり。若言【61】を信し、台室向て刃を振ハ、家系を絶さん事踵めづらを回すべからず是也。虎豹ひょう犬羊の欺あざむを受さる君子の明知と云べし。猛虎が憤いらいりハ繆むを討しぬ小人道曾せうテ取所なし。胡盧こ々々。

### 車領分の事

佐竹義宣左遷に依て車丹波守生害せしかバ、是より車の城も墟きよとなれり。抑当城ハ砥上氏建武年中に築てより慶長七年迄二百七拾四年許ニして断絶す。今文政十二己丑年迄合て五百二年に及べり。其時ノ知行所をかぞへ見るに、

西丸 花園 小野 小川 小豆畑 小津田 上相田 下相田 小鋪田 白庭 中妻 磯原



大津 神岡 仁井田 平潟 上関本 中関本 山小屋  
慶長七年より手綱の領地となり元和年中に水戸領と成所ハ

上相田 小舗田 白庭 磯原 大津 小野

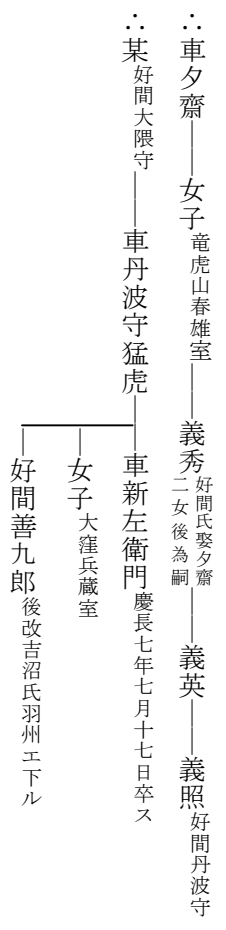
棚倉領と成所ハ

西丸 花園此内二満願寺社領相受ル 小川 神岡上下二ツ分ル上ハ旗本ノ知行所也 仁井田 平潟 三関本此内旗本の知行所受ル 山小屋

御旗本六人の分ハ

小豆畑 小津田 車 下相田 中妻

### 車両家の事



### 代々城主靈簿

劫春永公居士砥上但馬守 一峯三公居士砥上車但馬守忠員 空山虚公居士車兵衛藏人通忠  
 香山異公居士車三郎東風 一山榮公居士車加風 客山儼公居士車一風

### [62]

右六人ハ卒年不知  
 了無院殿雲長徹大居士 車夕齋 天正五丁丑九月朔日  
 雄峯寺殿寅山龍公大居士 車兵部太輔義秀 天正十六戊子十月朔日  
 好間院殿高譽大居士 義秀男義英 天正三年  
 龍谷院殿一山明榮居士 義秀二男義照 慶長九庚辰六月十四日

### 城主世系

砥上但馬守 人皇百一代後円融帝建武ヨリ永和三年マテ治世四十四年  
 砥上車但馬守忠員 同帝永和三ヨリ百一代後小松帝応永十三マテ治世三十年  
 車兵衛藏人通忠 応永十三ヨリ百三代後花園帝嘉吉三年マテ治世三十三年  
 車三郎東風 嘉吉三ヨリ百四代後土御門院応仁マテ治世二十六年  
 車加風 応仁ヨリ文明十一年マテ治世十二年  
 車一風 文明十一年ヨリ明応元マテ治世十四年  
 車夕齋 明応元ヨリ百六代後奈良帝天文十三年マテ治世五十三年  
 車兵部太輔義秀 天文十三年ヨリ天正十六年マテ治世四十五年

佐竹義宣參<sub>二</sub>向小田原<sub>一</sub> 附義宣先祖の事

斯りし処に常州の佐竹義重モ其子右京大夫義宣を御迎として小田原に出されしかバ、秀吉御感有て本領を充行れ、即常陸に下られける。此佐竹氏の先祖を尋るに、清和天皇の第六皇、貞純親王より出たり。親王の子を經基ト云。世に六孫王と称す是なり。其子多田満仲、其三子頼信、其嫡子頼義、其三子新羅三郎義光、其第六子を義業と云。義業当て常陸大掾清幹が女を娶リテ二子を生む。嫡子を昌義と言。次男を義清と云。昌義舅氏に縁て常陸国に至り久慈郡佐竹ノ郷今八天神林也にシ初て佐竹氏と称す。昌義に六子あり。嫡子太郎忠義と以下。昌義死後忠義家を嗣と云へ共子無に依て弟四郎隆義を養テ家督と【63】す。隆義二子あり。嫡子義政と言。次男四郎秀義後称佐竹別当也と言。忠義の時常陸の内七郡を領す。後に義政子細有て源頼朝の為に害せられ、此故に忠義・秀義等金沙山の城に盾籠る。鎌倉勢と戦ひ城兵堅く守て強防て陥す。然れとも秀義が叔父藏人義季が反忠に因て遂に陥て忠義戦死す。秀義ハ落去て同国奥州境花園の城に退ク。其後頼朝、秀義等が罪なきを知て免許せられ、文治五年の夏泰衡征伐の時、秀義属ニシ頼朝に一軍功有しかバ、帰陣の後美濃国山田の郷を賜る。秀義、美濃源氏山縣生レ先國政が女を娶て六子を生。嫡子義繁ハ別当と号し任<sub>二</sub>常陸介<sub>一</sub>ニ以下。承久の役東兵に従て先登し首級の功あり。秀義死す。義繁嗣。義繁に四子有り。嫡子二郎長義任<sub>二常陸介<sub>一</sub>ニ以下。義繁死す。長義嗣。長義の子を弥治良義胤と云。長義死す。義胤嗣。義胤四子有。嫡子彦治良行義号シ<sub>二</sub>別当<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>左衛門尉<sub>一</sub>ニ以下。義胤死す。行義嗣。行義二階堂下総守頼綱が女を娶て六子を生む。嫡子二郎貞義号ス<sub>二</sub>別当<sub>一</sub>。任<sub>二</sub>常陸介<sub>一</sub>ニ以下。転<sub>二</sub>遠江守<sub>一</sub>ニ兼<sub>二</sub>上総介<sub>一</sub>ヲ、後剃髪して上総入道と称す以下。嘉元三年の冬行義死す。貞義を嗣。貞義海上胤泰か女を娶て四子を生。嫡子小治良義敦、任<sub>二</sub>左兵衛尉<sub>一</sub>ニ。転<sub>二</sub>刑部太輔<sub>一</sub>ニ兼<sub>二</sub>左馬頭<sub>一</sub>ヲ以下。文和元年九月貞義死す。義敦嗣。文和四年足利直冬其父尊氏と戦ふ時、義敦属ニ尊氏ニ一戦功あり。延文三年足利義詮と楠木正儀合戦、義敦又軍功を励す。義敦に五子有。嫡子大炊介義信、転ス<sub>二</sub>伊豫守<sub>一</sub>ニ。兼<sub>二</sub>左馬介<sub>一</sub>ヲ以下。康安二年正月義敦死す。義信嗣。義信二子あり。嫡子を義盛ト言。次男を義有と言。応安元年七月義信死す。義盛嗣。任ス<sub>二</sub>左馬頭<sub>一</sub>ニ。義盛一女有て無嗣。因レ之上杉安房守憲定が第二子を養て一女に娶て以為嗣ト。是を右京大夫義仁と言。応永十四年九月義盛死す。義仁嗣。鎌倉持氏に属シて軍功ありしかバ、義仁をして関東八将に列せしむ。義仁五子あり。嫡子を五郎義俊と云以下。寛正三年二月義仁死す。義俊嗣。任ス<sub>二</sub>伊豫守<sub>一</sub>ニ。義俊五子有て嫡子を義治ト言【64】以下。文明九年十一月義俊死す。義治嗣。義治五子有。嫡子を義舜と言以下。延徳二年義治死す。義舜嗣。任ス<sub>二</sub>從四位上少将<sub>一</sub>ニ。兼<sub>二</sub>左京太輔<sub>一</sub>ヲ。子五子あり。嫡子を義篤と云以下。永正十四年三月義舜卒す。義篤嗣。任ス<sub>二</sub>從四位下右馬ノ権頭<sub>一</sub>ニ。兼<sub>二</sub>大膳大夫<sub>一</sub>。義篤二子あり。嫡子を義昭と云。次男義昌と云。天正十四年四月義篤卒す。義昭嗣。義昌に四子あり。嫡子を義重と云以下。義重二六子あり。嫡子を義宣と言。任ス<sub>二</sub>從四下少将<sub>一</sub>ニ。</sub>

進軀ジニ左近衛中將ニ一右京大夫ヲ兼。二男盛重会津ノ城主葦名盛隆の家を嗣、葦名氏と成。三男貞隆岩城親隆の養子と成て岩城忠治良貞隆と名乗る。初めハ額田小野崎彦三良昭道の養子と成て能化丸と言、額田落城の後岩城常隆の家ヲ嗣。四男義堅かたなる為東政義嗣ト。五男宣家、同国下妻の城主多賀谷修理大夫家の嗣と成る。六男彦治良義継と言。永禄八年十一月義昭卒て義重嗣。任ニ常陸介ニ一。北條氏政に和ふ不わになり、於ニ下野国佐野ニ一合戦す。直ニ勝敗あり。氏政不レ得志して帰陣して、自レ是義重武威を東国に震ふ。常陸下野の各旗下に属し、爰に常州水戸の城主江戸但馬守重通と言者有て義重に不レ従。義重因ニて東政義が勸一、偽て江戸但馬守ト和睦し兵を練り戦ひを習わし、天正十八年義重不意に兵を出し戦て、但馬守不叶して自害す。義重其地を合せ領す。勢弥大なり。水戸城にハ嫡子義宣を置、其身ハ太田の城に住せられしとや。其後義重領内の国侍三十三人、子細有て義重に叛しかバ、義重乃秀吉の命を受、彼国侍を誅戮し其領地をも并らる。此時義重の領せし所ハ、南ハ下総の国堺、西ハ下野ノ国堺、北ハ陸奥の国の内に及て掌握となり、世に天下の六大将とそ稱しける。

東国太平記 卷の七終り

【65】  
東国太平記 卷の八

額田城陥没の事并加納落城の事

小野崎下野守篤道嫡子、童名仙千代麻呂長りて彦三良昭道と言。正親町院御宇永禄八乙丑歳に生ル。天正八庚辰十六才にて初めて戦場に望む。父篤道病身たるに依て家督を昭道に譲る。天性豪英ニして家属及び佗門に至るまで是を称す。昭道祖父従道落髮して徳用齋と号す。昭道妻ハ穴戸安芸守四良義利穴戸城主の娘にて江戸但馬守重道ハ従弟なり。時に額田氏夷子なきに依て、佐竹義宣の舍弟能化丸を送り、額田氏の養子となりけれ共、子細有て佐竹と及ニ合戦に一、額田終に打負落城しけれバ、能化丸を取替し、其後大閤秀吉口入にて岩城親隆の養子となり岩城忠治良貞隆と号す。佐竹義宣の一族ニ北左衛門尉・南何某と言者あり。俗呼て御北御南と言。又東中務ハ佐竹義宣家臣也。【66】昭道ト和せず。南何某ハ昭道の姉婿也。北左衛門ハ伯母婿なり。然るに小野崎彦三郎昭道と佐竹義宣中宣よしのからず。其濫觴を尋に、江戸但馬守の家ニ四天王と呼ばれし者あり。矢田部宿・加納なり。宿・加納トモに同ク寵厚し。両雄相並時ハ必争ふ故に互に蔑ないがしろにす。加納右衛門或時親友を招き集て謂て曰。日頃無ニの交り也、今大望を同して云、譬身命を棄ルとも何のゑん意忘ん。加納か曰。我れ宿と善からず、事挙て予知り動もすれば屋形へ支ひて我を失わんとす、

是国家の過なり。同して是を討ん、力を合すべしと云ければ、各安ク鬱憤を散じ談話を快くせば、宿心解クべし。其後饗応して余念を失わん事必定也。其時不意に組んで討べし。此儀尤可然と連衆一人も変ずべからずと約速を堅クして帰る。其後宿宅に往て対話するに、当変にして弥濃なり。加納右衛門一夕招くべしと約速して帰り、奔走心を尽す事宿か達ンと計る。使節乃以招請ク日限を極む。其後に至り件の者共死一同に期して来て頼みを待。宿已に求る佳肴美酒種々饗応す。宿益々鬱憤を翻底意なく饗応受けゝる。相待たる朋友是に時余なり打て出んと言。加納右衛門聞て暫く待べし、日頃ハ不和を以憤り深りしが宿今心解たるを見るに更に余義なし、此上ハ野心を翻和睦せんと云て出席対話して水魚の交りをなさんと云て猶珍味を調てもてなしける。依之宿無異にて帰りける。相期したる朋友共支度大に相違して相謂て言、天の与るを却て殊とす、未練の至りなり、かゝる不覺の者に組するハ残念也、悪事千里を走ル習此事宿に聞へなば身置難なるべし、速に叛逆せんと宿が館に往て此謀を告ケ此上ハ宿殿へ一味せんと罪を謝す。宿大に悦ヒ時日移さず加納を打取るべしと言て却て彼者共を頼見遅滞に及バ如何と蜜に勢を催す。加納右衛門此企を漏れ聞て千悔すれトモ詮なし。手勢にて防ク事叶しとて、宍戸・額田両家ハ加納右衛門と好身有故以飛札加勢を乞。額田よりも鉄砲五拾挺遣し、其後式百騎馬ヲ出す所に、水府に当て煙【67】見へ、是ハ相凶の狼煙かと見るに市毛に至て水府を望めバ加納屋敷焼失せける。其故北をさし額田氏帰陣す。先ニ遣す鉄砲の者五六騎、軍司八郎を初メとして加納下の淵へ飛入水底をくぐり額田へ帰る。加納右衛門勝利を失ひ落行、額田の加勢誰々軍功の討死と次第一々注進す。宍戸も鯉淵迄出馬する所に物見立帰り、加納落城を告るに依て引退ス。加納額田家に親み有に因て其所を遁来て昭道を頼みければ、則チ是を留。佐竹故有て加納を乞へとも出さず。依之佐竹義宣大に憤り大軍を以額田の城を攻む。小野崎彦三郎昭道小身たりといへとも其勢分量に勝れ、惣軍七百余騎を保つ。軍兵の騎馬に金せんこうを掛る武者五十騎、朱のせんこう三拾余騎、仏舍利の別当上雲寺三千石、寺領より騎馬五拾騎を出す。義宣多勢と雖度々勝利を失ひ、額田の軍兵ハ一騎当千にして諸卒死を顧す軍法を屹ト守り進退下知に随て相戦ふ。昭道常に摩利支尊天を敬し、又八幡宮を崇む。因之軍の度に瑞を示す事有。昭道祖父盛入道存の宝盛終て後長井額田の内と言所に居住して偏に一向専修の教を重するより外他事なし。時の人長井大方と称す。石神口あり。ケ様の堤方長井村彼大方に兼て昭道より本米崎村の館へ此館堤ノ東なり田口一矢と言士を籠置。此者大性なりと言。天性の勇略なりとなん。

#### 佐竹勢敗北の事并河井左太夫昭道ヲ謀り見る事

兼て額田方にてハ謀を廻し、布を裁、紙をつゝんで旗とし、林の間に立置敵に大軍の粧を見せ、又田口一矢も本米崎の館を明て額田へ籠城す。然るに此者鉄砲上手にて、士卒を下知し鉄砲を揃へ寄来る敵を打散し支たる故、長井堅固にして敵愾旗を巻て引取を追討にして首討取る。昭道田口を一矢と号す事、此時の褒美の改名也。向山口におゐて東中務と昭道出合、願所と押懸組て勝負

を決せんと駒ヲ乗寄ければ、東中務昭道の勢に辟易して引返す。昭道声を懸け添鞭して追。敵面を向て、小童追事なかれと言を欺て引。猶頻に追時に馬廻りに従ふ小姓敵【68】鐘付しを憤り、事を得ず当る敵を討取間、東中務ハ軍中に逃入り、齒咬をなしても甲斐なし。扱又岩井窪に控へたる河内伊勢無類の働、大勢討取り相支へたる備へを突崩す。小田甚兵衛ハ矢倉を上げ町間を積り大筒放掛、敵兵数多打殺しければ此年も破れ敵退きける。大久保采女此大久保采女石神ノ城ヲ攻落ス大剛の者也。登階祺の紋額田家の一本鐘と呼ばれたる勇子なりければ数度の高名、敵軍此印を見てハ猶予して追懸ケず。或木田麻利右馬亮・藤田修理・白鳩惣兵衛・大澤左内此等各名を得たる大剛の者なれば、敵に向ふ毎に勝利を得さると言事なし。其外赤津豊後・萩谷和泉、軽き者にハ軍司八郎知勇あり。武篇数度の誉あり。或時首ヲ八ツ取て実檢に備へ依之昭道八郎と呼。其後高名感状を下して日向と改ム。此外高名の勇士数多有と言とも、其後佐竹勢大軍にて強ク責掛れば額田勢已に敗軍に及と改ム。立花藤治衛門軍慮を芝を取らせ勝隠士卒築逆茂木引暫相支ルといへとも、敵軍大を率して荒手を入替く責戦ひければ、味方多く討死す。爰に敵軍の中より偏二倔強の武者一騎額田勢の中へ割て入り近習の侍を討取ける。昭道是を見て直に打留んと自ラ馬を乗出す。赤津豊後馬の口に取附て大将自身の働軽忽なりと頻に止む。止事を得ず金の磨ノ柄を以て放てと言て小手を打事幾度と言ふ事なし。猶放さず。其間に敵ハ首取て引退く。斯て敵大軍柵近く寄来ル所に、雨宮八幡の方より辻風を吹飛し味方の馬煙を敵中へ一面に吹懸ケ、目を開事不能。寄手の勢是二漂前後不覚の所を、昭道味方に向ひ、軍ハ利を得たり、返せや者共と乗廻し再三下知に及て引立たり。軍兵亦六騎取て返すを見、惣軍引返シ、塵臺に酔て佐竹勢え懸向て死を忘れ相戦ふ。敵軍防事不叶留ける。此時も大勢討れて水府迄引取たり。数度合戦に及と雖佐竹勢勝利ヲ失ひ、剩軍兵多く討死す。時に佐竹勢の中に戸村大膳戸村ヨリ出たりと言大剛の者あり。戦の毎に進事を知りて退事を忘るる敵の勇士有り。此者旗の紋ニ【69】猪子を画せ、是を立て戦場に望む誠猪武者トハ此者成べし。如何のなる事か此時ハ同水府迄引退ク。此事後世に聞伝て其哥に

猪も命惜きを知るなれば命知武者か逃る大膳

と口遊の一興とす。佐竹義宣度々戦ひを起すといへども戦功なし。如何して打べしと評議す。諸卒の中に河井左太夫と言者あり。知恵深く猛勇ノ武士なり。義宣是を呼んで昭道を打取べき計略を問ふ。河井則子答。数度ノ合戦其功なし、人数多く討るゝ条無念の至りなり、人数多くてハ相叶ふ間敷条某思慮を以一人額田へ打越し窃見可申旨を述る。佐竹義宣此儀尤然べしと討応せハ、必額田の家臣你を打留んと切て出べし、其時伏兵ヲ隠置て其難を救ふべし、心安かれと言ければ、畏て唯壹騎若党少々相具し額田の城中之行、案内を乞、其後中入る。奏者昭道に達す。次第を尋て子細なしと対顔に及。次には老臣を初め先壹番に大久保采女・木多左近・麻利馬之亮・田口一矢・立花藤次衛門・大澤左内・白鳩惣兵衛等相詰る。川井左太夫寛々と談し席を期して急て聞と雖憚て言わす。下僕劣劍の目利を好む。秘蔵の一腰岩通兼光拝見と望む。小野崎昭道安き事なりとて、左落葉望に任すべしと取寄、左太夫に指出さんとするに、河井座せる様を見るに膝を

下両手をかけ居るに左右の大指ねたり。是を以思に、若シ害心の程もやと誤て彼が刃下に失われなば口惜しきと平生一身を放さず脇挟む一腰盛光、其態数度目手に掛て覺へ有を少シ押くつろけ窺て、河井か膝ひざ近ク摺り寄心静に一覽と云て屹ト指出す。左太夫謹て取一尺計り抜見て扱も見事なる御道具と褒美の挨拶して其儘鞘に納る。笑顔にして熟覽可有と言。河井余日を知て叶わじと思ひ夫迄に及ばじと指出す。置て直に一札して本の座ニ着ク。其時饗応す。時宜を述る。左太夫曰まうス。今日ハ聊の事ありけるべからず、久く無音の間一覽の為参たる由を云て帰る。昭道人を出し見るに、佐竹より【70】額田の城外へ忍来る伏勢首尾相違して伴れて帰る。義宣屈之言。昭道ハ扱も知勇兼備の将なり、戦て利を得ず、謀て節を遂ず、更に功なし。然る所石田治部少輔三成と佐竹義宣と中善、因茲額田昭道度々佐竹に向て敵す。猛威にして我防に力を失ひ、是を如何と石田三成方へ言送ル。則三成相計らひ、重て大閤秀吉の奉書ト号す。佐竹ニ下知す。額田へ以使者を奉書如斯速に退城よレせと申送ル。若シ違背せば一族不殘共に科罪すべしと言送る。其日の夜陰に至て北左衛門尉額田へ忍来て昭道に対し奉書の儀論する所なし。大軍を率して攻ルに終に破れず。奉書下れば迎空廢城し何国ニか行ん。唯一戦に腹切らんと言。北左衛門尉是を聞て河内内膳・大久保采女・白鳩惣兵衛・田口一矢・藤田修理・大澤左内・木田麻利右馬亮等呼て各所存如何と問。我々所存も主君勇氣あり、必死を遂んと有べし、去ればこそ蜜アヤに来て候。北左衛門尉申けるハ、去バとよ、爰にて戦死致されバ、父下野守祖父徳用齋迄佐竹より討るべし。然らバ逆罪を儲クべし。量二に節一不能なす為なすニ榮名悪に恥を一立ルことニ大功を一との先言あり。命全ふして可レ待二其節を一。奉書ハ、佐竹・石田と善か故に到来する処なり。此一乱の発起を尋るに、此方より佐竹に向て敵する事なく、大閤えの不義もなく、加納由緒に依て頼来るを士法を忘れて無下に出す謂れなし。今に至てハ佐竹も一乱の置処なく故に奉書謀拵なるべき也。速すみやかに謀を入て城を廢はいして重て時節を待べし。南何某の所存次に同じ餘く夷見を加へべしとなり。各如何存るかなと問ければ、面々聞て尤至極と言。北左衛門尉重て申さる様ハ、退城に及バ天徳寺へ可被引。是に退ニ於ハ三ツの強き利あり。一ツハ佐竹代々菩提寺なり。如何してか祖々の位牌いはいノ向ハあやさん。二ツにハ敵寄来るとも難所なり。悪害多く好シ。三ツハ退場ハ山伝へにて能処也。先々妻母等を今宵の内に心安き者を附属して天徳寺へ送られよ。其跡より彼忠臣等を伴ひ昭道退くべし。在席の面々能供すべし。然れば是へ佐竹義宣討手指向る事あらバ潜に告べしと談ず。昭【71】道繰返し速に廢城はいする事更に甲斐なし、唯敵を防キ戦死を城中に留と申ければ、北氏大きに轟いり、死ハ安事也、唯存命にして一度本望を達せんと欲する志ハ無して、剩へ逆罪を招く条、頗不覺の至りなり、夜明なば如何や面々急に供して太田え引退くべしと言て北氏ハ帰宅す。斯て近臣采女・右馬亮・惣兵衛等を初め北殿の御陳如斯克尽せり。其儀に任せんと早御上を退られ路より彼方へ越せられと一同に申けり。昭道も爰に於て同意す。其義ならば先ツ内室を退べしとて、穴戸より伴ひ来る昭道出頭士、藤が咲加賀・河内内膳・萩谷和泉此者を相添て天徳寺へ送りけり。昭道ハ西城徳月齋へ暇乞、退城の支度なり。扱亦昭道ハ大高出雲・山崎八郎・小林監物等を召出し申附られるハ、

我家に秘蔵の伝宝勿論蔵人の武具其外不殘只今より松原本米崎村の内也へ可被送。上宮寺ハ菩提寺と言、代々縁者由緒也。此寺へ引取べし。外々の者共へ申附随分心を付堅固に可致と申付られる故、右の重宝悉く上宮寺へこそ送られける。則院主火禍を恐れ東西へ隠し置き、堅固に相守りける。夫に附徳月齋如何なる等閑の致方と院主申ければ、其旨早速申達す。長井大方女徳マツ有齋諸共に仏参なからと進メ漸に引退。高村大和・大高出雲・山崎八郎・田口市衛門供しける。留主居にハ須藤兵庫・武藤佐渡、其外道具渡り同才料奉行蔵奉行其外爰ニ略ス。上宮寺菩提寺と言、代々縁者由緒なり。此者へ引取べし。外々の重宝悉く上宮寺こそ送られける。上宮寺ハ菩提寺なれば度々佐竹より心を附る故用心嚴重といへり。其節昭道の供にハ大久保采女正・白鳩惣兵衛・木田麻利右馬亮・藤田修理・立花藤治衛門・田口一矢・大澤左内是等を供として太田へ引取、天徳寺に於て内室と一所になる。其翌日、軍司日向其外十四人、額田はい廢城、天徳寺へ引退くと聞いて口惜しき思ひ、我体の者なれば迪主君の御先途見届けさるべきかな、何国迄も御供せんと渡場迄行内に、佐竹より河井に閑所を構て額【72】田勢を止む。彼者共卒に通んとす。日向しばらく爰ハ我に任すべしと先に進み通番の者共何処へと止む。軍司其時申けるやふハ、額田の小野崎昭道太田へ退けるに依て討手の檢使の為に我々ハ行者なり、敵味方見知らぬハ盲人もっに類すべしと破顔あわて通りければ閑所の者共謀られて実にもと言葉ことばなく通しける。額田方の者共虎口を遁れ危あやうき命を助り漸々天徳寺に行、昭道へ件の趣を述べれば、昭道大きに感じて軍司日向に褒美すとなり。

東国太平記 卷の八終り

文政十二年秋写之者也

## 東国太平記 卷の九

第九 昭道廢城於天徳寺一怪意并那須へ退出の事

昭道那須え着ノ事并雲巖寺仏舍利の事

昭道火難を遁レ那須退口并日光え趣事

昭道仙台え入悪馬の事 附佐竹ト昭道和睦大坂陣の事

第十 忠輝卿兵糧不足の事并額田昭道越後え入る事

額田昭道水戸再入の事

常州多河郡櫛形城の事并山野尾城の事

櫛形の城式代目の事

山野尾開基の事

折笠村三郎天神宮の次第并棟札の事

昭道廢城於<sup>二</sup>天德寺<sup>一</sup> 怪意并那須え退出の事

既に此時天德寺におひて怪意あり。猶も敵中なれば心をゆるさず、かわやくに<sup>なまぢしりのり</sup>至まで用心專にす。内室手籠をたつさへ、随行所にかわやの中、唯今人を切害したる如く生血四辟にかかり、板の浮る計りなり。又備餅籠中に入れてかけ置に、一夜血かゝる。然る所に南氏より額田に於て徳月齋下野守え潜に使を遣し申送る。明日佐竹義宣勢を催し天德寺え討手馳向ふ間速に告る。夜中何国へ成とも退せ然るべしと申送る。兩人如何して知らすべしと思慮を廻す。篤道計るに尋常にて何共川井の関を越事成難し。若も沙門山伏などハ諸国修行する者なれば通べし。幸に今天神宮の別当梅松院能信ハ昭道と日頃心安し。又才覚多智の僧なり。彼を頼み可然と言。徳月齋尤なりとて則能信を招寄、旨趣を述、片時も早く通せんと思ふに、俗形叶難候間、願クは【74】能信太田へ行て此旨達して給われと言。能信、御意の趣何より以最安き事、兼て天德寺へ御機嫌伺可奉と存処、一大事を蒙る条偏ニ沙門の身と雖、悦爰に有、随分早速に天德寺へ注進に及べし、尊慮安せられとて、夫より旅行の出入二三衣袋を首に掛、急ぎ舟渡に至る所に、関守共、法師何国へと咎む。我ハ太田金剛院の門下学文修行に往て今太田へ帰る者なりと言ふ故無異ニ通る。是に依て程なく天德寺ニ至り、額田従道篤道方より書翰を指出す。則昭道開き見るに、明日佐竹より討手向ふよし南何某より潜に告る、早々退出可有候と申送る。能信申けるよふハ、此儀可達の旨愚僧に仰付られ忍来る所なり、今宵人も多きに日頃の厚志を以、此度一大事を告被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>知条、誠に以て逆謝少なからず、道路の難を凌ぎ来る其志し如<sup>レ</sup>洵喜悦する処なり。然れば能信ハ早く額田へ帰り徳月齋両城へも高命奉畏旨申べし、若し存命せば再会の時を期さんと申ける。能信聞て悲難の涙押包ミ、先々急ぎ退出の支度と進メける。能信も未だ返らざるに、昭道ハ采女・右馬亮等を呼集て、佐竹義宣より討手向ふよし、那須大関氏好身有、此方に越べしと額田両所より被<sup>二</sup>仰越<sup>一</sup>ル所なり、立退存命し何為にかせん、妻女共に生害せんと言ふ。采女を初其外の家臣互に面を見合て一言も述す。其中に右馬亮、上意なれ共城を廢して此地迄遁れ出給ひ、殊に北左衛門殿・南何某殿仰と言ひ、又徳月齋西成孝教の御為、誠に御寿命長延して再ハ本懐を遂させらるべし、先々遅滞に及の間此地速に退せられ然るべし、斯上<sup>レ</sup>申ルハ、命を惜むに似たり、諸士下僕<sup>ハ</sup>の心底如何なれ共、北殿南殿御誼と言額田より能信秘に遣さるゝと言。彼と言是と言此事的中の理とこそ申なり。各所存如何と問。大久保采女を初め誰も皆斯とハ存れ共申出し兼たり。右馬ノ亮申上る旨一同に理至極と存するの間、敵未だ寄来らさる先に主君を退け申、跡より早々退かれ可然と諫言し、理を尽せりと歎悦す。昭道言様、能信額田へ帰り、悉く見聞の通なり、因て此所ヲ【75】



も立去条、此旨帰宅して皆々へ申送られべし、とて能信を額田へ帰しける。

### 昭道那須え着事并雲巖寺仏舍利の事

夫よりして、内室に平生にてハ退き難しとて山伏の体の如に身を省出立ける。河内内膳・萩谷和泉・藤咲加賀此等を初め内室を供して、日光禪定の体に拵て那須を指て山伝へに行。跡より彼家臣等供として夜陰に昭道退けらる。大関氏ハ昭道の為にハ伯母婿なり。彼に往て頼、暫く居住すして安じけり。逗留の中雲巖寺大忠和尚と談す。益図所望に任せ是を画て彼寺に寄す。大忠感悦して胝詩を（詩を賦）文を綴り謝す。今にあり。亦往古より謂有て伝来する仏舍利等、俗家に安置シ不敬也と彼地の真言精舎に軍神と云て預り唐櫃の内ニ納ム。或時住寺他に出る時、若齡の僧有り。夫共知らず彼唐櫃の上に登る。忽に五体瘞両股投出ツ。住寺帰り来りて此を見て驚怖して噤し事の実否を問。昭道白地に答。住寺護摩を修しければ両股元の如に平愈す。依之仏舍利を件の奇妙昭道を初め従ふ者見聞す。不思議成こと也。

### 昭道火難を遁れ那須退口并日光山え趣く事

扱も佐竹義宣の大軍天徳寺へこそ押寄る。雖然敵老人もなし。天徳寺沙門たりと雖昭道諸切にして一度頼れたる上ハ味方の退所を曰ズ。敵共ハ主君の菩提寺ゆへと寄手私にも叶す空敷大勢引取り。其後那須の雲巖寺へ退由、佐竹聞て大関氏え密に書を遣す。依之大関心変して昭道を討取るべき計略ス。然と雖従兵倔強の勇士なれば、額田の一城を佐竹が猛敵鋒先に左右なく討得ず。昭道小童を召抱度よし伝聞て、大関心安く召仕ふ者に言含、夜昼昭道二仕へて忠を尽すべし、透間を伺ひ風夜家二火をかけべし、急火に周章ル処を押掛け討取べきとて、火道具を拵て彼童に渡し、此事仕成せば鎧を与ゑん、宜敷奉公可致とて遣しけり。昭道宅に来て奉公を望む。藤ゲ咲加賀是を見て則達して指置き、兼て主君の命を得て仮りに事ルことなれば、【76】物に心をくたき朋友の心にも違ず。昭道を初として褒美して召仕ふ。然るに大関の城中より伯母竊に対面を願と言、一通の書札到来す。急き城中へ入り対談に及。伯母落涙を流曰ク。佐竹より内通あり、是に依て可討るなりと言ふ。如斯行先とても頼なく最口惜敷次第也。急き此所を立退き便能所へ忍ばるべし。昭道唯今知せらるゝ条旁以謝しかたし。併何国迄か落行申べし、爰にて討死せんと言ふ。伯母曰ク。其儀有べからず、若し左もあらんに於ハ我も生害に及べしと。同領掌シ帰宅す。其内に彼小童昼寐して居たる側に、見れば火を付る道具を置たり。昭道に訴、然に依て此者子細あると責問ひければ、終に白状して非罪の処、従者を集め伯母の告を以て彼火道具品を見出しける。危キ難を通れ、小童の言葉を聞に、不意に我を討んとする事疑ひなし、速に此地を立去るべしとて、妻女前の如く退ク。伯母の方へとて城中へ行、従者制すと雖唯是儘に落す事余り甲斐なしと別を取て那須領より日光山の方へ趣ク。中禅寺迄しりそき此所の中将坊を頼み、殊に勝れて懇切なり。うき中に心を安して春秋を送る事有。然る所に仙台政宗より一封の書を通して、本意達するの間

は奥州へ来れと有。幸ひ奥州へ下て昭道政宗と会谈希心あり。悦で則其意二任スべしと返翰に及、其後政宗日光迄珍物を送る。音問れ度々に招事不疎、中将坊に別離て奥州へこそ趣きける。

#### 昭道仙台え入悪馬の事 附佐竹ト昭道和睦大坂陣の事

斯て急行程に、小野崎彦三良昭道ハ奥州仙台伊達政宗の城中に入て大に悦び、懇意他に異に依て三千石を給て旅館を慰む。或ハ茶の湯の鷹乱舞・猿楽・酒宴・弓馬庭構に拵色々になぐさめる。老臣等も皆聴聞す。就中政宗伯父伊達安房守重實別懇し、此時秘蔵の刀左文字龍切とて証を添たる一腰代々伝る重宝を彼竜頭に添て送之。又那須重代とて与市宗高往古八嶋にて扇の要を射たる時、此刀を褒美として義経より下賜。彼是取添て政宗へ【77】饋り物とす。此刀ハ額田善道の代に那須氏鷹狩に出しを、故有て鉄の棒にて打殺し依て彼刀家に納り有り。額田家代々強力の血筋也。此捧ハ鉄を以八角にして白銀を筋に延て枕置す。二人にても上げ兼タると言ふ。鉄の棒を徳月齋迄大力伝る筋目なり。篤道より脇腹山城守ト言に伝りてより脇へ相伝る。昭道ハ弓馬元より家の業なから馬上達者、鷹狩に出、鷹居片手綱にて乗付て合、或ハ狐を追出させ胴切にせし事度々なり。又政宗の家中に悪馬有。是を隠して昭道を試みんとなり。或時馬名譽の達者と承る。爰に少々口強き馬一疋有、乗見られよと所望二及。昭道辞退は不覺と領掌す。則馬場に引出す。手綱捌て乗出し、口を試に口一方強し。亦馬場の向に高き土手有。此所を心掛て地道に三辺乗廻すとかけ出す。留らずして己か儘にして土手際に乗駈引止てハ乗返し、心静に乗納む。白石を初め見物の諸士一同に称美す。此馬ハ仙台に乗得る者なし。希代の名人と諸人誉ける。是によつて仙台にて年を経る内、徳月齋従道ハ北左衛門宅にて病死。本願寺宗なる故に上宮寺菩提寺と言共、同宗なればとて事宜に任て久米願入寺へ葬ス。然るに佐竹義宣、昭道理不尽の鬭諍と悔し故、下野守ハ寺へハ不相障。然る間篤道をも一所にならんと政宗へ望む。其旨心に任すべしと則引取、一所に安堵の思に任して星霜経ル事年有。此の内に大閤秀吉、高麗の戦を起し、築（紫脱か）え趣き玉ふ。政宗も供奉に付て、昭道も出船の津迄餞別トして立に西海に至る。此時も水難に逢ふと雖鍛錬の故に死を遁れ、此節政宗深く感し自筆の書翰懇切甚だ厚し。其書札に今にあり。高麗隨兵帰陣の後、佐竹義宣往古の積情を悔、和睦せん、早く遺恨を散せば本所安堵子細なしと言送るト言共心をゆるさず。故に重て無偽旨神文を以北南の書札を指添て数度音問の上ハ子細に不及、本領に帰事喜悅の処也と、旨趣政宗に達す。政宗聞て本望たつせん上に心に任されよと言。若相違せしかば此上猶も疎意ならさる由熟意を尽し、別て二度佐竹の領分に入。然れ共【78】東中務常々不和なり。依て支て義宣に言。昭道ハ日頃屋形の強敵と成、殊ニ政宗ト善。後來如何成珍事を止んも難計、先々試給ひ、其後本処へ御返シ可然と云。義宣是に同じ。先ツ心底を尋披て見よとて藤沢小路岸又八郎が屋鋪へ頼入当分扶助トして六百石を給ふ。近き内に本所に返さしむべし、其内堪て送られと懇使音信度々に及。然る所、石田治部少輔三成謀叛を起シ、家康公関ヶ原御発向有て石田三成を対治し給ふ。御帰陣の後佐竹義宣ハ思召しに不隨証人乞玉へとも出さず。又

石田にも組せず。家康公御尊慮不宣。依之羽州秋田へ弑拾壹万石減シ移す。是より先、佐竹義宣の家に附てハ凶非有。毎月義宣八幡宮に社参して神前に扇子を抜て開き置、常に拝礼す。故に扇子を開んとするに開かず、其儘二脇に置いて拜す。下向の時拜殿の上に白鳩二羽喰合て下り死す。供人奇怪の思ひヲす。果して家門衰微の凶を感じたり。秋田移住の砌り、昭道ハ本意ならざる間水府に留る。相模守証人を出すべしと云ふ。則一子仙千代丸ハ笠間へ遣シ事静り返シ給ふ。仙千代丸長りて定道と号す。此定道往昔政宗見舞として西国下向ふの刻妻室伴ひ京師藤森に留る事あり。一子無故清水寺に詣て諸共二丹精を抽て一子出生の願志を立、下向の時清水寺坂下に壺ツの大栗を得たり。夫婦悦靈者の利生新なりと頂戴す。其後生るゝ処也。小野崎昭道佐竹義宣移国の後額田の旧土竈きて片庭の屋敷を取立、閑に光陰を送る。然るニ大坂陣至来越後ノ大守上総介忠輝卿・松平大隈守吹聴を以仕。此時西城下野守脇原の末子に小野崎忠兵衛尉とてあり。江戸町奉行米津勘兵衛寄騎卜成。此才覚を以其頃増上寺開山欽知国師ハ相国并將軍の御前宜ク南光坊増上と両輪の如く出頭す。此国師へ下野守篤道・同忠兵衛・舎弟勘介共に相濟、篤道落髮して善性と号す。然る所に久兵衛尉昭道、忠輝卿御供として大坂茶白山に発向して備を立給ふ。向の山に当て真田左衛門尉行村向陣を堅ム。一方ハ木立あり。其方の在家を焼失し木陰に旗を立并其間扶疎になして【79】行武者交りの騎馬走通り馳戻る。昭道忠輝卿仕寄せ玉ふかと是を見るに、駿馬一騎駈出し唐黄羅紗の長頭巾風に靡、黒き馬に金覆輪の鞍を置せ其身寛々と打乗り、元より馬上も達者、殊更馬も逸物強と見へたり。敵味方の備の間を突与乗通して引留、馬を静めて来る。誰ならんと見る処に奥州の政宗なり。忠輝卿も陣中より乗出給ひ両馬一所に乗寄せ三四言蜜談して元の道を静に我が陣屋へ引返す。政宗則ち忠輝卿の舅也。忠輝卿ハ馬より下給ひ床机に腰を掛玉へバ、諸軍勢一同に居たり。昭道大隈守に申ける様ハ、如何成るを以如是の御芝居二三千も有様に皆申と雖某ハ小勢と見申候、三百騎より多くハよも有まじ、真田左衛門尉行村ハ流石聞ゆる大剛の勇士なり、先敵に人数の多少を計られじと木立に旗を立、騎馬歩武者打込て前後に行返り在家を焼立煙を以て人数の多少を隠さん為なり、此方の大將軍を恐れて進み得ず控へたり、大軍を以押掛られ候ハ、即時に敗北仕るべし、唯今芝居如何成るぞや、此体を見れハ打捨引取るべし、其時後悔ハ詮なし、哀れ某に御勢三百余騎預なば憚り多申事に候得共、速に追散し候わん、後悔あるなど言ふ。大隈守ハ実にもとハ存じなから若伊達政宗指図に加ると見合サル内、案の如真田左衛門尉行村鼠栗くくと人数を薄く成行て備を引取、夫にても押掛玉ふ気色もなく幕を引ての御休息、浅ましくこそ覚けれ。其時大隈守額田昭道申さるゝハ手勢計りを以討向ひ度よし申さる。如何討べきかと、此手に偃月に備へ両脇を明置然るべしと言ふ。大隈守聞て左様にてハ中へ出張り過るかといふ。其時額田昭道我に御任せ候得とて、其如く備る時四方口より城中に責入、火をかけ、然れば塩硝に火移り、震動雷電夥敷音に驚き何れの勢共知れず崩れ来る。隅州勢敵か味方かと騒く所を、額田昭道申されける様ハ、全是敵にあらず、件の響に驚来る味方の勢なり、屹卜相堅めべしと沈めらる。其如く崩れ来る味方の勢脇に明たる両道を悉く押通る故備堅固

なり。軍奉行并見諜【80】等高声に誰人と問ふ。松平大隈守と答ふ。大勢崩れ来る。騒さわず爰に押居る体神妙なりと称美して誉を得たりける。

東国太平記 卷の九終り

東国太平記 卷の十

### 忠輝公兵糧不足の事并額田昭道越後え入ル事

斯て、大坂の城火煙り天守に燃上り、黒煙りの中に春霞の如く赤色の氣立り。血煙りと云物なりとぞ言合り。大坂既に落城に及ふといへとも、忠輝卿ハ終に一手も逢ひ空ク帰陣し給ふ。時に軍勢高麗橋はしより往廻り通るべき様なし。昭道計りて鉄砲百挺計り虚空に向て放てと下知して打しむ。敵是に驚き崩れて走散故、道排みちひらて後後自由に通る。行諸士大に褒美す。夫より京都ニ至り、小荷駄ヲ相待と云共遲滞ちたいに及び主従飢うづに臨ミ凌く。本多喜左衛門・後藤与介杯付て送りし京の宿所へ尋来ル。因茲暫ク休息す。数日を経て共忠輝卿より御扶助の義もなく、小荷駄兵糧を尽共隠到達といへ共沙汰ニ及び、本国より召連れたる士卒扶持すべき便りなく、額田の従者三拾人余り暇を取せ、【81】是迄従来る事感悦斜ならず、併シ扶持いたす事ならず、一ト先ツ常州へ下り、此方の左右を待べしと指下す。其中二軍司八郎申様ハ、自ハ如何成共主の御先途見届す尸を君辺に止ん。額田を出る時、父申付シハ御用にモ相立ずして本国を懐ヒ帰来らバ打捨べく条、始終見届奉れと親申含候得は旁以古郷へ立帰らじ、何国迄も御供と申。此上ハ是非なしとて其心に任せられ、自余も逗留の願ひを立といへ共皆々本国へ下シ畢ヌ。其後も至極艱難かんのめに及び、其竹の笛何によらず悉く売代かへ、或ハ八郎・喜左衛門才覚を以て一日を送りける所に、隅州より白銀貳拾枚送られるに依テ暫ク力を得たり。江戸但馬守孫落ちぶれて昭道ニ伴ひ大坂迄来る。其得レ生痴愚にて昭道心に違ふ事往古の好身を思ふ計りなり。然るに八郎此度の働き深く感し玉ふ。斯て大隈守より申来ル、兩御前御陣ニ附キ、貴方事越後の中にて知行拝領、屋舗窪寺に居住せよとの上意の旨、則御判戴たい頂てう、猶是迄ものいり漸ク越後到着奉行る。途中ニ出迎ひ、是より種々の饗応数日の構懐を散す。知行入部ス。一見屋敷窪寺を見るに、一方ハ山水落地面此所に居ん事を悦ひ、近日普請へうげく催す処に、忠輝卿大坂御進発の始終よからずニ依て、勢州朝熊へ左遷なり給ふ。是ニ依て再漂泊へうはくの客と成て艱難弥増て力を尽し江府ニ下り、篤道善性弟忠兵衛・勘助に对面シ、増上寺へも参入し、其後常州額田片庭ニ再入シ、此節江戸に於て大隈守申されけるハ、二度浪々の身となり扱々不運ノ至り、此上ハ御所へ濟シムべし。併三年自分の力にて給仕申、其後扶持料下し置く、大法なり。如何致さるべきやと相談に及ぶといへ共、越後より当所下向たに不相成、況や其事難計し。先ツ

此度ハ下国と□其事も遂ニ數敷ヲ一事言語に尽し難し。重て片庭入静二年月を送ル。此時に当て、源威公水府の城主となる。中山備前守附属す。然る所【82】鈴木金太夫・太田重郎兵衛度々額田へ来り交り深し。依て源威公二事を望見両士則ち中山備前守手綱ノ城主に達する。赴否未聞す。何方にも武功ノ人知るならば、承ん事を頼み申さる。当山ハ諸国の大衆参集会上なれハ国々の沙汰あるべき条あり。扱社申出ス処也と国主へ申さる。則ち答給ふとなり。

### 額田昭道水戸え再入の事

当時常州額田に小野崎彦三郎昭道と云ふ高名の勇士あり。往々の軍功委く談語に及、則証拠是にあり。当山の中に親兄弟居たりと呼出して対顔に及ばしむ。豊嶋氏大に悦有り。武功の仁尋事ハ別儀にあらず、井伊掃部頭殿頼処なり。此旨井伊殿へ申べきなりと伊井殿へ申。掃部頭殿聞て願処なり、幸と三千石を以澤山へ招んと欲す。豊嶋氏国師へ来り則親弟え達し、昭道二達す。昭道早速出府有べしと也。親弟即時に書札を額田へ遣す。思惟して早速中山備前守へ願ひを上げ、不分明承知の上と先の両士へ旨趣を述る。其意を得て有尤今に聞ず、此上ハ相違有間敷、併上を重じ再び備前守に達す。井伊家へ招かるゝ由を述る。備前守聞て珍重なり、心ニ任すべしとなり。兩侍昭道に達す。此上ハ参らすべきと返書なり。其後妻子一同ニ引立出府す。則八丁堀弟忠兵衛宅え入、増上寺え参入す。豊嶋氏え国師対顔ニ及ばしめ給ふ。沢山へ発足ニ附て箱根の証文に至る迄豊嶋氏相計い、刑部水番を敬、当時己に水戸ニ居る仁たり、異方に招事高聞ニ達せんと言上申けり。源威公聞召、便然の至りなり、如斯の武功の士ハ他国よりも求ムべきと思ふ、自領より外へ出す事、曾是不可有、告知す事歓悦少すとの上意、因茲豊嶋氏昭道を増上寺え招て如是の上ハ御聴に達せし条本意なり、沢山への発足相叶ふべからず、此旨伊井氏え可達とて【83】留し、夫より八丁堀忠兵衛宅にして数日を送る。其後御当家へ仕へて額田に下着、知行六百石拝領、水戸町水門今の屋舗を下給り普請成就、一族此集ル。五拾人の鉄砲同心組是を預る。組頭本多喜左衛門・松本七左衛門兩人に申付る。鷹を好み惑時殿中にして餐応の上鶴鷹免許を蒙る。則ち鷹場高免の印書頂戴。在番江戸出府 源威公度々馬上意を蒙る上に、紀伊君聞召及れ尊前に召、屋形へも可来との懇切 上意を請け、過分の上意に預り丁寧の餐応下し給る。又時服白銀ヲ賜ル。水門屋敷或時出火、長屋出来、今屋敷を最初の普請悉く焼失、其後千石の加増給わる。寄騎六人額田武功の侍召置べきの旨 上意ヲ以

一 貳百石 大久保采女 一 貳百石 大関久左衛門

一 百五拾石 田口一矢 一 百五拾石 藤田修理

一 百五拾石 立花藤次衛門 一 百五拾石 軍司八郎

右六士の内久左衛門ハ大関氏の為に甥なり。往日仇讐有り。召置事不審と采女一道二訴。昭道怨を執る事恩を以てせよと云。風雅にあり筋目有一先ツ寄騎となし、時節を以て高聞に達ス。直参トすべしと常ニ伽とす。定道嫡子とふ謡等稽古。久左衛門ハ鼓、勘助ハ大鼓、近習小姓共に地を

謠せしむ。此節額田居住の節下野守篤道江府に於て死去、行年六十六才、法名善性。増上寺国師遷化の後ち勘介母義一同に下り昭道宅ニ居す。息数生す<sup>しやう</sup>出<sup>しやう</sup>二馬<sup>マイ</sup>。勘助或時増上寺ニ於て喧嘩の節、当人松平清六客殿へ履<sup>く</sup>の俣に上りて見廻り、当寺婦女を秘し置くと云る理外<sup>わい</sup>の危言、勘介傍輩ノ小姓安藤作蔵是を聞、何者ぞ御所の御菩提所へ来て憚所なく草履ヲ以て踏穢す条狼藉の至りと咎む。清六外三人世倅推参と云棄て縁を下り出る。作蔵聞て怒骨<sup>ど</sup>ニ徹して傍輩に向て逃てハ送らしと清六連テ跡より行を庭中にて押掛ケ切殺す。清六取て返し作蔵を抜打に【84】乍<sup>たちまち</sup>切落す。下馬迄出て馬引寄せて乗らんとする時、ふ運の竭<sup>つ</sup>たる処か袖躓<sup>つまづ</sup>踏<sup>つ</sup>乗る事叶わず。然る所へ勘助走り着てけさかけに伐倒<sup>きりたを</sup>す。是を見て増上寺の小姓若党大勢切て出て両士家頼主<sup>マイ</sup>を打せて逃け失せ跡方なし。依て増上寺に藉<sup>せき</sup>狼<sup>ろう</sup>あつて喧嘩に及と流布して、大名旗本寺院を取囲ム。御所尊慮善種々世上の雑説<sup>ざうせつ</sup>、国師奢恣<sup>しやし</sup>ニ因て沙門不当の刃傷造罪、寺中ニ火を掛け焼殺んと云ふ。或ハ遠流の沙汰、喧嘩出場の人数ハ残らず品川へ磔<sup>はりつけ</sup>の殿科と、専られ雑説取りくくに聞。国師ハ沙門なり。死事恥を思ハれすんバ不可有。速に生害に及べしとテ也。清六一類へ御下知の趣キ、喧嘩出場の面々へも御宥免の次第委細口上に尽す。国師を始安堵の喜悦少からず。故に勘介手柄ハ武州所々に於て隠なし。如斯の功を以て御当家へ官仕の願ひ三木仁兵衛を以て願といへ共当人病身にて終に昭道宅ニて病死す。昭道ハ常に諸鳥を愛し、依て一卷の鳥尽畫<sup>じしちやう</sup>(畫か)凶<sup>つ</sup>に写して伝ふ。時に昭道内室法名妙満院病床に伏し、寛永三年十月廿九日卒す。上宮寺明堅招き請け、歳六十四絶息閉眼の期迄仏像を拝し名号を称し終をとる。此節麟勝院と上宮寺葬送の諍論<sup>麟勝院ハ額田ナ</sup>一向<sup>リ又上宮寺米崎</sup>梅松院の次第妙満寺建立の縁起別記有り。爰に省略す。昭道善哲同十二月下旬江府在番、翌年二月下旬病腦を請非番也。法眼<sup>い</sup>医療験しなし。御聞ニ達し、雑賀孫市を以て御使者として御懇意を蒙り、道中昌蒲と云ル医師附て給り、心静に国に於て保養シ、今一度取直すべしとて水府へ下し給ハる。病症傷寒病中も肩に掛り、仏前に候して拝礼、同七年三月十三日卒去す。類<sup>たぐい</sup>齡六十三。代々水府に仕て武運長久子孫繁昌タリ。

### 常州多河郡櫛形の城の事并山野尾城の事

常州多珂郡昔多河と書。是ハ坂上に小河多ク有故也。友部邑、昔は伴部の郷と云。又<sup>とも</sup>櫛<sup>とも</sup>と云説左の如し。古老の伝説に、当村ヲ友部と云事ハ、【85】人皇八十代高倉院ノ御宇治承四年丁酉歳<sup>平相国清</sup>盛ノ頃川尻村国井浜へ主無き舟寄しが、其舟の櫛<sup>とも</sup>舳<sup>は</sup>より毎夜光物ありて、靈<sup>れい</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の上り玉ひしを今の<sup>平相国清</sup>櫛ノ宮大明神と祭り奉りしより櫛舳と云なり。今誤て友部ト書といへり。然れ共それより二百年計り以前に源の順といへる人の和名抄と云書に、常陸国多珂郡二郷八ツ有り、其一ツを伴部の郷といふとあれば、右の古老の説は用ゆるにたらざるに似たり。今友部と書事、惣して地の名又は苗字名乗りなどハ、其説ハ同しにしてさま／＼に書かへる事と見へたり。山直、山野又タ山能、山ノ尾なるべし。友部ノ山ノ尾と云ふ事ハ、当所ノ古城地、山ノ尾の形ちに似たり。故に、山野尾ノ城と号たる物なり。又タ八田ノ末葉か山直ト改、山直を氏と称したるが、其以前は伴部と号

し郷と言といへり。友部ハ元来大郷なり。砂沢・折笠・川尻・高原七ヶ坪友部親郷なり。藤坂ハ小木津ノ新田なりしが、高原分ヶ村の時高原村に組ミ入、今ハ八ヶ坪となるなり。高原友部より分村の歳ハ寛永五年なり。是ハ友部の何某四十歳計の時、本高原根本喜之衛門えと云人及七十歳に老人なり。此人に問て曰、貴老の祖父の御代の頃、友部よりの分ヶ村なるへし、何んぞ古き書にても無之やト問ふ。其人が曰ク、古記書物は無之候得共、我等少年の時祖父の物語りに、高原村友部よりの分村の年ハ寛永五年なり、里正ノ初ハ、台たいの鈴木雅樂ノ助なり。

### 櫛形山ノ尾両城の由来

常陸国多賀郡伴部ノ郷櫛形ノ城ハ矢田辺氏初て築くとあり。矢田辺氏ハ人皇五十七代陽成院の後胤なり。古記ニ曰ク、人皇七十三代堀川ノ院御宇長治元年甲申矢田辺氏築とあり。長治年中ハ八幡太郎義家ノ頃なり。当時文政九丙戌、右矢田辺氏何代程櫛形の城に居住したるや、知行高何程ニて有しや慥ニならず。以上長治年中より大図二百余年の間、櫛形の城主有や無や知る人なし。長治年中より大図二百余年を経て、櫛形の城主【86】ハ穴戸左衛門尉家時、其子家義、其子知時三代なり。乾元・嘉元ノ頃なり。將軍ハ久明親王也。按に足利尊氏誕生のころナリ。穴戸家の元祖は、左大臣藤原道家の孫宇津宮の坐主宗國、其子八田権ノ頭宗綱、其子八田左衛門尉知家也。頼朝奥州泰衡征伐の時千葉之助常胤と八田左衛門尉知家東海道ノ大将なり。又タ穴戸家政、和田合戦ノ時戦死す。建長二年將軍より命シテ老岐守家周穴戸ノ城主と成りといへり。家政戦死の年ハ知れず。建長二年ハ將軍頼朝の四世頼嗣なるべし。宇津宮弥三郎左衛門尉朝宗ハ八田宗綱の弟なり。八田宇都宮と両家に分ル。山直孫次良道胤甲斐守ニ任ヌ初て櫛形の城主ト成ル。古記に人皇九十七代光明院貞和四年戊子ノ年、通胤櫛形の城主トなるトあり。貞和四年より前、建武三年通胤佐竹貞義に従ひ那珂一族と戦て有功。那珂氏ハ官軍に従ひ、佐竹氏ハ將軍家に属す。通胤軍功有を以て佐竹より櫛形の地を与へらるゝと見へたり。通胤姓ハ藤原、鎮守府將軍俵藤太秀郷十七代の胤レ後なり。又タ太田三郎左衛門尉行通代々常州久慈郡太田ノ郷馬場の地に住す。通胤ガ母ハ佐竹六郎義冬ガ女メ也通胤十二世ノ祖藤原通延、太田ノ太夫と号す。始て常州太田ノ城を築。通延の子薩都のぶノ宮に住す。薩都ノ四郎太夫ト号す。一ニ荒太夫と称す。名ハ通成、奥州十二年の戦ひに功あり。今に薩都さつとノ明神に配せ祭るとなん。

### 櫛形二代目の事

正通実ハ通胤ノ弟なり。通胤ノ為嗣、建武三年尊氏新田義貞に逐れて九州へ奔ル時、佐竹掃部介師義・尊氏に従ひ行て九州に趣ク。山野正通モ同ク九州へ従ひ行と云。

### 山ノ尾城開基

三代目通治、下野守ニ任ス。通治武州鶴見合戦つるみに佐竹氏に従ひ軍功あり。応安三年庚戌に北の新城を築ク。応安三より当文政九丙戌迄【87】是を山ノ尾城と云故、櫛形ヲ今に至て古館と云。通

治法名ハ常嚴居士、菜塚・法鷲院兩寺の開基也。川尻館山権現の棟札に、応永五年下野守通治御病氣祈禱護摩とあるハ即ち此通治の事成べし。古記ニ曰、櫛形の城主ノ代、先年より有来ル真言寺、鬼門ニ当に附菜塚山普門寺を御建立なり、京都より下向ありし海畔上人と云名僧ヲ開山住寺とす。其後下野守通治山ノ尾城を初て築、城の鬼門にあたつて今法鷲院へ、普門寺を引移し、大都二十三年過て、応永元甲戌大伽藍に建立なされ、地領ニ拾石寄附す。妙徳山法鷲院西福寺開山祖師は宥<sup>ゆう</sup>応<sup>おう</sup>上人也<sup>上人ハ大和ノ国ヨリ下向すと云へり</sup>。末寺は御国他領迄に百二十六ヶ寺なり。無本寺にして常法談寺。又夕石神小野崎の先祖ハ大織冠鎌足大臣ノ後胤鎮守府將軍俵藤太藤原秀郷ノ末流、下野少將公道長男、太田太輔通延にハ当国久慈郡太田中条の城を築き暫ク居城トス。其後小野崎の城を小野ムラへ築キ、夫ヨリ小野崎と改む。爰にて門葉盛ん成事松柏の茂るが如し。中古に至り、那珂石神の城を責取り数世此城に繁栄せり。元来、当城は往昔建武年中<sup>わた</sup>中亘り新左衛門入道<sup>新田義貞ノ四天王ノ内ナリ</sup>の祖始て当城ヲ築キ、扱又同郡額田の城ハ元来佐竹常陸介義繁次男彦次郎義直築キ、後世ニシテ江戸但馬守道勝為に落城す。夫より江戸氏二男道栄額田ノ城主トなる。数代此城に栄へたり。当主下野守昭道ハ石神越前守道長とハ従弟同士なり。又夕通考は友部山直山城守三男石神ヲ嗣。此人與三郎道林軒通考ト号す。葵の宮に隱居せり。扱友部の城主山直通治二ノ弟通榮伊勢守ニ任ス。鶴見合戦に討死す。義道、通治三ノ弟三郎義道ト号す。額田小野崎ヲ嗣。今ニ水戸の家中額田將監の祖也。四代目通郷、山城守ニ任ス、又文溪ト云。明徳ノ頃ノ人なり。五代目通慶、掃部介ト号す。折笠村二三郎大自在天神宮あり。其棟札ニ、

大檀那小野崎掃部介撰州藤原朝臣通慶

施主 同 嫡子 宮松丸

【88(1)】奉行 武石將監

別当 福善院<sup>是ハ寺なり今ニ屋敷跡</sup>

大工 宮田助太郎俊元

鍛冶<sup>かし</sup> 御梅四郎衛門

天文十六年丁未三月二十二日再興

応仁元丁亥年 天神宮建立なり。此時代誰レ建立ト云事不知。

応仁元丁亥歳ヨリ文政九丙戌マテ三百五十九年ニナル。

天文十六年丁未歳ヨリ文政九丙戌マテ二百九十五年ニナル。

六代目通綱、山城守<sup>以下代々山城守に任す</sup> 通綱佐竹義憲<sup>のり</sup>に仕ゆ。義憲後に義仁ト改む。佐竹家譜に延徳元己

酉の歳佐竹義治小野崎合戦ニ敗北す。小野崎通綱主君義治にかわり討死す。故に其子ニ別地

七百貫与へ石神の城主となす。

頼祐、通綱の弟也。幼名ハ宰相ト云ふ。修験と成。長谷密藏院裕慶阿闍梨是也。



折笠村

天宮今の別当 伊師町村宝鏡院と云修験なり。

東国太平記 卷の十終り

【88(2)】

東国太平記 卷の十一

### 山野尾七代目の事

七代目憲通<sup>のり</sup> 山城守三郎と称す。法名慶田。

通定 憲通の弟也。介川将監ト号ス。

通考<sup>マヤ</sup> 通定の弟也。通綱にハ三男ナリ。

前に見ゆることく父通綱の功に因て石神の城主と成る。然れとも曾祖父通治の弟通房、己ニ石神小野崎へ移ルとあり。佐竹氏より加増を添へ通考<sup>マヤ</sup>をつかハし通房の跡を相続したるや否を知らず。

### 山野尾八代目

朝通 山城守法名玄峯禅通居士、文龜三癸亥七月卒ス。杉の室大雄院開基なり。

直通 朝通の弟ナリ、初メ南小幡ニ住ス。初メ又三郎と号し、後に筑後守ニ任ス。直通、延徳年中滑川小幡へ移り相賀の浜を兼て領す。相賀ハ会瀬也。

### 山野尾九代目の事

親通 山城守一二大和守。

太湖山東泉寺の開基也。今の平善寺より移すといふ。太湖山東泉寺ハ、元櫛□城の南ニ般若屋敷といふ所あり。此地に善東庵といふ小寺有。櫛形城主の時代西にあ「」の上に円心屋敷といふ所有り。案ルに円心ハ住寺の僧か、今俗にゑんし屋敷といふ。此地へ善東庵「」【89】移し菩提寺と無<sup>マヤ</sup>すト。其後下野守通治、応安三庚戌歳ニ築キ山ノ尾城と名ツク。又城の西□当て小高き山へ円心屋敷より善東庵を引移シ、機峯山平善寺を開基す。善東□□バ脇寮とす。又其後、山直家九代山城守親通ノ御代、越前国永平寺十三代玄室□蓬<sup>ほう</sup>和尚と云ふ名僧此国へ下向有て、山部村の前なる山へ御籠りなされ坐禅す。今ニ坐禅□□大島の西南ニあり。大島といふハ友部村ノ坪名なり。

甚タ薬師を御信心ありといふ。薬師ハ山部村長楽寺へ移す。薬師堂ハ坐禅山の少し西ニあ

り、今長樂寺へ奇附ス。親通卿和尚に帰依なされて永正二乙丑歳平善寺を川上へ引移し、太湖山東泉寺を開基し、伊蓬和尚を開山として寺領門前にて三拾石井ニ続きの山を奇附して菩提寺トす云々。

親通卿ハ天文十二年丙午ノ二月朔日遷化す。

開基和尚ハ天文十五年二月二日卒ス。

永正二年ヨリ天文十二年迄三十九年ニナル。

天文十二年ヨリ文政九丙戌年迄二百八十二年ニナル。

天文十五年ヨリ文政九丙戌迄二百七十九年ニナル。

親通卿、法名智翁善俊。

源ノ家康公御誕生ノ頃なり。

### 山野尾十代目の事

通載 山城守法名綱岳禪宗。

### 同十一代目

成通 三郎と称す。小場氏の女を娶るに成通いくはくもなふして卒ス。

女主 成通の室小場氏なるべし。成通嗣なきにより寡婦にてしはらく城を守る。成通の弟又三郎といふ人後見すといふ。末に見ゆ。

伊師本郷村堂山觀世音弘治二年丙辰十一月十七日入仏

大檀那藤原氏女子

同村稻荷社造宮永禄二年己未十二月吉日遷宮

大旦那藤原氏女子

当山觀世音當時潰ニ成り今ハ其地村の墓所となる。

五靈稻荷明神 此地今ハ庵屋敷と成る続キ西エ杉山有此内ニ古キ社アリハ、上の宮ト云。前の内ノ上の稻荷明神ハ下の宮といふ。先年ハ

二ヶ所なれ。然る所御屋形黄門公様御代ニ二ヶ所共ニ御潰ニ相成候。其以後ハ伊師町村の愛宕権現を伊師三ヶ村の鎮守に被仰付依て愛宕山権現を奉尊敬。併伊師本郷にてハ下の宮稻荷明神伊師浜にてハ諏訪明神ヲ隠し宮にして時々参詣す。然るニ寛政二年庚の頃二代目ノ藤兵衛五十才計りの頃 文政丙戌マテ三十七年程前 下の宮稻荷明神ヲバ寺社御役所様「 希上ケ御見濟宮と相成、其後ハ年々寺社御役所人様御廻り被成候。上の「 】【90】五靈稻荷は潰レに相成ル。伊師浜諏訪明神ハ只今以テ隠し宮となり。伊師本郷昔往伊師村と云。万治二年の頃三ヶ村に分ル。伊師村ハ親郷と号て伊師本郷、「 」「町、伊師浜と三ヶ村に分ル。元ハ庄屋も耆人なり。今は三ヶ村ニあり。

何某案するニ、藤原の成通の娘か、但し又成通の後家の事か、後家ならハ小場氏ノ女と記すべき也。婦人ハ夫の姓を称せず父方の姓氏を称すべきなり。

政通 成通の弟又三郎美作守と号す。

已二前にも見ゆる如く女主の後見をなし山野尾の城に居る。

永禄八年小田原ノ北條ト合戦に佐竹に従ひ上杉輝虎に加勢し戦功ありて感状を賜るといへり。

### 山野尾十二代目の事

義昌 後に昭道と改むといへとも世にハ皆山野尾義昌と称す。今近隣の人三歳の童といへ共其名を知らざるハ稀なり。

義昌実ハ佐竹大膳ノ太夫義篤の二男、一にハ義舜の三男なり共いへり。永禄三年庚申山直家の養子と成る。案するに、女子某氏永禄三年稻荷社造営の事、猶又後見政通永禄八年出陣の事、有時ハ義昌養子の事も彼の女主と政通と存生ノ時佐竹より申請たりと見ゆ。然共、已ニ成通の弟に政通といへる勇士ありけるゆへしハらく女主を立て政通を後見と成り、其後佐竹より義昌を養子として山野尾跡をゆづる事何の故といふ事を知らず。

徳田村大森氏の説に、義昌初め府中常陸の大掾定国の養子と成り、名を昌榦ちんけんと称す、しかるに昌榦大掾家の家老某成者ヲ手打にせし故、家中皆不和なるにより又佐竹に帰り、其後山直の城主成通よつとの嗣ついでとなり、はしめハ三郎と称す、後に山城守昭通あきと改め又義昌ト称すといへり。

古記に、義昌山直へ入らるゝ時、本家佐竹より知行を添へ後見としてつかハせる家中のあらまし左の如し。

大森弾正 鈴木外記 佐藤豊後

根本筑後 茅根與市 鈴木修理

梶 越前

一説に梶氏ハ佐竹より付人にあらず、初より山ノ尾ノ家老なるが此時佐竹より加増を添られたりといふ

猶又此外にもあらんか。是等ハ皆元来佐竹の譜代家なるを、各其次男ヲあらたに知行を付義昌へ附られたりといふ。

右の外、山野尾古来の家中四人をゑらひ佐竹より面々加増、同く義昌の後見と頼まれしと也。其時四士ト称せられ大身左の如し。

### 【91】

小野崎兵庫通孝 伊師佐渡通平

久我谷伊勢通信 武石周防通常

以上拾老人皆佐竹の供して慶長七年国替の時羽州秋田へ下る。右の人々佐竹より知行或ハ加増あり。知行ハ大底三百高成べし。此時はしめて山直家も盛んなりと見ゆる。

古記に、愛宕山権現今ハ伊師町愛宕権現の社ハ義昌建立天正四年丙子四月廿四日遷宮せんぐうとあり。義昌山直へ入られしより十七年目也。当時文政九年迄二百四十九年ニ成ル。国志に山野尾義昌某の年佐竹氏より

打手トして大塚氏を攻む。大きに極楽寺と戦ふとあり。

古老の伝説に戰場ハ白子山三本松也。佐竹勢ハ愛宕坂ヨリ、山直ハ白子山ヨリすゝむト云。前書に見ゆるごとく奥州会津の城主あしな盛隆、天正十三年伊達政宗と二本松合戦の時、佐竹義宣より加勢として山直義昌をつかハシ、時に義昌はからさるに陣中にて急病、其夜の内に頓死せらるゝニより、会津方にもさしも頼ミおもハれし義昌死去せらるゝにより、従ひ来ル兵共、皆本國へ帰るべければ、相残る面々計にてハ、聞ゆる伊達の強敵ト牛角の戦ひ叶ふましとて、各会津へ引退キけるとなり。

山直古老とももの説にも、義昌卿の尊骸をバ山直へ引むかへ、今の平善寺へ葬り奉といへ伝へたり。義昌卒シ給ひし日ハ天正十三年乙酉十月十四日、天栄ト号す。山野尾義昌初て山直へ御入有りしハ永禄三年ヨリ天正十三年迄ハつか二十五六年。

### 山ノ尾十三代目の事

宣正 山ノ尾三郎と号す。実ハ東中務太夫義久の子なり。

義昌卒して子なし。山ノ尾跡絶んとするより一家中の願にて佐竹の命を受け、東氏の子ヲ山直の後とす。故に宣正ハ敢て義昌の養子にもあらず。義昌の跡ハ先ツ一度は絶へたる同前といへとも、宣正又後ニ義昌と名乗るト見へたり。

先年奥州菊田郡上遠野円通寺記録の写しを見るに、佐竹常「」の弟、常州山直の城主萬治郎義正、天正十六年菊田郡滝村亀岡の「」【92】駒木根右近信重が居城に攻め入る。時に信重が一族篠小田式部六十騎計に□山ノ尾氏か陣場を打払ひ、二百騎程打破り、直に義正を討取り己「」。是によりて義正が大馬の印、生絹に日の丸の旗を分取して今に於て是あり。義正が家臣鈴木角衛門重久が鞍并鎗おなしく円通寺ニ納め伝るといへり。義重の弟義正とハ即ち前の宣正の事成べし。佐竹系図に義重の弟義正といふ人見へず。思ふに義正宣正名乗り相似たりニより伝者誤りたるものならし。若シ又義正後に宣正と改めたるものか。

又山直記録には、山直源次郎奥州上遠野にて戦死す。滝村建立寺に墓ありと見ゆ。これ又宣正の事にや。

### 山野尾十四代目の事

隆政 此君に至て山直の氏十四代、城廢して跡絶たり。此君佐竹左遷の供して秋田へ行。佐竹壱岐守義知卿申て、知行高二万石領して在所羽州秋田ノ新田ニ今にあり。此君即ち、先年常州多珂郡友部ノ城主山野尾義正卿の子孫と申伝へり。秋田より写し来る山ノ尾義正系図に見ゆる隆政実ハ向ひ豊前守某の二男にして山直宣正か跡を続クとあり。隆正も後に義正ト名乗。又佐竹義正と名乗る。

### 常州多河郡山野尾城主の事并坂上館持次二山ノ尾家中附の事

常陸国多河郡伴部村<sup>今ハ友部ト書</sup>櫛形の城主、往昔陽成院ノ後胤矢田部山直氏堀河ノ院ノ御宇当国え下向す。当国司え僅<sup>わか</sup>ノ縁有る故ニ長治元甲申歳右ノ山え築、号ニ櫛形ト一、在リ二居住一。其領地ノ境界は南ハ鮎川、北ハ花貫河、西ハ高鈴山豎破山ノ大沢迄、其高永錢四千貫、皆佐竹の幕下なり。此内千八百貫は山野尾領す。天正年中にハ田尻より南ハ城主あり。伊藤和泉守田尻ノ館此人領すト見へたり。小野崎左衛門滑川小幡ノ館<sup>此人石神ヨリ移ル</sup>会瀬ヲ領す。小野崎立鹿宮田薩埵寺ノ館宮田を領す。新城七郎助川蓼沼<sup>た</sup>の館助川を領す。小野崎筑後守会瀬館住す。此仁滑川・宮田・助川・会瀬三四ヶ村の内ヲ分テ少々宛領すか。是より成沢川南ハ、佐藤右馬ノ亮油繩子小豆洗の館に住す。前書の通り領す成べし。孫沢権太夫下孫孫沢の館ニ住す。大久保口賀守大窪の館に住す。金澤長介金沢の館に住す。宇佐見三九郎□【93】館ニ住す。岡部五郎大森の館ニ住す。皆佐竹の幕下なり。凡山直の家義昌に至りて甚た盛んに其名も高かりしか、不幸ニして「陣中にて病死せられ、中にも宣政・隆政たましく其家が続キしといへとも、是又不幸にして戦争世に生れ、且つ、山直の家廢亡の日ニあたり、治世いくばくもなく、若して干戈の戦ひ運つたなく戦死といへとも、此二君の事ハ知る人も少し。併前書に見ゆる羽州秋田にて佐竹老岐守友部山直の城主と云ひ伝ふるなり。

抑友部の城主、はしめの山直甲斐守通胤より隆政に至りて十五代、若シ女主ヲ除時ハ都て十四代、初めの貞和四年より慶長七年まで大凶二百五拾余年成べし。山直氏小身なりといへ共、さすか御城下の事成ば、友部の里モいと賑々しく、文政今に至て二百二十余年、草来深き野村となり、故城ハ荒れて離々たる禾黍<sup>くはしよ</sup>、春は菜の花に胡蝶の霏めく事、おもへは夢の世の中なり。只今小蝶のひらめくも夢なれハ、彼の二百五十年が間城下の繁華に家中鐘印<sup>ひび</sup>を閉めかせしも亦夢なればさめにける。ともかくにも定メなきハ世の盛衰そかし。去れバ杉の室大雄院連<sup>れん</sup>山禪師の詩に

世移人去跡空遺 独立斜陽感盛衰

城郭還荒不如故 孤蓬棋木尽傷悲

右 交易連山禪師

連山ハ交易和尚の表徳なり。右の詩帰蔵采逸集に見エ題ハ蕪城夕陽東泉寺六景ノ一ツ也。

### 鹿嶋三郎成朝友部河ニテ討ル、事

天正十八年七月、鹿嶋三郎成朝佐竹義宣に従ひ奥州の一揆ヲ退治として下る時、友部山野尾義正の城に二三日逗留しける所、義正遠来の美味ヲ尽し酒宴饗応限りなし。酔狂しける折節残暑強ければ、家中を初メ川へ入暑を凌かんとす。鹿嶋三郎運の尽、義宣の謀を夢にもしらす、左「」山野尾と牒じ合、家臣等に得ト云含メ合図を定め置、三郎河へ入所「」【94】鐘長刀を持て一度にどうと撻て菟り、何なく鹿嶋三郎ヲ討取りける。三郎□家臣共大きに驚き四方へ逃る者もあり、或ハ佐竹・山野尾の両勢「」かかり、命限り戦て枕を双て討死す。因て三万三千石を城

忽二亡ニける。無慙なるかな死骸をバ、法鷲院の三町計り北道端なる松山へ葬り、鹿嶋大明神と祭りけるが、其後潰レ宮となり、今ハ法鷲院へ引地となり、今以十一月十五日二年々祭りなり。陣鐘ハ法鷲院へ納り今にあり。其鐘の銘、鹿嶋大明神あり。此鐘下総より鹿嶋へ上り候を三郎持来る者なるべし。又鐘鑄替へ候共鹿嶋大神宮と銘を鉦附ルなり。扱て友部の鹿嶋山の松今に二夕戻となる。不思議なる事なり。鹿嶋三郎の子孫鹿嶋主馬と云神官惣大行司とて今に鹿嶋に有とらん。

東国太平記 卷の十一終り

## 東国太平記 卷の十式大尾

### 山野尾家中并知行附の事

- 一 永錢三拾貫 黒澤右衛門尉 是ハ黒澤伊予守末孫
  - 一 同 三拾貫 根本八郎
  - 一 同 拾六貫 大和田重郎
  - 一 同 拾六貫 石神孫九郎
  - 一 同 拾三貫 鈴木新介
  - 一 同 拾三貫 赤津藤内
  - 一 同 拾三貫 大森平内
- 右七騎其外扶持切米迄十八人合二十五人南小幡こはたヨリ御供也。右の城主漁舟ニ付御用立申す者ニハ遠藤・坂本・才藤の土色々御用立。
- 一 小野崎筑後守 従ニ佐竹ニ一領地七拾貫相賀ノ浜にて申請「」内こに成る。是ハ里野宮末流山野尾小幡一流也。

### 【95】

- 一 永錢五拾貫 小野崎兵庫頭
- 一 同 三拾貫 是ハ先年御東台ヨリ出テ山野尾一家「」今羽州秋田郡久保田ニテ小野崎庄九郎と「」兵庫頭末葉ナリ
- 一 同 三拾貫 石佐渡守 内十二貫佐竹ヨリ、是ハ石井左近之口通信ノ末葉ナリ
- 一 同 三拾貫 久賀谷伊勢守 是ハ先年江戸但馬守家中久賀谷大膳ノ弟也
- 一 同 三拾貫 竹師武石因幡守 是ハ先年櫛形ノ家中也。依之義昌代マテ右四臣ト云フ也
- 一 同 三拾貫 大森弾正 内五貫佐竹ヨリ申請ケ、山野尾ノ家中也
- 一 同 三拾貫 梶越前守 内五貫佐竹ヨリ申請、田尻村出生ナリ

- 一同 式拾五貫 茅根與市良 内五貫佐竹ヨリ申請ル
- 一同 式拾五貫 鈴木内記 内五貫佐竹ヨリ申請、佐竹ノ家中大手口ニ居ル
- 一同 式拾五貫 佐藤豊後守 内五貫右同断
- 一同 根本筑後守 右同断
- 一同 鈴木修理 右同断、右七人佐竹殿ヨリ地領申請
- 一同 椎名和泉守 足利家ヨリ出タリ
- 一同 式拾貫 勝間田小衛門 是ハ田中郷十二騎ノ大将ナリ、神台ニ住ス
- 一同 式拾貫 佐川刑部 是ハ山中郷十二騎ノ大将ナリ
- 一同 拾五貫 鈴木日向守 先年かたひら小屋合戦ノ時忍ノ手柄アリ
- 一同 式拾貫 櫻村太郎三郎 是ハ二階堂播磨守末流也
- 一同 拾貫 大内内藏ノ丞
- 一同 拾五貫 天倉周防 是ハ櫛形ヨリ相伝ル家中
- 一同 鈴木六郎左衛門
- 一同 福地治三郎 是ハ佐竹ヨリ殿附ノ人ナリ
- 一同 式拾貫 岡部弥市衛門 此人郷士頭「」
- 一同 拾五貫 櫻井右衛門尉 是ハ佐竹ヨリ殿付ノ「」
- 一同 佐川庄太郎 此人御町奉行「」
- 【96】
- 一同 式拾貫 大森豊前守 是ハ郷士頭
- 一同 戸村左兵衛 此人佐竹ノ家□
- 一同 武石林之助 右同断
- 一同 小野崎三郎治 右同断
- 一同 佐藤結城 右同断
- 一同 野内越前守 是ハ大子月ノ居ノ城主成が没落後山野尾ノ客分トナル
- 一同 岡部尾張 同山野尾客分
- 一同 永山左近尉 右同断
- 一同 野内越後守 越前守舍弟山野尾客分ナリ
- 一同 海野新三郎 是ハ山野尾客分ナリ
- 一同 拾式貫 金森次三郎
- 一同 五梅権太郎
- 一同 海野安太郎
- 一同 介川兵部
- 一同 天倉清五郎

- 一同 宮田甚太郎
  - 一同 割貝清五郎 此人先年額田家中
  - 一同 長山權太郎 先年佐竹ノ家中
  - 一同 沼田六郎次 此人童子山ヨリ移る
  - 一同 鶴来丹波守 本苗向屋地
  - 一同 佐々木太次衛門
  - 一同 村山與市 此人竜虎山ヨリ出□
  - 一同 榎村安房 此人二階堂末孫
  - 一同 福地但馬守 是ハ町郷士十二騎ノ大将
- 【97】
- 一同 立花和泉守
  - 一同 折笠惣内
  - 一同 吉成出雲守 此人田尻郷吉「」伊守末流後ニ関氏ニ成る
  - 一同 日那部左衛門尉 此人相川口奉行ナリ
  - 一同 小林右京
  - 一同 石井和泉守 是ハ志津ケ原奉行也
  - 一同 関根八郎
  - 一同 宮田新九郎
  - 一同 鈴木甚蔵
  - 一同 根本豊後守
  - 一同 宮田河内守 此者御抱ノ大工ナリ
  - 一同 木田豊後 是ハ留鍛冶ナリ
  - 一同 白田出雲
  - 一同 檜山三九郎
  - 一同 大内加賀守 元来江戸但馬ノ家中
  - 一同 梶 圓西 此人御抱イノ絵師也
  - 一同 榎村但馬守 是ハ二階堂ノ末流ナリ
  - 一同 宇野兵部
  - 一同 椎名左近尉
  - 一同 大高若狭守
  - 一同 水庭若狭守 是ハ左近ノ丞末流ナリ
  - 一同 阿嶋石見 此人竜虎山ヨリ移る
  - 一同 瀧勘解由 是ハ山中郷士



一同 磯野掃部 此人小木津随心院幕「」又夕友部光円寺前ニモアル

【98】

一同 樫村圓書之介

一 扶持切米 介川徳太郎

一同 大平藤内

一 柴田對馬守

一 鈴木伊豫守

一 柴田石見

一 落合肥前

一 高橋五郎左衛門

一 樫村彦太郎

一 高橋出雲

一 篠原右京

一 大内左馬ノ丞

一 佐久間與市

一 扶持切米 火口内備後守

一同 是成内彌市

一 門間甚藏

一 渡野辺豊後守

一 鈴木對馬守

一 宇佐美七郎

一 根本外記

一 齊藤五郎三郎

一 遠藤佐渡

一 蛭田重藏

一 川野對馬

【99】

一同 木村右近 是ハ佐竹ノ家中山ノ尾エ移る

都合百壹騎

右ノ目錄は長治元ヨリ山野尾義昌卿御代迄テ有来者供是ニ書伝ル者なり。慶長七年佐竹殿御国替ニ付御供申者有。其外佐竹山野尾ノ家中方々浪人仕者ナリ。